埋蔵文化財調査報告書34

高 蔵 遺 跡（第24次・第25次）
瑞 穂 遺 跡（第５次）
春日野町遺跡（第２次）
正 木 町 遺 跡（第11次）

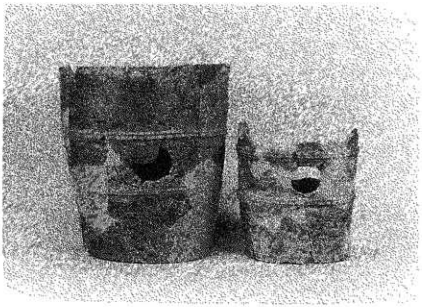
2000

名古屋市教育委員会

収録遺跡

高蔵遺跡（第24次・第25次）……1
瑞穂遺跡（第５次）……45
春日野町遺跡（第２次）……65
正木町遺跡（第11次）……81

高蔵遺跡（第24次・第25次）



第25次出土遺物

例言

1、本書は高蔵遺跡第24次及び第25次発掘調査の報告書である。

2、第24次及び第25次の調査地点、面積等は、以下の通りである。

第24次調査

地　　点　熱田区外十居町806

対象面積　約180㎡

調査期間　1999年8月16日から同年9月14日

担 当 者　野澤則幸、村木誠

第25次調査

地　　点　熱田区高蔵町1－1

対象面積　約165㎡

期　　間　1999年10月12日から同年11月26日

担当者　伊藤正人、伊藤厚史

3、本書は、第1章及び第2章を村木が執筆し、第3章は伊藤厚史が執筆した。なお、第2章の石器は、見晴台考古資料館の水野裕之が実測図を作成した。貝の水洗選別と同定、第2章第4節の貝層出土遺物についての原稿執筆は稲田望子が行った。遺物の整理、図面の浄書などは、担当者のほか、稲田、小浦美生、笹岡卓也、佐々木佳子、山本雅代が行った。弥生土器について、石黒立人氏のご教示を得た。

4、本書では、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を、海抜高はT.P.を用いている。

5、調査の記録、出土遺物は見晴台考古資料館で保管している。

もくじ

第1章　位置と環境

　第1節　位置と環境……3

　第2節　これまでの調査……4

第2章　第24次発掘調査報告

　第1節　調査の経過……6

　第2節　基本層序……6

　第3節　遺構と遺物……10

　第4節　まとめ……16

第3章　第25次発掘調査報告

　第1節　調査の経過……25

　第2節　調査区周辺の状況……26

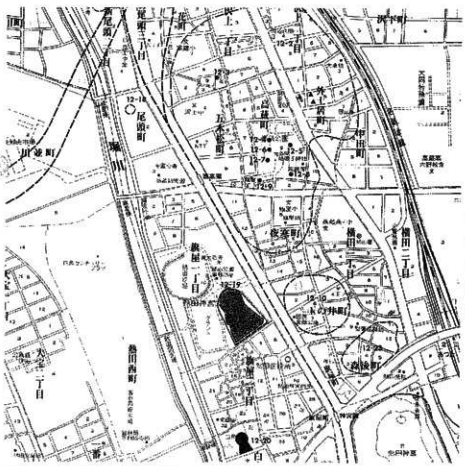
　第3節　調査の成果……28

第１章　位置と環境

第１節　位置と環境

現在の名古屋市の地形は、市域中央部から南部にかけての台地部、その西側及び北側の沖積低地部、台地部の東および南の丘陵部に大きく三分できる。この内、中央の台地部は、最終間氷期か、それより少し後の時期に堆積したと言われる熱田層からなり、熱田台地と通称されている。この熱田台地は、現在の金山駅付近から南に半島状に突出している。市街地化した現状からは想像がつかないが、かつて東海道が、この台地の先端の熱田湊から桑名へと海路でつながっていたことから伺えるように、江戸時代まではこの台地の下には海が入り込んでおり、この台地は、「あゆち潟」と呼ばれた海に突出した半島といった景観を呈していた。高蔵遺跡は、この半島状の台地のほぼ中央部に立地する。海抜高は７mから10mほどをはかる。

半島状に突出した熱田台地上には、弥生時代、古墳時代の遺跡が密集している。高蔵遺跡は、この台地部の中央に位置する大きな遺跡である。特に弥生時代については、前期から後期にわたって、熱田台地の拠点的な集落であったと目されている。高蔵遺跡の南にある玉ノ井遺跡、森後町遺跡も弥生時代の遺跡である。古墳時代については、高蔵遺跡で集落、古墳が見つかっている他、遺跡のすぐ南には、巨大な後期古墳として有名な断夫山古墳があり、その更に南には白鳥古墳がある。後述するように、高蔵遺跡では古墳時代後期の小規模な円墳、方墳が数多く見つかっており、こうした大規模な前方後円墳との関わりが興味深い。また、１kmほど北の東古渡町遺跡で高蔵遺跡とほぼ同じ時代の方墳群が見つかっており、更にその北には古墳時代中期から後期の大集落である伊勢山中学校遺跡、正木町遺跡がある。



第１図　高蔵遺跡と周辺の遺跡

第2節　これまでの調査

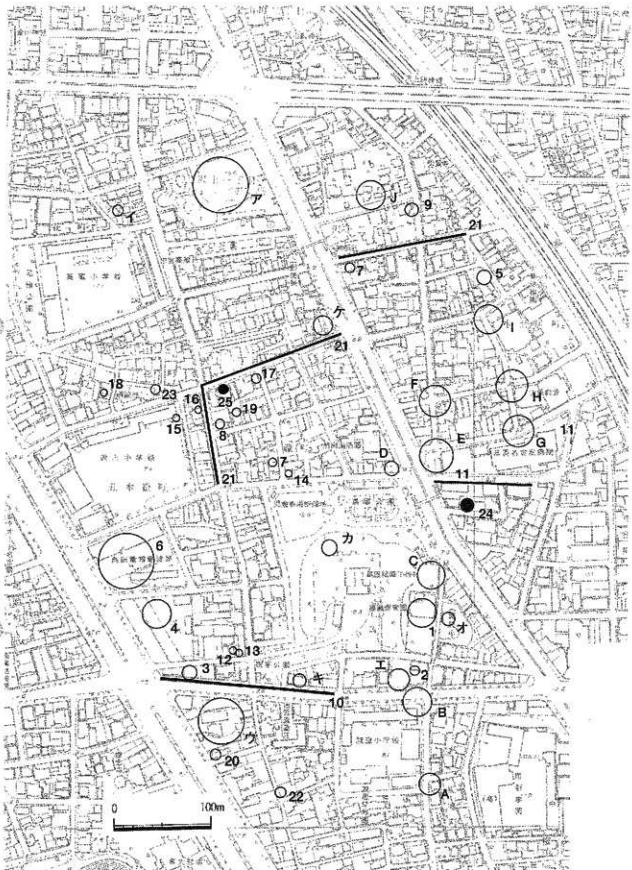
高蔵遺跡では、今回報告する調査以前に名古屋市教育委員会で23回の発掘調査を行なっているほか、様々な団体、個人によって調査されており、表1及び第2図に整理した通り、調査の回数は極めて多い。ただし、今では調査地点が不明となってしまった調査もあるため、表及び図には地点が特定でき、報告等がなされている調査を中心にまとめた。

弥生時代については、遺跡内各所で、環濠らしい溝と方形周溝墓が多く見つかっているが、遺跡範囲の南部が弥生時代前期の環濠集落域、西部が中期から後期の環濠集落域であると思われる。弥生時代中期末から後期の周溝墓は遺跡内の各所で見つかっており、集落域を取り巻いているらしい。

古墳についても、現在も墳丘が残っているものがある他、これまでの調査で、墳丘が削平された方墳が、かなりの数が見つかっている。高蔵遺跡の範囲の中央部に多い。これらの古墳の多くは、須恵器を出土する後期の古墳である。　一方、古墳時代の集落については、高座結御子神社の東側及び南側の地点（第2図のエ、オの地点）で須恵器を伴わない中期の住居が見つかっているが、古墳と同時期の集落については不

地図記号	調査年	調査主体	所在地	弥生時代	古墳	古代	中世
1	1961	市教委1次	高蔵町	前期前、後期周溝墓		竪穴住居	
2	1962	市教委2次	夜寒町	前期溝	埴輪	須恵器	
3	1967	市教委3次	五本松町			須恵器、瓦	溝、土坑
4	1969	市教委4次	五本松町	後期溝（周溝墓）	方墳		
5	1993	市教委5次	沢上一丁目	中期前、後期周溝墓			
6	1994	市教委6次	五本松町	後期周溝墓	方墳	土坑、溝	土坑
7	1994	市教委7次	高蔵町				土坑
8	1994	市教委8次	高蔵町		前期方墳		
9	1995	市教委9次	沢上二丁目	後期土坑			
10	1995	市教委10次	五本松町・夜寒町	中期溝			土坑
11	1995	市教委11次	外十図町	中期土器	須恵器		
12	1996	市教委12次	五本松町		方墳		溝
13	1996	市教委13次	五本松町		方墳、須恵器		井戸、山茶碗
14	1996	市教委14次	高蔵町	中期周溝墓			
15	1996	市教委15次	五本松町		方墳		
16	1997	市教委16次	五本松町	後期周溝墓、V形溝			
17	1997	市教委17次	高蔵町		方墳、須恵器、埴輪		山茶碗片
18	1998	市教委18次	五本松町				山茶碗片
19	1996	市教委19次	高蔵町		方墳、埴輪		
20	1998	市教委20次	五本松町	後期周溝墓	溝	土坑	土坑
21	1998	市教委21次	沢上一丁目他		溝、埴輪		
22	1998	市教委22次	夜寒町		須恵器		
23	1999	市教委23次	五本松町				大溝、青磁片
24	1999	市教委24次	外上図町	中期土坑	須恵器	土坑	
25	1999	市教委25次	高蔵町		古墳周溝、埴輪		
A		田中氏A地点		中期、後期土器、貝			
B		田中氏B地点		中期、後期土器			
C		田中氏C地点		前期土器、後期ピット			
D	1953、1956	田中氏D地点	南山大学	中期前、中・後期土器			
E		田中氏E地点		中期前、後期ピット			
F		田中氏F地点		中期土器、貝			
G		田中氏G地点		中期土器、貝	上師器、須恵器		
H		田中氏H地点		中期ピット、後期ピット			
I		田中氏I地点		中期、後期土器、貝、V形ピット			
J		田中氏J地点		後期V形ピット	十師器、須恵器		
ア	1999	南山大学	沢上一丁目				
イ	1993	高蔵遺跡（花町地区）調査会	花町		十師器、須恵器		
ウ	1985～1990	五本松町遺跡調査会	五本松町	中・後期方形周溝墓	前期方墳		土坑、山茶碗
エ	1985	高蔵遺跡発掘調査団調査会	夜寒町	前期前、後期周溝墓	中期竪穴住居	須恵器	
オ	1981	高蔵遺跡調査会	高蔵町	前期・後期土器	中期竪穴住居、土師器		
カ	1951	名古屋大学			横穴式石室、須恵器		
キ	1987	夜寒遺跡調査会	夜寒町	後期？周溝墓	古墳、須恵器、土師器		
ク	1988	沢上二丁目遺跡調査会	沢上二丁目	中・後期竪穴住居	須恵器、土師器		
ケ	1999	人類文研究所	沢上一丁目		須恵器		

表1　高蔵遺跡のこれまでの調査



第２図　高蔵遺跡におけるこれまでの調査地点

明のままである。

古代の遺構は、住居跡がわずかに見つかっている程度で実態は全く不明である。中世についても、古墳の周溝に対する造作や、鉄滓の出土など興味深い成果があるが、具体的な姿はまだ描けていない。

今回報告する調査地点の付近について簡単に触れておく。第24次の調査地点の北西約50mの地点が、田中稔氏の報告しているE地点、北東50mの地点がG地点である。E地点では、田中氏が、弥生時代中期の溝状の遺構を報告しているが、1991年に名古屋市教育委員会が立会調査を実施しており、田中氏が検出したものと同一と見られる弥生時代中期の溝を検出している。また、第11次調査は、細長い調査区のため、遺構が把握し難いが、弥生時代中期のピットなどが見つかっている。

25次調査地点の付近では、16次、18次、19次等の小規模な発掘調査が行われており、須恵器や埴輪を出土する方墳の周溝などが検出されている。この付近一帯が、古墳時代の墓域であったことが想定できる。

第２章　第24次発掘調査報告

第１節　調査の経過

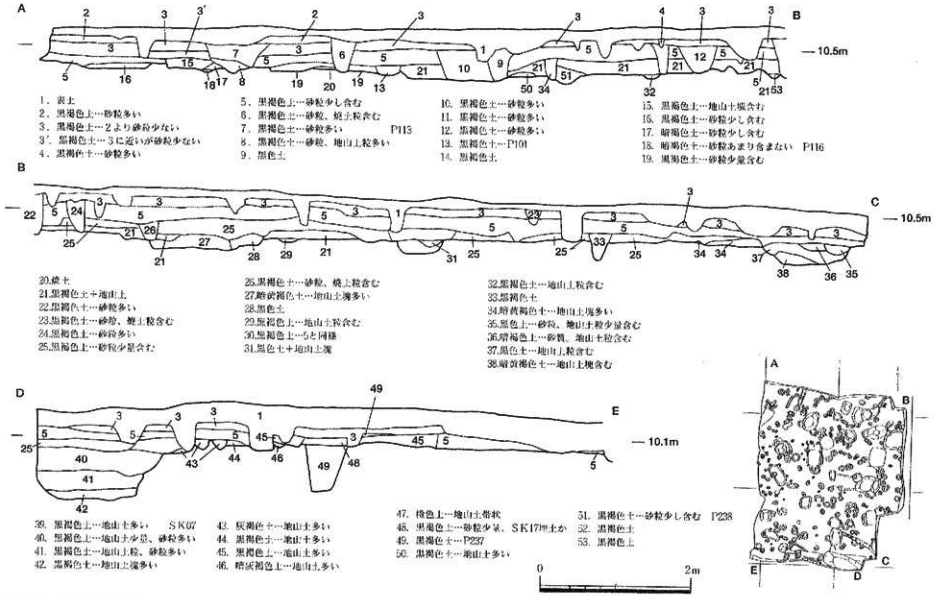
第24次調査は、住宅の建設に伴って実施した。排土置場の都合上、２回にわけて行った。調査区の東半分を前半区とし、８月18日から調査を開始した。前半区は、８月27Ｈまでに遺構実測、写真撮影を終了した。８月30日に、前半区を埋め戻すと同時に残りの西半分の調査を開始した。９月９日には後半区の遺構実測、写真撮影を終了し、10日に埋め戻しを行い、現地での調査を終了した。

なお、調査の際には、検出した遺構に対しては、土坑にはＳＫを、溝にはＳＤを冠した番号を、前後半通番で与えた。

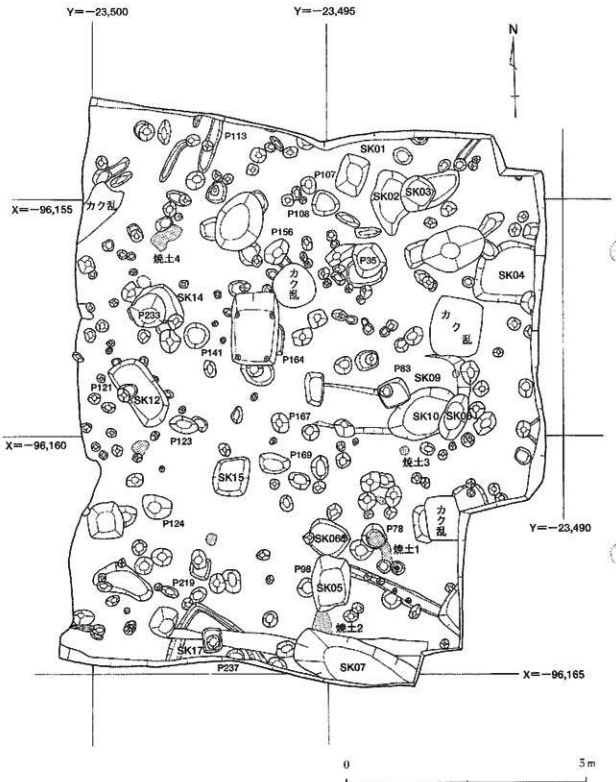
その後、見晴台考古資料館で遺構図面、遺物の整理等を行った。遺構については、番号は基本的には調査時のものを踏襲したが、焼土に関しては、報告のために焼土1から順に番号を与えた。遺物については、口径または底径が復元できるようなものは図化した。後述する通り、ＳＫ07から貝や獣骨などの自然遺物が出土しているが、量的にわずかであったため、すべてを採取した上、資料館で水洗選別を実施した。

第２節　基本層序

調査区の層序については、撹乱をうけていた西壁を除く調査区の各壁面で検討し、断面図を作成した。表土・盛土の下位は、0.4～0.5mの厚さで黒褐色土が堆積していた。砂粒や地山土の多さによって大きく４層に区分した。この細分は、あくまで確実に区分できるものを分けたに過ぎず、更なる細分も可能であろうし、黒褐色土に掘り込まれた遺構の見落しも多くあるものと思われる。特に、後述するように、重機による表土除去中に、この黒褐色土のかなり上位から、ほぼ全形を残す須恵器蓋杯等５個体がまとまって出土しており、何等かの遺構が存在したことを示唆している。しかし、黒褐色土に掘り込まれた遺構を検出することは困難であると考えて、遺構の検出は、この黒褐色土の下位の橙色粘質土（熱田層）で行なった。そのため、以下で報告する遺構は、熱田層に掘り込まれた遺構に限られており、本来存在した遺構の一部に過ぎない。



第3図　調査区壁面断面図


Y=−23,500
Y=−23,495
N
X=−96,155
X=−96,160
X=−96,165
Y=−23,490
P113
SK01
P107
SK02
SK03
P108
カク乱
P156
焼土4
P35
カク乱
SK04
SK14
P233
カク乱
P141
P164
P83
SK09
P121
SK12
P167
SK10
SK08
P123
焼土3
P169
SK15
カク乱
P124
P78
SK06
焼土1
P98
P219
SK05
焼土2
SK17
P237
SK07
0
5m

第4図　遺構平面図

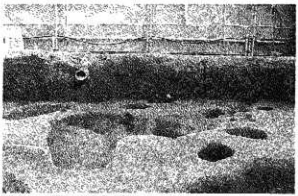


写真1　調査区北壁断面

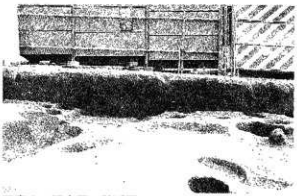


写真2　調査区東壁断面

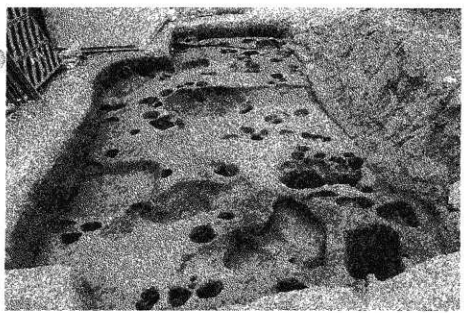


写真3
前半区全景（北から）

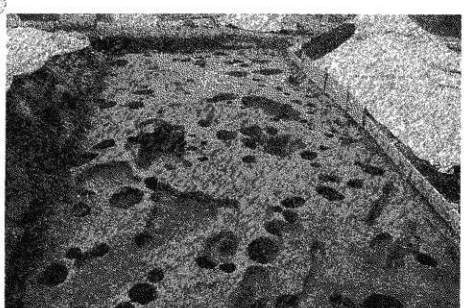


写真4
後半区全景（北から）

第３節　遺構と遺物

調査では、検出した順に、遺構の番号を与えていき、最終的には、ピットが220程度、土坑が17、溝が１という数になった。この中には、掘削の結果、撹乱や単なる地山の凹凸に過ぎないと判断したものもあり、またその遺構に属すると判断される遺物の出土がなく、時期の特定できないものも多い。以下では、時期の確定できた遺構を中心に報告する。

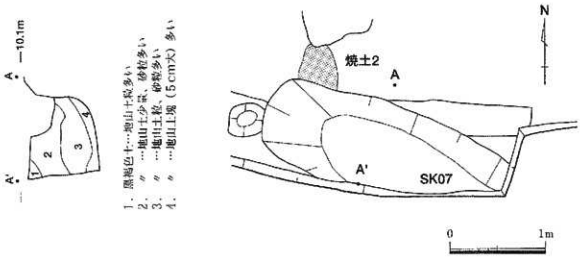
弥生時代の遺構

ＳＫ07（第５図）

調査区の南端で検出した。検出できた範囲では、幅が１ｍ程度、深さが0.8ｍ程である。調査区外へと続いており、溝状の遺構ではないかと推測される。黒褐色土を埋土としており、地山土粒や砂粒の量で細分した。

埋土の上位で少量の貝層を２ヵ所にわたって検出した。遺存状態は極めて悪かったが、すべてを採取し、水洗選別を行った。この自然遺物の詳細は、まとめに示した。

自然遺物以外には、土器と石器が出土している。土器は何れも小片ばかりで、本来この遺構に伴うもの



第５図　ＳＫ07

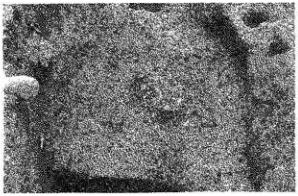


写真５　ＳＫ07内貝出土状況

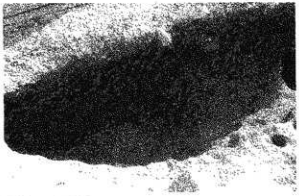


写真６　ＳＫ07

と判断できる遺物はない。唯一図化できた第９図１は、小型の台付甕の台部である。小片では、上層から須恵器、山茶碗などが見られるが、下位層から出土した遺物の内、時期が分かる物は何れも弥生時代中期の物である事から、この遺構は弥生時代中期以前であると判断する。遺構の性格については、判断する材料に乏しく、不明である。その他、埋土の上位から石鏃が１点出土している（第９図18）。

ＳＫ12（第６図）

調査区の西よりで検出した。長軸1.5m、短軸0.8mほどの楕円形を呈する。深さは、0.3mを測る。ちょうど断面図を作成した所に、ピットが３個も重なったため、埋土の堆積状況が明瞭とは言えないが、埋土は何れも黒褐色土で、上位には砂を多く含み、下位には地山土が帯状に含まれている。

埋土中から、弥生時代中期のものと思われる、遺存度が比較的高い台付甕（第９図３）と、深鉢の底部が出土した。台付甕は、低い台部と、その他の小破片も、時期がわかるものは弥生時代中期のものばかりであり、遺構の時期としても弥生時代中期と考えて良いだろう。

写真７　ＳＫ12土器出土状況

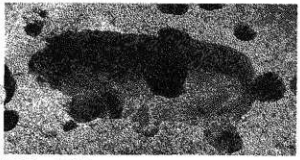
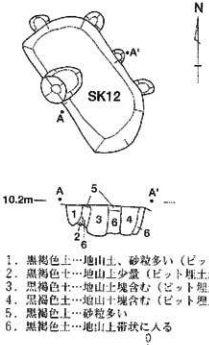


写真８　ＳＫ12



第６図　ＳＫ12

焼土１

前半区の南よりで検出した。P78と重なっており、このピットは焼土1に伴う掘り込みであろうと考える。焼土を覆うようにして、弥生時代のものらしい土器の大型破片が見られた。焼土の時期を示していると考えて良いだろう。

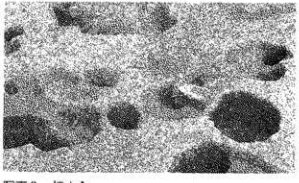


写真９　焼土１

焼土2

調査区の南端付近で検出した。SK07に切られている。よく焼けている。出土遺物はなかった。弥生時代中期と考えるSK07に切られているから、それ以前のものと判断されるが、調査区内で出土する遺物には、弥生時代より前のものはないため、弥生時代の遺構として報告する。

焼土3

前半区の中央付近で検出した。焼土自体は小規模なものである。焼土上から、胴部に櫛描文を持つ弥生時代中期の壺の破片がまとまって出土しており、これが焼土の時期を示していると考えて良いだろう。

古墳時代の遺構と遺物

P238

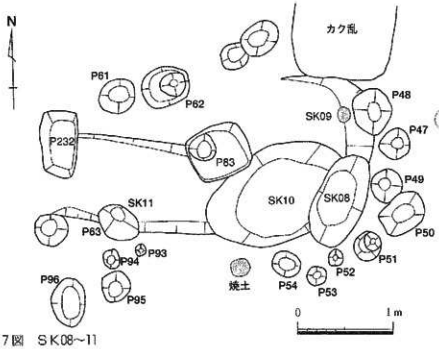
調査区の壁面で確認したピットである。断面でみると、黒褐色土を埋土としているが、地山面にはほとんど掘り込まれておらず、平面ではわずかしか確認できなかったが、古墳時代中期の小型壺がほぼ完形で出土している。

写真10　P238

古代の遺構

SK08（第7図）

前半区の中央部で検出した。当初周囲のSK09や10と同一の遺構かとも思われたが、精査の結果、複数の土坑が重なったものと判断した。長軸1m、短軸0.5mの楕円形を呈し、深さは0.3m程である。上師器の甕（第9図5）が出土しており、古代の遺構と思われる。



第7図　SK08～11

SK10（第7図）

前半区の中央部分に位置する。直径1m、深さ0.15mほどの円形の土坑である。SK08に切られているように見えた。出土遺物は、小片ばかりであり、図化できなかったが、須恵器の高台部分が出土しており、

それ以降の遺物はないため、古代の遺構と判断している。遺物からはＳＫ08との前後関係は検証できなかった。

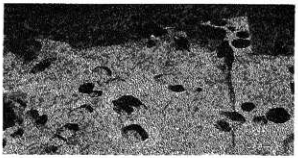


写真11　ＳＫ08～11

ＳＫ11（第７図）

前半区中央に位置し、ＳＫ10に切られているように見えた。ＳＫ10よりは浅く、検出面からの深さは0.1mに達しない。出土遺物には、ＳＫ10と同様な須恵器の高台があり、それ以降の遺物は含まれていないため古代の遺構と判断した。

Ｐ83（第７図）

前半区の中央、ＳＫ10に接する位置で検出した。直径65cm、深さ10cm程のピットである。地山上を含む黒褐色土を埋土とする。検出中にこのピットの上面から須恵器蓋（第９図９）が出土した。NN259号窯やK11号窯の出土遺物に類似しており、尾野善裕氏の編年［尾野1997a］のⅦ期古に比定できよう。

時期不明の遺構

調査で検出した遺構のうち、出土遺物等から時期が特定できたものは一部に過ぎない。

土坑やピットについては、出土遺物は小破片が多く、時期を特定する材料にはならない。ここでは、時期の特定できなかった遺構について報告する。なお、ピットについては、遺物の出土したものを中心に一覧表に整理した。

ＳＫ01

前半区の北端付近で検出した。長辺1.8m、短辺0.5mの長方形を呈する。深さは検出面から１mほどあり、極めて深い土坑であり、調査区内にはこれに近い規模の遺構はない。出土遺物は、弥生時代の土器が大半をしめるが、古墳時代中期の土師器らしい破片もわずかに含んでいる。古墳時代中期を下限とするものの、土師器の量が極めて少ない事から、重なったピットの見落としによる混入といった可能性もあり、時期は特定できなかった。

ＳＫ09

ＳＫ08の北側に位置する。ＳＫ09の東側の辺は直線的で、その壁に接する用に焼土が存在するため、竪穴住居とそれに伴う竈の痕跡かとも考えたが、プランからみて竪穴住居とは確定できないため、遺構の性格は不明である。出土遺物は小片のみであった。

ＳＫ14

後半区の中央やや北寄りで検出した。一辺１m程の方形を呈し、検出面からの深さは15cmである。複数のピットと重なっている。管玉（第９図21）が出土したＰ233は、ＳＫ14の底で検出できたピットである

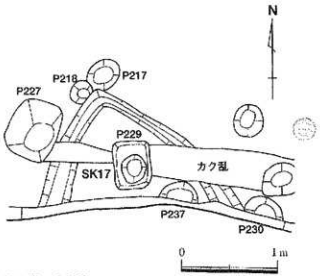
が、切り合いは不明で、確実にＳＫ14から出土した遺物は特定できず、時期は不明である。

ＳＫ15

後半区の中央やや南よりで検出した。一辺が75cm の方形の土坑である。深さは、検出面から６cm 程度と浅い土坑である。少量の地山土を含む黒褐色土を埋土とする。弥生土器、須恵器の小片が出土しており、古墳時代以降であるが、それ以上の特定はできない。

ＳＫ17（第８図）

調査区の南端、ＳＫ07の西側で検出した。コーナー部分のみが検出できた。周溝状の溝があり、竪穴住居の可能性がある。しかし、検出できた部分でも方形とは言い難い程度に歪んでおり、竪穴住居とは断定できなかった。この出土遺物は、小片ばかりであり、時期が特定できるようなものはなかった。



第８図　ＳＫ17

焼土４

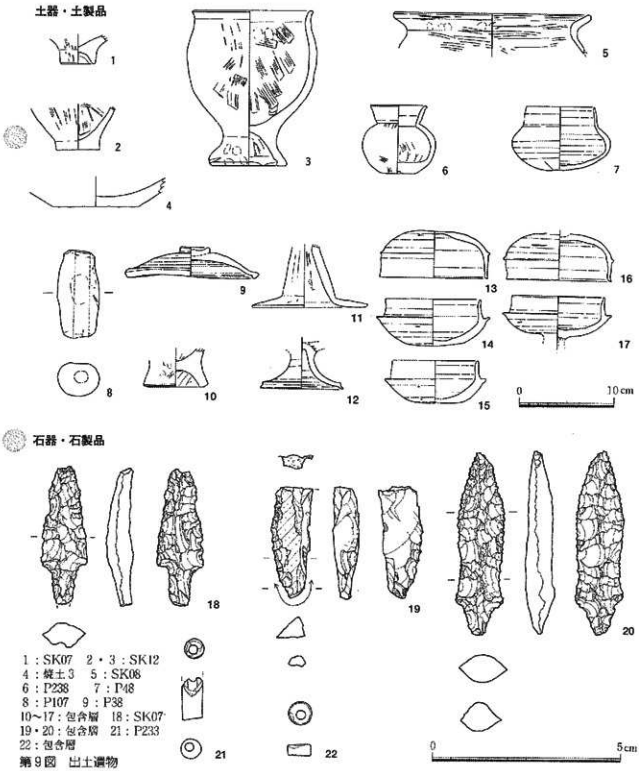
後半区の北寄りで検出した。規模が比較的大きく、よく焼けている。この焼土に伴うと思われる遺物はなく、時期は不明である。

ピット番号	位置	直径（cm）	深さ（cm）	出土遺物(破片の大きさは大中小に区分)	時期
35	前半区	70	50	土師器	古墳中期
78	前半区	50	5	弥生土器	弥生
83	前半区	65	10	須恵器、弥生土器	古代
98	前半区	40	16	弥生土器小片	不明
107	後半区	50	16	土錘、須恵器	不明
108	後半区	12	18	弥生土器中片	弥生？
113	後半区	30×100	9	弥生土器中片	弥生後期？
121	後半区	45	66	弥生土器小片	不明
123	後半区	60×30	45	須恵器小片	不明
124	後半区	60	50	須恵器、土師器	不明
141	後半区	55	20	弥生土器、土師器小片	不明
156	後半区	60	25	須恵器、土師器	不明
164	後半区	65	2	須恵器	不明
169	後半区	40×60	30	須恵器	不明
219	後半区	20×40	13	弥生土器中片	弥生？
233	後半区	70	4	管玉、須恵器	不明
237	後半区	40	73	須恵器中片	不明
238	前半区壁面			土師器小型壺	古墳中期

表２　ピット一覧

包含層の遺物

前述のように、重機による表土除去中に、黒褐色土の上位から須恵器蓋杯がまとまって出土した。周辺にはごく少量の貝殻の散布も見られた。発見した時点で既に原位置にはなかったため、どの様な位置関係にあったのかも不明であるが、重機によってごく僅かに掘削した土の中に含まれていたことから、集中していたと推測している。13や14、16などは、H11号窯やH10号窯の出土遺物に類似している［尾野1997b］。17は、排土からの採集資料であるが、上記の須恵器群が出土した日に採集したものであり、同一のまとまりに含まれていた可能性が高い。有蓋高杯の杯部である。これらの遺物は、何らかの遺構に伴う遺物であ



1：SK07　2・3：SK12
4：焼土3　5：SK08
6：P238　7：P48
8：P107　9：P38
10～17：包含層　18：SK07
19・20：包含層　21：P233
22：包含層

第9図　出土遺物

ると思われるが、熱田層までは掘り込まれておらず、黒褐色土中に築かれた遺構であったと思われる。しかし、黒褐色土中では遺構がまったく検出できなかったため、遺構について、何ら手掛かりが得られなかったのは遺憾であった。

その他、包含層中からは、弥生時代中期の土器、古墳時代中期、後期の土器等、石鏃、石錐（第9図19,20）等も出土している。弥生時代中期の土器は、小片が多く、図化できた物はなかったが、石黒・宮腰氏の編年［石黒・宮腰1996］によるⅣ期の凹線紋系土器が比較的多く認められた。また、石黒氏が1系と呼ぶ土器群も見られる。

第4節　まとめ

高蔵遺跡第24次調査では、弥生時代中期の土坑、古墳時代の土師器、須恵器、古代の土坑等を検出した。遺構については、あくまでも熱田層の上面で検出できたものに過ぎず、本来検出した数以上の遺構が存在したはずである。特に、調査区内では、遺構の内部にあるものを除いて、4箇所以上の焼土を検出しており、この中には竪穴住居の炉跡が含まれている可能性が高い。そして、報告した通り、これらの焼土の幾つかは、弥生時代中期のものと判断している。こうしたことから考えると、今回の調査地点は、明瞭な住居跡は検出できず、詳細な時期も特定できていないが、弥生時代中期の集落域であった事が推測される。焼土2からはⅣ期の凹線紋系の壺の破片がまとまって出土しているし、調査区全体にわたって、石黒氏の言うⅠ系およびⅣ系の土器が多く出土したことを考えれば、Ⅳ期を中心とする集落であると考えてよいだろう。

高蔵遺跡では、これまで山中稔氏のE地点などで、中期の環濠らしい溝が見つかっており、環濠集落であったことは推測できるものの、住居など集落に関わる遺構は、沢上二丁目（第10図5）での調査で、中期の竪穴住居が3軒ほど見つかっている程度で、まったく不明である。今回の調査の成果も、竪穴住居の存在が推定されるだけで、それ以上についてはわからない。今回の成果は、弥生時代中期の集落について考えるためには不十分なものではあるが、これまでの調査成果をまとめるために、他地点での調査成果とあわせて最後に検討を行う。

その他の時代では、古墳時代後期の須恵器がまとまって出土した。しかし、報文中でも述べたように、遺構についてはまったく情報が得られず、例えば高蔵遺跡で比較的多く見つかっている古墳に関連したものであるのか、住居等に関連したものかも不明である。数個体がまとまって出土しており、出土状況が明らかならば良好な資料と言えるだけに遺憾であった。その他、須恵器出現以前と思われる古墳時代中期の遺構や遺物も認められた。この時期の遺構は、今回の調査地点とは大津通を挟んだ反対側の高座結御子神社付近で竪穴住居などが見つかっている。

また、古代の遺構も検出した。今回SK08として報告した遺構の周辺では、同じく古代の遺構であるP83や、時期不明であるが焼土を伴ったSK09等を検出しており、本文中でも述べたように、これらが一連の遺構（例えば一軒の竪穴住居）という可能性もあるが、調査では明確にできず、別々の遺構と判断している。そして、個々の遺構の性格は不明である。

高蔵遺跡では、1次調査の際に奈良時代から平安時代の竪穴住居が検出されるなど、古代の遺構、遺物も

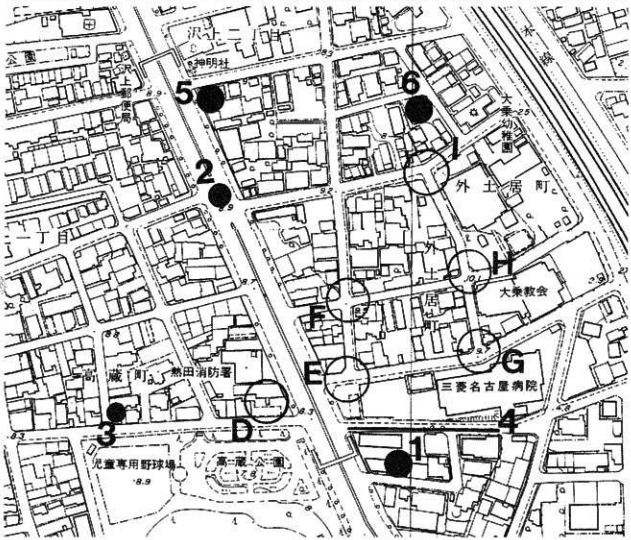
遺跡内各所で検出されている。しかし、古代については、遺構として残りやすい深い遺構があまり多くないせいもあって、弥生時代にもまして不明な点が多い。古代についても、更なる資料の蓄積をまたねばならない。

高蔵遺跡における弥生時代中期の遺構と遺物

今回の調査地点である大津通周辺は、かつてから弥生時代中期の集落の存在が推定されている［木村1997］。今回の調査では、竪穴住居は検出できなかったものの、炉跡らしい焼土から中期の住居の存在を想定した。この付近では、竪穴住居などの集落の遺構よりは、環濠らしい溝の検出によって集落の存在が推定されているのだが、実態は不明瞭である。ここでは、環濠、竪穴住居、方形周溝墓にわけて現状の資料を紹介し、弥生時代中期の高蔵遺跡を考える材料としたい。

環濠

第10図は、第2図の中から弥生時代中期の遺構や遺物が報告されている地点を抜粋したものに、立会調査の地点を加えたものである。今回の調査地点の北西50mは、田中稔氏がE地点として報告している地点



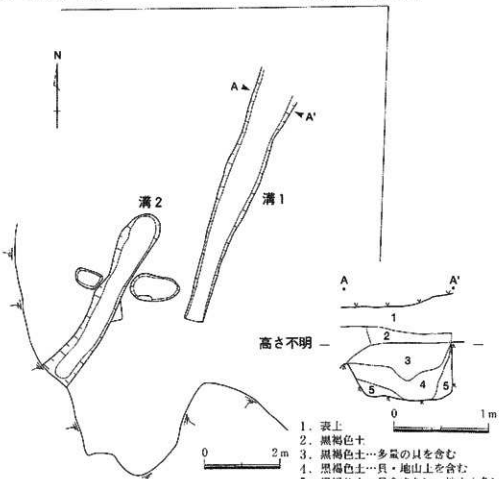
1　24次調査地点　2　立会調査地点　3　14次調査地点　4　11次調査地点　5　沢上二丁目遺跡調査会調査地点　6　5次調査地点　E～I　それぞれ田中氏のE～I地点

第10図　高蔵遺跡における弥生時代中期の遺構検出地点（1：2500）

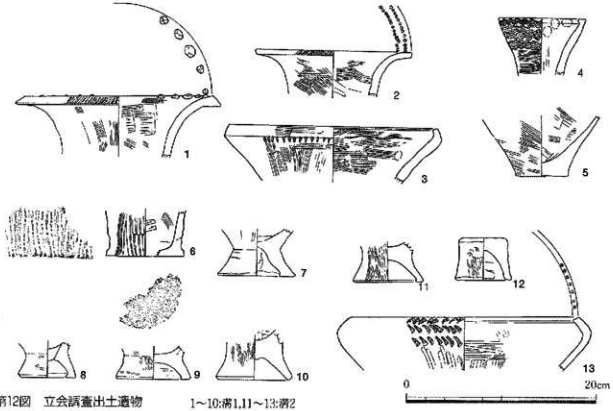
である。田中氏は、この地点で溝状の遺構を検出している［田中編1954］。同じ地点で、1991年に名古屋市教育委員会が立会調査を実施しており、2条の溝（溝1、溝2）を検出している（第11図）。この内、溝1は、田中氏が報告した溝と同一のものと思われる。最大幅は1mほどで、7mにわたって検出した。幅は上部をかなり削られた状態での数値であり、本来はかなり大規模な溝であった事がうかがえる。断面は

写真11　立会調査全景

写真12　立会調査溝1



第11図　立会調査平面図・断面図



第12図　立会調査出土遺物　　1～10:溝1,11～13:溝2

台形である。埋土は基本的に黒褐色土で、検出できた中では上位に貝を大量に含んでいた。

この溝１内から、第12図に示した弥生時代中期の土器と、ハマグリ、マガキ等の貝殻を含む自然遺物が大量に出土している。田中氏は、溝内の堆積を４層（田中氏の記述では第３層から６層が溝内の堆積になろう）に分けており、それぞれから出土する土器に時期差があるとする。田中氏によると、溝内の最下位層である第6層の出土土器が「貝田町式」、５層及び４層が「外土居式」、３層が「長床式」であると言う。土器の編年については、最近の研究によると、単純には田中氏の述べる順序とはできないため、最近の研究に対応させるが、石黒立人氏は、これらの土器群の中には、［石黒・宮腰1996］のⅢ期まで遡るものが含まれていると述べている［石黒1991］。

立会調査で出土した土器は小片が多い。また立会調査という制約のため、出土層位が明らかでないものも多く、田中氏が述べた溝内の堆積状況を検証することはできない。ここでは、溝１の出土品を一括して扱う。溝１の出土土器は多いものの、甕や壺の胴部の小破片が多く、図化できた個体は少ない。台付甕、深鉢、壺等を図化した（第12図、表３参照）。個々の土器の時間的な位置付けは難しいが、石黒氏のご教示によれば、３や４などのⅠ系土器も、Ⅲ期まで遡るものではないとのことであり、台付甕が目立つ事と合わせて考えると、石黒氏らの編年［石黒・宮腰1996］のⅣ－１期に属するものと思われる。

また、同じ立会調査で検出したもう一条の溝（溝２）も、検出できた規模は溝１とほぼ同じで幅0.7mほどで、溝１から1.5mほど離れて、良く似た方向を持っている。５ｍほどを検出しているが、北に向かって伸びていく様子はなく、立会調査地点内で終息している。この溝内からは、第12図に示した弥生時代中期の土器と、溝１と同様の貝などの自然遺物が出土している。土器には、台付甕の台部（11）、台状土製品（12）、壺（13、台付鉢か？）の口縁端部破片がある。時期的には、溝１と大きく異ならないものと思われるが、石黒氏のご教示によれば、台の形態などから見ると、溝1よりはいくらか後出のものであり、Ⅳ

…2期に比定できるのではないかとのことである。

これらの溝については、上位をかなり削平された結果であることは明らかであり、本来はかなり大規模な溝であった事がうかがわれる。特に、溝1は、断面が逆台形を呈しているが、想定される溝の規模や検出された長さから判断して、集落を取り巻く環濠の可能性が高いと考える。同様な規模でありながら、立会調査地点内で終息し、環濠とは言い難い溝2をどう考えるかという問題は今は保留せざるを得ないが、田中氏が報告する溝＝溝1については、環濠と推定してよいものと考える。

環濠埋没の時期は、出土遺物が埋没時期を示すか否かも決め難く、不明といわざるを得ないが、出土遺物に後期以降の物がない事から見て、中期の内に埋没したことは確かである。田中氏の報告した資料の中には、Ⅲ期にまで遡るものがあるとしても、立会調査出土遺物はⅣ－1期が中心であり、溝の埋没はこの時期に考えておきたい。

環濠の可能性の高い遺構は、第10図の2でも見つかっている。こちらは立会調査で、幅1m程度を確認したのみなので、遺構の形状も不確実で、溝でない可能性さえある。出土遺物は、貝と少量の土器のみで、時期や遺構の性格を考えるのは更に困難である。出土遺物は、弥生時代中期と思われる小片の他、土師器、須恵器らしい小片もあるが、溝状の遺構を切る別の遺構も断面で確認しており、採集した遺物がすべて溝のものとは限らない。こうした状況では確実なことは言えないが、溝の規模、E地点と同様、埋土中に貝が含まれていること（例えば古墳の溝などでは貝殻の出土は少ない）、弥生土器は中期のものばかりで、後期の土器は含まないことから考えると、中期の環濠の可能性が高いのではないかと考える。なお、こちらの貝については、細かくわれたものが多いが、採取できたのは、ハマグリ、マガキ、オオノガイ等で後述する24次SK07やE地点立会調査出土品と大きくは異ならない。

更にこの他に、田中稔氏が報告しているH地点、I地点の、中期の土器を出土する「V形ピット」も中期の環濠の可能性があろう。田中氏によると、H地点では「外土居式」「長床式」が出土し、I地点では「長床式」土器が出土したと言う。

南山大学が調査したD地点では、遺構についての情報が不足しているが、2次発掘調査で検出された大溝が、環濠にあたるのではないかと推測される。示された平面図によると、幅2mほどの溝が10mにわたって検出されている。方向はほぼ南北方向を示している。この溝からの出土遺物は、弥生時代中期のものから古墳時代に至るまでの長期間の物を含んでいる。報告で、A区からE区までは溝の資料であるとされているが、出土遺物の時期や量、更には遺物の遺存状況等から、B区とそれ以外の間には大きな違いがある。B区では弥生時代中期のものを中心に出土しているのに対し、それ以外の地区では中期の物はほとんどなく、弥生時代後期から古墳時代の、完形に近い土器が出土しており、弥生時代後期の環濠の特徴を示している。B区とそれ以外の地区の溝の関係については分からないので、ここではB区のみを検討しておこう。B区の溝から出土した遺物は、石黒氏の分類によるⅣ系（凹線紋系土器）を中心に、少量のⅠ系を伴っており、Ⅳ－1ないし2期頃に比定できるだろう。時期から見ても、位置的な関係から見ても、E地点の環濠につながる可能性が高い。

環濠と推定される地点の遺構と遺物について紹介した。ここで紹介したのは、中期の可能性が高いと言うだけで、すべてが同じ時期であるのか否かについては不明である。出土遺物についても、溝内に堆積した経緯がわからず、環濠が機能していた時期の特定もできない。土器の編年についても、もはや田中氏が

述べたような順序であるとは単純には言えない事は明らかであり、時期の決定も困難である。確実に言えることは、現在の外十居町周辺に、弥生時代中期Ⅳ－１期に先立つ時期に、環濠に囲まれた集落があったことだけである。仮に、ここで紹介した溝が同時期で、一連の環濠であるとするならば、直径150mほどの環濠集落ということになる。

竪穴住居

今回報告した地点では明瞭な竪穴住居は検出されていないが、弥生時代中期の焼土は、竪穴住居の炉跡の可能性が高い。高蔵遺跡で中期の竪穴住居が検出されているのは、第10図５地点のみである。ここでは、3軒の竪穴住居が報告されている。出土遺物は小片であり、判断が難しいが、Ⅲ期ないしはⅣ期と見られる。この内、ＳＢ２は、一辺4.6mの隅丸方形で、10cm程掘り凹めた炉を持っている。

24次調査、第10図５地点ともに、竪穴住居はⅣ期のものであることが想定されるが、これらの竪穴住居と環濠と思われる溝との関連は難しい。一つは、時期の問題で、Ｅ地点等で溝から出土する土器と、竪穴住居から出土する土器の前後関係が、何れもはっきりしない。また、環濠の機能時期が特定できていないことも、環濠と住居の時間的な関連を考える際には制約となる。24次地点の焼土は、土器から見て環濠よりは後出のようにも見えるが、仮に、住居の時期が環濠機能時と重なるとした場合には、更に問題がある。すなわち、位置関係の問題で、両地点とも先述した溝の検出地点を単純に結んだ範囲の外側に位置する。解釈はいろいろあり得るが、これ以上の推測は控えたい。環濠と竪穴住居の関連は、土器編年の整備と、環濠機能時期を決定できるような調査事例が増加するのをまって改めて検討したい。

方形周溝墓

第10図３の地点で、中期の方形周溝墓が見つかっている。この３の地点の方形周溝墓については、凹線紋系の土器ばかりで、石黒・宮腰氏の編年のⅣ－３期に比定できる。環濠らしい溝から出土する土器よりは明らかに後出で、環濠が埋まった後に築かれたものとするのが妥当であろう。

また、中期の方形周溝墓としては、今回検討している集落とはやや離れた位置にあたる、第２図ウ地点で１基見つかっている。この方形周溝墓の出土土器は僅かであるが、上記の14次調査の方形周溝墓と近いⅣ－３期頃が想定され、こちらも環濠埋没後の墓の可能性が高い。この地点では、方形周溝墓および方墳が、連綿と古墳時代前期にいたるまで築かれていることが明らかになっているが、この中期末の方形周溝墓はその一連の方形周溝墓では最古のものである。この墓が契機となって墓域を形成していった可能性もあり、高蔵遺跡の中期から後期への動向を考える上で興味深いが、中期の環濠が埋まった後に築かれた墓域は中期の環濠集落とは取り敢えずは関連がないのかもしれない。また、この地点は中期の環濠集落が営まれたと想定される地点からはかなり離れており、14次調査地点まで同時期の墓域が連続していた状況は現時点では認められない。この点も、この方形周溝墓と中期の環濠集落との関連に否定的である。

現時点で見つかっている中期の方形周溝墓は、何れも前記の環濠よりは外側にあたる。しかし、時期が環濠機能時とは重ならない可能性が高く、単純には集落域と墓域の関連を述べる事はできない。ただ、石黒氏が想定する後期の環濠集落の位置（石黒氏作成図面を［村木1998］に引用）も中期のそれにほぼ一致し、周溝墓はその範囲とは重ならずに形成されていることを参照すれば、環濠が機能しているか否かを別

として、土地の利用区分があったことも想定できるのかもしれない。

その他、第10図6の地点で、溝らしい遺構から弥生時代中期の土器が出土している。遺構の性格は不明であるが、時期はⅢ期からⅣ期頃であり、環濠集落と重なっているかもしれない。

以上まで、高蔵遺跡の中期の調査事例についてまとめた。調査自体が小規模で、点々と行われているに過ぎない現状では、明言できることは少ない。しかし、何度か調査が行われていることも事実であり、現状で蓄積されている基礎的なデータを提示しておくことも無駄ではないと考え、いくらかの資料紹介を行った。現状の資料からは、弥生時代中期の集落について確実に言えることは、Ⅳ－1期頃に環濠集落が存在した事が想定できる程度にすぎない。今後の資料の増加を待つとともに、限られた資料であっても、既存の資料から土器編年の検討などを進めていきたいと思う。

弥生土器については、石黒立人氏にご教示を頂きました。記して謝意を表します。

ＳＫ07内貝層出土遺物について

ＳＫ07内において、貝層が２ヵ所（貝層１および貝層２）、検出された。出土量は少なくブロック・サンプリングは行えなかった。貝層１でコンテナケース１箱の約半分、貝層２ではビニール袋１袋分の出土量である。貝層、貝層２ともに遺物残存状態が非常に悪く水洗・選別は困難であったが、その結果、それぞれ、自然遺物と人工遺物を検出することができた。自然遺物は貝類と骨、人工遺物は土器片と炭化物片である。

貝類はアカニシ、ハマグリと陸産微小貝を確認。生息域は、アカニシが内湾水域・湾中央部・シルト～泥底質・上部浅海帯で、ハマグリが内湾水域・湾中央部・砂底質・潮間帯である。

全体の残存状態が悪い中で、骨が比較的多く検出された。特に貝層１のほうでは114片を確認した。獣骨と魚骨に大きく別れ、種類は特定できなかったが魚歯、下顎歯骨、脊椎骨（いずれも魚骨）などを確認した。

立会調査の際に採取した多量の自然遺物（貝類と骨）は、残存状態が非常に良好で貴重な参考資料となった。24次調査でも検出されたアカニシ、ハマグリの他に、腹足綱（巻貝類）でイボウミニナ、フトヘナタリ等、斧足綱（二枚貝類）でマガキ、イワガキ（？）、サルボウ、ハイガイ、オキシジミ、オオノガイ、ヤマトシジミ、シオフキ等が確認できる。なかでもハマグリ、アカニシ、マガキといったところが多く、比較的簡単に採取できたり、好んで食されたりしたのであろう。

＜参考文献＞

石黒立人　1991「弥生中期土器に見る複数の＜系＞その２－大渕遺跡並行期を中心として－」『大渕遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集（財）愛知県埋蔵文化財センター

石黒立人・宮腰健司　1996「尾張（付：美濃）」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会

尾野善裕　1997a「猿投窯と西三河の窯跡」『須恵器から灰釉陶器へ－生産地と消費地から－』

尾野善裕　1997b「尾張・西三河（窯跡）　猿投・尾北・その他」『古代の土器5-1　7世紀の土器』（近畿東部・東海編）　古代の土器研究会

木村有作　1997　「第14次発掘調査の概要」『埋蔵文化財調査報告126　名古屋市文化財調査報告34　名古屋市教育委員会

新修名古屋市史編集委員会　1997　『新修名古屋市史』第8巻自然編　名古屋市

田中稔編　1954　『高倉貝塚』　豊橋市広郷遺跡調査会

村木誠　1998　『よみがえる環濠集落』　名古屋市見晴台考古資料館

なお、高蔵遺跡のこれまでの調査の報告書等の文献は紙幅の都合もあり割愛した。

図版番号	遺構	遺物種類	器種	出土	調整	色調	胎土	遺存度	備考
第9図1	SK07	弥生土器	台付甕	台端径3.5cm		橙色	やや粗い	全存	
第9図2	SK12	弥生土器	深鉢	底径4.6cm		橙色	やや粗い、雲母	全存	底部木葉痕？
第9図3	SK12	弥生土器	台付甕	口径約12cm、台径7.8cm、器高16.3cm	外ナデ、イタナデ 内イタナデ	外　赤橙色、内　灰褐色	やや粗い	胴部1/3	
第9図4	流土3	弥生土器	壺	底径9cm		橙色	やや粗い	1/3	
第9図5	SK08	土師器	甕	口径20.5cm	外ヨコハケメ	橙色	粗い	1/2	
第9図6	P238	土師器	小型甕	口径5.9cm、底径3.7cm、器高7.2cm	内外ナデ	橙色	黄褐、雲母片	全存	
第9図7	P48	須恵器	短頸壺	口径7.1cm、器高6.7cm	内外ヨコナデ	灰色	緻密	2/3	
第9図8	P197	土製品	土錘	全長9.4cm、最大径4.4cm	ユビオサエ	淺黄橙色	やや粗	全存	
第9図9	P83	須恵器	杯蓋	口径13.4cm、器高3.3cm	外回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内ヨコナデ	灰色	緻密	全存.	
第9図10	包含層	弥生土器	台付甕	台端径6.0cm	外ヘラナデッケ 内ナデ	外　黒褐色、内　淡黄色	やや粗い	全存	
第9図11	包含層	土師器	高杯	脚端径13.0cm	外ナデヘラナデ 内ヨコイタナデ	橙色	普通、雲母片含	1/2	
第9図12	包含層	須恵器	高杯	脚端径8.7cm	内外ヨコナデ	灰色	緻密	全存	
第9図13	包含層	須恵器	杯蓋	口径11.4cm、器高4.9cm	外回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内ヨコナデ	灰色	緻密	9/10	
第9図14	包含層	須恵器	杯身	口径10.0cm、器高5.0cm	外回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内ヨコナデ	オリーブ灰色	やや緻密	全存	
第9図15	包含層	須恵器	杯身	口径8.9cm、器高4.5cm	外回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内ヨコナデ	灰白色	やや緻密	全存	
第9図16	包含層	須恵器	有蓋高杯蓋	口径11.1cm～12.7cm	外回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内ヨコナデ	灰色、灰白色	やや緻密	全存	口縁部歪み
第9図17	包含層	須恵器	有蓋高杯	口径8.8cm～10.0cm	外回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内ヨコナデ	灰色、暗オリーブ灰色	やや緻密	全存	
第9図18	SK07	石器	石鏃			灰白色			チャート
第9図19	包含層	石器	石錐			赤茶色			チャート
第9図20	包含層	石器	石鏃			青灰色			チャート
第9図21	P233	石製品	管玉						
第9図22	包含層	石製品	臼玉						
第12図1	立会溝1	弥生土器	壺	口径20.0cm	外タテハケメ 内ヨコハケメ	橙色	やや粗い	全存	
第12図2	立会溝1	弥生土器	壺	口径16.4cm	外タテハケメ、内ヨコハケメ イタナデ	橙色	普通	1/5	
第12図3	立会溝1	弥生土器	壺	口径22.0cm	外タテハケメ 内ヨコハケメ	外　褐灰色、内　橙色	やや粗い	1/6	
第12図4	立会溝1	弥生土器	壺	口径9.0cm	内ナデ	橙色	やや粗い、雲母片	1/4	
第12図5	立会溝1	弥生土器	深鉢	底径5.5cm	外条痕 内ヘラナデ	橙色	普通	全存	
第12図6	立会溝1	弥生土器	深鉢	底径8.0cm	外条痕 内イタナデ	明褐色	やや粗い	1/3	底部布圧痕
第12図7	立会溝1	弥生土器	台付甕	台端径7.6cm	内外ナデ	にぶい橙色	普通	1/2	
第12図8	立会溝1	弥生土器	台付甕	台端径5.6cm	内外ナデ	橙色	普通	1/2	
第12図9	立会溝1	弥生土器	台付甕	台端径7.4cm	外タテハケメ 内ナデ	外　橙色、内　灰褐色	やや粗い	全存	
第12図10	立会溝1	弥生土器	台付甕	台端径7.4cm	外タテハケメ 内ナデ	灰褐色	やや粗い	1/2	
第12図11	立会溝2	弥生土器	台付甕	台端部径7.0cm	外タテハケメ 内ナデ	にぶい橙色	普通、雲母片	全存	
第12図12	立会溝2	土製品	台状土製品	端部径5.6cm、上部径4.6cm、器高4.5cm	外タテイタナデ 内ユビオサエナデ	灰褐色	やや緻密、雲母片	1/2	
第12図13	立会溝2	弥生土器	台付鉢	口径24.0cm	外ヨコナデ ミガキ	褐灰色	やや緻密	1/12	

胎土は、粗い、やや粗い、普通、やや緻密、緻密という５段階に分けた。

遺存度は、図化した部分の内の遺存度であり、全体からの度合いではない。

表３　出土遺物観察表

写真13　ＳＫ12出土土器(3)

写真14　ＳＫ12出土土器(2)

写真15　Ｐ238出土土器(6)

写真16　Ｐ48出土須恵器(7)

写真17　Ｐ239出土土師(8)

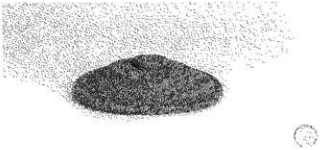


写真18　Ｐ83出土須恵器(9)

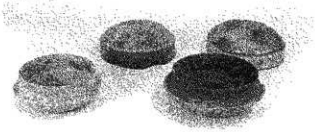


写真19　包含層出土須恵器

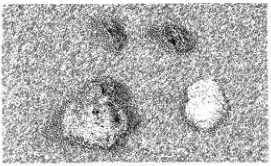


写真20　ＳＫ07出土自然遺物

写真21　ＳＫ07出土石器(18)

写真22　包含層出土須恵器(20)

写真23　石製品

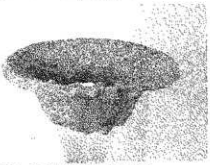


写真24　立会調査溝１出土土器

写真25　同左

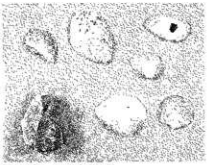


写真26　同自然遺物

第３章　高蔵遺跡第25次

第１節　調査の経過

熱田区高蔵町１－１地内において、個人住宅の建て替えが計画され、事前に発掘調査を実施することになった。

10月12日(火)　建築業者と発掘工事請負業者と現地で打ち合せを行う。

10月14日(木)　発掘調査を開始する。敷地内に排土を積み置く関係から、調査予定地を東西に３区分し、東側から第１区～第３区として、まず第１区の表土除去を行う。表土掘削の結果、全体に溝状遺構を検出し、ＳＤ01とする。本遺構は、南側隣接地で実施した高蔵遺跡第19次調査で検出されたＳＤ01の続きに該当するものと考えられた。

10月15日(金)　ＳＤ01の輪郭を検出するとともに、溝内の埋土を掘り始める。溝の中央部より埴輪片が出土し始める。また上位面で山茶碗の小片１点、中位層より奈良時代の須恵器坏身片1点が出土し、溝が埋没し始めた頃は、古代頃と推定された。

10月18日(月)　ＳＤ01中央付近で須恵器甕の破片が集中して出土し、位置を記録する。

10月20日(水)　ＳＤ01中央部に直交する形で東西方向にセクションベルトを設け、南壁面の土層断面図を作成する。

10月21日(木)　ＳＤ01中央下位で出土した須恵器甕の位置を記録する。また調査区西壁のＳＤ01部分の断面写真を撮影する。

10月22日(金)　午前中は全景写真撮影を行う。午後は断面図及び平面図作成を行う。

10月25日(月)　平面図作成する。

10月26日(火)　埋め戻しを行い、第１区の調査を終える。

10月28日(木)　第2区の表土除去を行う。南端に土坑を検出。また中央部でＳＤ01の続きを検出する。

10月29日(金)　ＳＤ01の掘削。検出面から35cm 程まではあまり埴輪を含んでいない。50cm 程掘り下げたあたりで埴輪片が少しまとまって出土する。南端の土坑は、明治頃の陶磁器を含んでおり、この位置は墳丘内にあたるため、土坑を掘削した頃はすでに墳丘は失われていたことが確実になる。

11月２日(火)　ＳＤ01は、検出面から70cm 程掘り下げた地点から埴輪片が多く出土した。ＳＤ01を完掘する。底面は一部方形に窪んでいたが、遺物は含まれていなかった。

11月４日(木)　全景写真の撮影を行う。

11月５日(金)　断面図及び平面図の作成を行う。

11月８日(月)　平面図作成を行う。

11月９日(火)　第２区の埋め戻しを行う。続いて第3区表土除去を行う。

11月10日(水)　表土除去を行う。遺構検出の後、ＳＤ01を検出する。ＳＤ01より電形土器片が出土する。

11月11日(木)　ＳＤ01の掘削を続ける。中央西寄りで埴輪片が多く出土する。灰釉陶器片が混じっていた。また家形埴輪片も含まれていた。

11月16日(火)　南端の土坑の掘削。ＳＤ01埋土中から出土する埴輪片の位置を記録する。

11月17日(水)　ＳＤ01の埴輪出土状況の写真撮影を行う。また西壁の土層写真を撮影する。調査区の全景写真撮影を行う。

11月18日(木)　調査区南壁、西壁土層断面図を作成する。その後、平面図の作成を始める。

11月19日(金)　昨日に続いて、平面図を作成する。

11月25日(木)　埋め戻しを行う。

11月26日(金)　後片付けを行う。現地調査を終了する。

第２節　調査区周辺の状況

本調査区は、前章で述べたように高蔵遺跡のほぼ中央部、高蔵町一丁目に位置する。当地点の南方約240ｍには高蔵結御子神社があり、境内地には高蔵古墳群が今でもその墳丘を残し、社叢と共に往時の景観を偲ぼす材料を提供している。

江戸時代に描かれた尾張志付図「熱田」は、熱田社や高蔵社を精細に描き出しているが、その周囲に古塚の表現で古墳を描いており、花の木古墳や最近の発掘調査で検出される古墳の周溝とよく合致している。

さて、当地には以前から塚があったと言い伝えられており、敷地の南端には祠が祭られている。また古図からも旧宮道の位置から推定して、当地に古塚があることが推定されていたが、先の第19次調査で古墳の周溝が出土したことで、その位置が確定した。

本節では、本調査区周辺で最近実施された調査について、触れておくことにする。

第15次調査

本調査地から西へ約50ｍ、沢上中学校構内で行われた。検出されたＳＤ05は、幅約1.8ｍ、深さ約45㎝、検出長６ｍを測る。溝の断面形は浅いＵ字形を呈する。埋土上層から須恵器、埴輪、土師器が出土した。須恵器は６世紀代、土師器は４世紀代のものと思われ、方墳の周溝と推定された。その他、出土した遺構や遺物から奈良・平安時代には居住域と推定された。

第17次調査

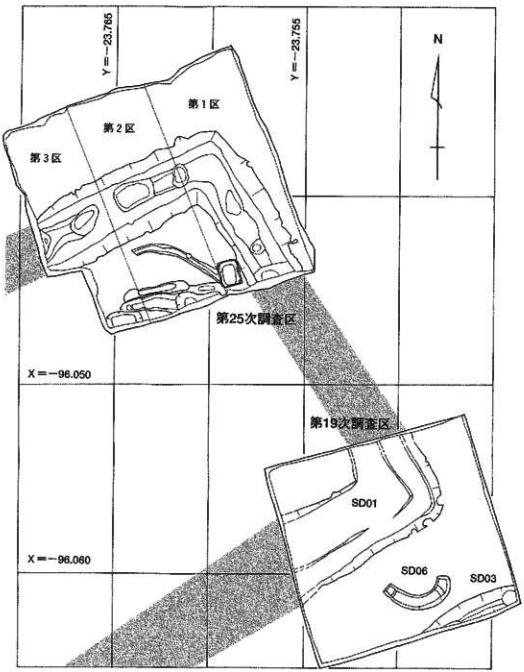
本調査地から東へ約25ｍで行われた。この調査では弥生土器が出土したが、遺構は確認できなかった。ＳＤ01は、調査区の端で検出されたため、全容は不明であるが、検出長は南北約11ｍ、東西長約３ｍを測る。溝幅は、推定で３～４ｍと思われた。埋土中から須恵器、埴輪が出土した。方墳の周溝と推定された。他に古代の須恵器、灰釉陶器、中世の山茶碗の小片が出土した。

第19次調査

本調査地の南側の隣接地で行われた。前述したように検出されたＳＤ01は、本調査地で検出されたＳＤ01と同一の遺構であった。上幅約５ｍ、下幅２～2.5ｍ、深さ約90㎝、検出長は東南方向に約５ｍ、南西方向に約９ｍを測った。溝の断面形は、逆ハ字状であるが、底面は内側寄りが外側寄りより低い。埋土中から出土した埴輪の内、家形埴輪は、切妻型の屋根片と壁片がある。他に弥生土器、土師器、須恵器が出土している。須恵器は古代の有台坏身があり、弥生土器を除き５世紀から８世紀までの時期幅をもつ。ＳＤ03は、検出長約６ｍ、深さ約30㎝を測り、中世の遺物が出土した。13～14世紀頃には古墳の際まで生活に利用されていたと推定された。

第21次調査

本調査区北側及び西側の道路上で、ガス管埋設に伴う調査のため、幅１ｍで調査した。西側の道路は、撹乱のため遺構はほとんど検出できなかった。北側の道路では、小規模な土坑が検出された。また、本調査地の北東で検出されたＳＤ091101は、幅４ｍ、深さ50cm を測り、埋土からは、土師器、須恵器、埴輪、埋土上位層から土人形、香炉等が出土した。



第13図　調査区位置図（Ｓ＝1/200）

第３節　調査の成果

１　遺構

今回の調査で検出された遺構は、土坑13基、溝６条、小穴177基である。この数字は、検出時に付したものであるので、近代以降のものや自然の窪地も含む。

主要な遺構は、ＳＫ07～13、ＳＫ02、ＳＤ01、ＳＤ03・04である。

ＳＫ07～13

調査区南端で検出した土坑である。平面プランから３基ほどが重複していると想定され、掘削を進めたところ、7基の土坑が重複していたことが明らかとなった。重複遺構の古新関係は、ＳＫ09→ＳＫ07→ＳＫ10、ＳＫ11→ＳＫ10、ＳＫ11→ＳＫ08である。

調査区の南端で検出したため、土坑群の全容は不明であるが、連続して構築されていること、ＳＫ13以外は、底面が船底状になっていることなどの特徴がある。ＳＫ08は建築家屋の基礎よりも深いため、底面まで掘り下げていない。

ＳＫ09は、長さ約3.4m、上面幅約40～60cm、深さ約90cm（地山面から、以下同じ）を測る。壁面はオーバーハングしている。ＳＫ07は、長さ約1.8m、幅約50cm、深さ約96cm を測る。ＳＫ08は、長さ約1.1m、幅約25cm 以上、深さ約1.2m以上（未完掘）を測る。ＳＫ13は、長さ約1.8m、幅約70cm 以上、深さ約80cm を測る。ＳＫ11・12は、長さ約4.0m、幅0.6～1.2m、深さ0.5～1.1m（現地表面から最深部まで約1.7m）を測る。

重複関係や土層断面の観察から、次々に掘られては埋められたこれらの土坑は、最終的には灰色粘土で上位面を覆うように埋められている。この粘土層中にも瓦や素焼の大甕の破片が含まれており、丁寧に粘土を被せたわけではないようである。埋土中からは、陶磁器、土器、瓦が出土した。これらの遺物の年代は、明治時代と考えられる。掘削された用途は不明である。

ＳＫ02

調査区南端で検出した土坑である。長さ約1.33m、幅約1.06m、深さは、地山面から約0.35mを測る、壁に沿って杭を打った跡が７箇所検出された。埋土は砂礫土であり、最近構築されたものと思われる。

ＳＤ01

調査区の中央部で検出した溝状遺構である。平面形はＬ字形を呈し、検出長は南北約8.7m、東西約11.1mを測る。断面形は逆台形を呈し、上面の幅は南北方向では3.1m、東西方向では3.7m、底面の幅は南北方向では1.9～2.0m、東西方向では2.1～2.4mを測る。深さは地山面から約1.0mを測る。標高は、検出面（地山面）で7.7m、底面で6.7mである。第２区では底面で長さ約2.1m、幅約1.4m、深さ約35cm の方形土坑を検出した。埋土は褐色砂で、遺物は含まれていなかった。

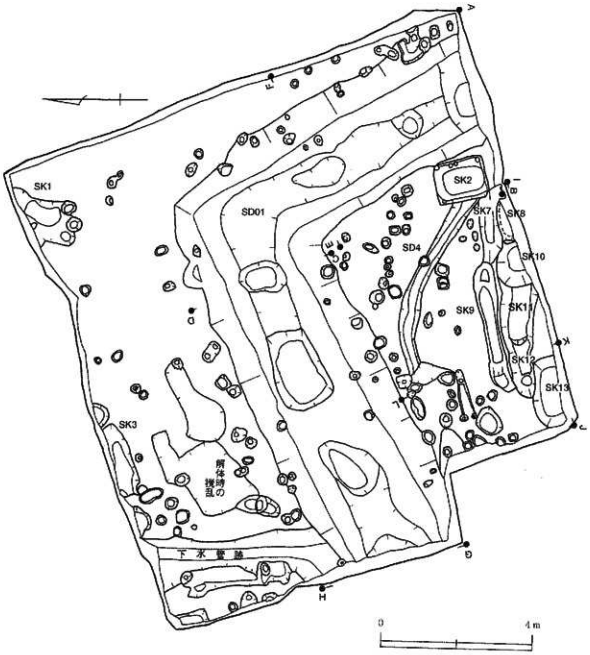
埋土は、概ね３層に区分できる。上位層（包含層を含む、層厚25～60cm）は、黒褐色土で５mm 大の小石を含み固く締まっている。中位層（層厚30～50cm）は、黒褐色土でシルト質の強い部分と砂質の強い部分がある。下位層（層厚10～30cm）は、茶褐色土で砂質が強く、地山の砂が多く含まれる。所々黒味が強い部分がある。

遺物は埴輪（円筒形埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪）、須恵器（有台坏、高坏、坏身、長頸壺）、灰釉陶器（椀）、山茶碗がある。埴輪は、第１区では南端寄り中層下位第９層（標高7.0m前後）で小片が多く出土

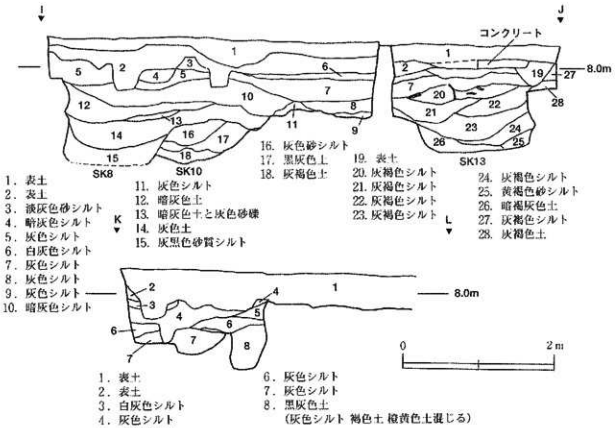
した。また、溝のややコーナー寄りでは、中層位（標高7.2m）で須恵器甕の破片が集中して出土した。壇輪が最も多く出土したのは第３区で、中位層から下位層に多く、西端部では掌大の破片が折り重なるように出土した（標高6.8～6.9m）。また、下位層（標高7.1m）で須恵器甕が底部片を下に破砕した状況で出土した。須恵器有台坏は、標高7.2m、灰釉陶器は、標高7.4mから出土した。山茶碗は、検出面で出土した。

ＳＤ03・04

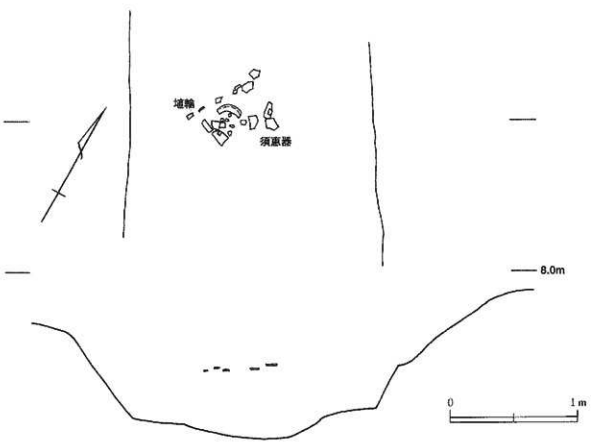
ＳＤ03は、第２区で検出した。検出長約1.0m、幅約0.5m、深さ約３㎝を測る。埋土は淡茶砂シルトで



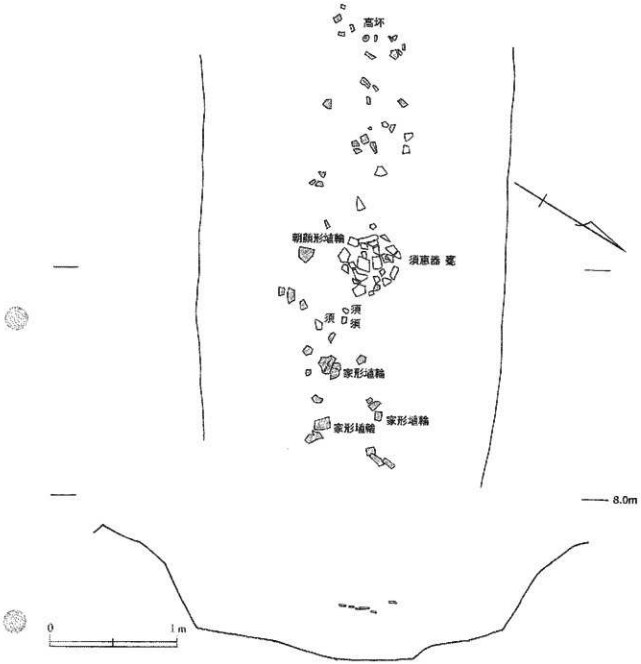
第14図　遺構平面図（Ｓ＝1/100）



第15図　第2区・第3区南壁土層図（S＝1/50）



第16図　SD01（第1区）遺物出土状態（S＝1/30）

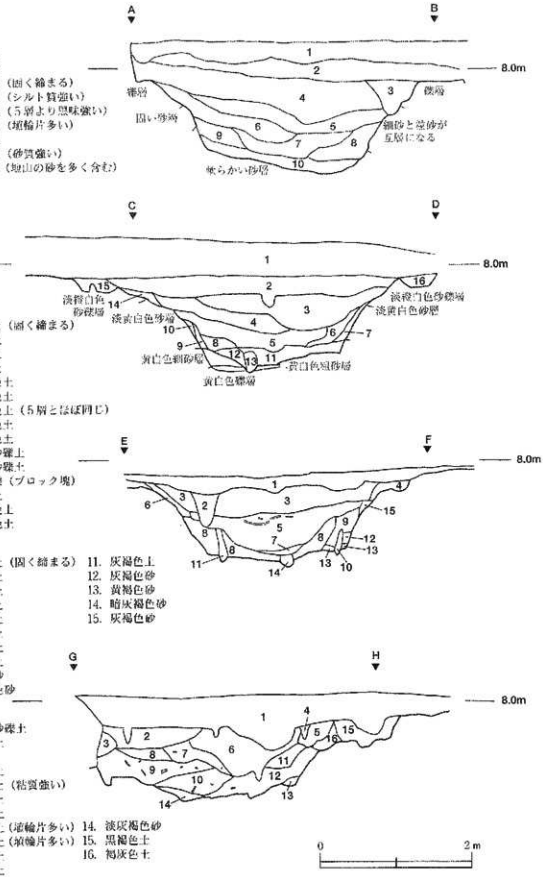


第17図　ＳＤ01（第３区）遺物出土状態（Ｓ＝1/30）

ある。ＳＤ04は、ＳＤ03に接し検出した。検出長約3.5m、幅約40～50cm、深さ約８cm を測る。埋土は淡茶砂シルトである。ＳＤ03、ＳＤ04は同一の溝と考えられる。東端はＳＫ02で壊されている。西端は家屋解体時の攪乱で不明である。

その他

第１区北東隅で、黒色土を埋土とするＳＫ01、第２区、第３区で黒色土を埋土とするＳＫ03を検出した。掘削の結果は、不定形な形で底部も平坦でなかった。第３区南西隅では地山面でやはり黒色を呈しており、一見遺構と思われたが、漸移的に地山の色が変化しており、熟田層の最上位面と考えられた。従って、ＳＫ01、ＳＫ03も同様な地山であったものと思われる。



第18図　SD01土層図（S＝1/50）

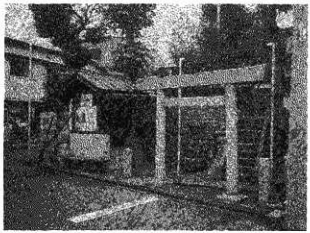


写真27　花の木古墳

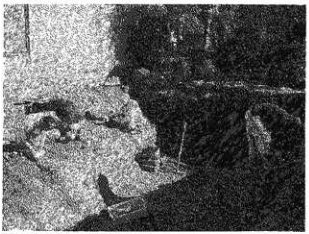


写真28　調査風景（第１区）

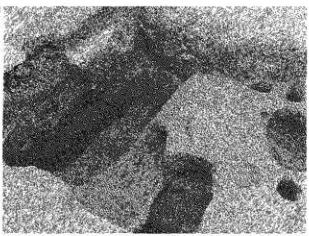


写真29　ＳＫ９・12・13（第３区）

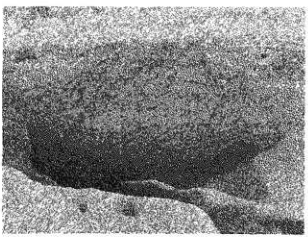


写真30　第２区南壁土層断面

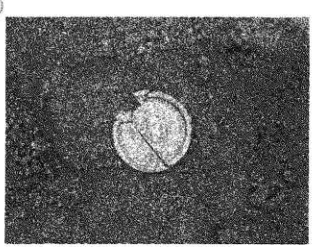


写真31　ＳＤ01須恵器出土状況（第３区）

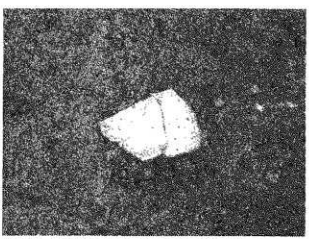


写真32　ＳＤ01灰釉陶器出土状況（第３区）

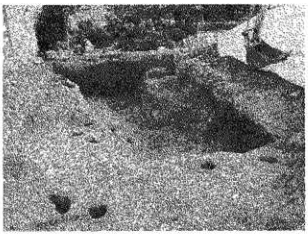


写真33　第１区完掘状況

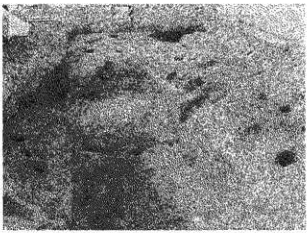


写真34　第１区完掘状況

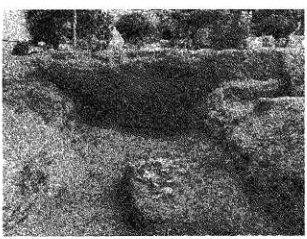


写真35　ＳＤ01須恵器出土状況（第１区）

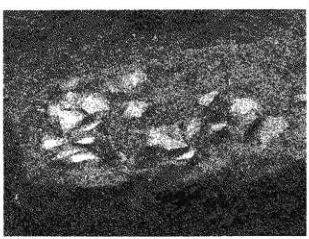


写真36　ＳＤ01須恵器出土状況（第１区）

写真37　ＳＤ01須恵器出土状況（第１区）

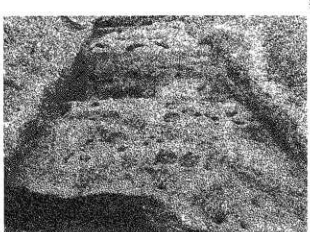


写真38　第２区完掘状況

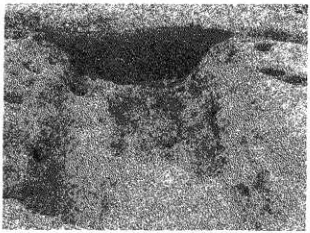


写真39　ＳＤ01完掘状況（第２区）

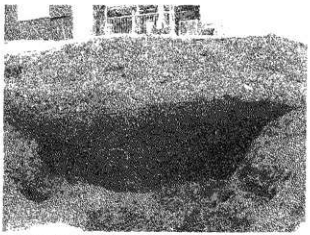


写真40　ＳＤ01土層断面（第２区）

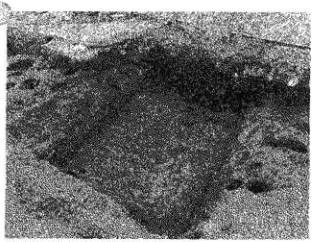


写真41　ＳＤ01完掘状況（第３区）

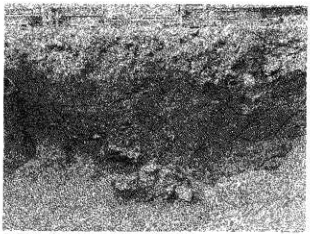


写真42　ＳＤ01土層断面（第３区）

写真43　ＳＤ01酒輪・須恵器出土状況（第３区）

写真44　ＳＤ01須恵器出土状況（第３区）

2　遺物

今回の調査で出土した遺物は、コンテナケースで約15箱ある。その内、1箱分は土坑群や小穴から出土したもので陶磁器等、残りの14箱はＳＤ01から出土した須恵器、埴輪等である。

須恵器

坏身（第19図１・写真45）　口縁部はやや内傾しつつもほぼ垂直に立ち上がる。端部は丸く仕上げ内側に段をもつ。復元口径は10.6㎝、復元底径は5.8㎝、器高は約5.0㎝ を測る。底面は、平坦でヘラケズリ調整が丁寧に施されている。第1区ＳＤ01出土。

高杯（第19図２）　脚部片である。灰白色を呈し、やや軟質な焼成である。透孔はない。第１区ＳＤ01出土。

甕（第19図３・写真46）　口縁部及び体部孔部周辺を欠失している。頸部には形骸化したような波状文が施されている。体部には２条１単位の沈線と、その間に刻み目が施されている。孔の下半の欠失は、孔に差込まれていた棒状（管状）のものが折れた時に、内側から力が加わって破損したものと思われる。第１区ＳＤ01出土。

大甕（第20図１・２）　口縁部の破片で、口縁部端部はやや下方に垂下している。頸部外面に斜方向に櫛歯状工具による刺突文が２段に施されている。この口縁部に接合すると思われる体部が第20図２（写真47）である。体部から底部にかけて約2／3が残る。外面には平行タタキ痕が残る。内面はナデ調整が施され、当て具痕は消されている。底部はやや尖がり気味である。タタキ目は１㎝当り５本と細かい。復元口径34㎝、復元器高58㎝である。第１区ＳＤ01出土。

大甕（写真48）　口縁部端部から頸部にかけては、内外面にヨコナデ調整が施されている。肩部外面にはやや粗いタタキ痕が残る。タタキ目は１㎝当り３本である。内面はナデ調整が施されているが、わずかに同心円当て具痕が残る。この個体の体部は、歪が著しい。外面はタタキ調整、内面ナデ調整が施されている。第1区ＳＤ01出土

長頸壺（第19図４・写真51）　口縁部から頸部まで残る。口縁部端部は素縁のまま外反する。頸部中ほどに２条の沈線が施されている。褐灰色の自然釉が付着する。肩部との接合は１段接合である。第２区ＳＤ01出土。

有台坏身（第19図５）　高台底部の破片である。高台径約10.3㎝ を測る。第3区ＳＤ01出土。

大甕（第20図３・写真49）　口縁部の端部は面取りしている。頸部に断面三角形の凸線が巡り、これに対応して内面が窪んでいる。頸部外面は、粗雑な刻み目を入れ波状文風な装飾模様が施されている。内面はヨコナデ調整で、肩部との境はイタナデ調整が施されている。体部外面は平行タタキ痕が残る。内面はナデ調整が施されている。この口縁部に接合する底部～体部下半部（写真50）は、底部は尖がり気味である。外面は暗青灰色で、一部は赤褐色、内面は褐灰色を呈する。肩部付近の器壁は、約0.5㎝ と薄い。復元口径27㎝、復元器高53㎝である。第３区ＳＤ01出土。

埴輪

出土した埴輪は、本来使用されていた位置から離れて、ＳＤ01の中に落ち込んだもので、すべて破片であった。埴輪には、円筒埴輪（円筒形埴輪と朝顔形埴輪）と形象埴輪（家形埴輪）がある。黒斑のある埴

輪はなく、すべて窖窯焼成である。

円筒形埴輪（第21図２・写真54）　第３区ＳＤ01検出面（地山面）から－50～70㎝ほどの位置から出土した破片が接合したものである。口縁部約８割、底部約５割が残っていた。２凸帯３段で体部は筒状の形をしている円筒形埴輪である。器高35.6～36㎝、口径は楕円形をしているため、最大約34.1㎝、最小約31.8㎝、底径約23.0㎝を測る。器壁は約0.9㎝と薄手な作りである。透孔は、第２段に２方向に穿孔され、片方の透孔を囲むようにＵ字状のヘラ描記号が施されている。他方の透孔にはなく、代わって孔の端がヘラで削られている。凸帯は、１、２段目は幅約0.6㎝、突出高約0.3㎝、２、３段目は幅約0.9㎝、突出高約0.2㎝で、側面を強く押しているため、端部はややシャープである。

外面調整は、タテハケ調整後回転ヨコハケ調整を施している。また第１段目は、ヨコハケ痕よりもタテハケ痕の方が良く残り、ヨコハケ調整はわずかに施しているにすぎない。第３段目は、タテハケ調整は、やや斜め方向に施している。ヨコハケ調整は、入念に施している。底部は、ナデ調整で、基底部は指で押えた跡が残る。

外面第１段目には、粘土の撚れた跡がみられる。いわゆる底部設定離脱痕と称するものである。胎土は密で0.5～５㎜大の砂粒がわずかに含まれている。焼成は堅緻である。色調はにぶい橙色～橙色を呈する。

円筒形埴輪（第21図１）　口縁部が８割残っている。復元口径30～32㎝を測る。外面調製は、タテハケ調整後ヨコハケ調整、内面調製は、ヨコハケ調製を施す。端部は平坦で、内外面にヨコナデ調製を施し、ヨコハケ調製を消す。浅黄橙色を呈するが、外面に赤色顔料を塗布している。焼成は良好で残りもよい。胎土は密で、１㎜以下の砂粒をわずかに含む。３区ＳＤ01出土。

円筒埴輪（第21図10・11、写真57－１、２）　底部付近の破片である。黄白色を呈する。タテハケ調製後ヨコハケ調整、底部下半はナデ調整を施している。内面はヨコハケ調製、基底部は摩滅しはっきりしないが、ナデ？調製を施す。外面に底部設定離脱痕と称する粘土の撚れた跡がみられる。

円筒埴輪（第21図12）　底部付近の破片である。外面はタテハケ調整後ヨコハケ調整、内面はヨコハケ調整を施す。底部下半はナデ調整を施す。外面に底部設定離脱痕と称する粘土の撚れた跡がみられる。

円筒埴輪（第21図５・写真57－３）　底部の破片である。外面は、タテハケ調製後ヨコハケ調整を施す。底部下半は、ナデ調製後ユビオサエが施される。内面は、ヨコハケ調製が施される。底部下半は摩滅しているためはっきりしない。ヨコナデ調整か。

円筒埴輪（写真57－４）　底部の破片である。外面タテハケ調整、下半はヨコナデ調整が施される。内面はナデ調製が施される。基底部内面に２条の沈線が巡る。基底面は平坦である。

朝顔形埴輪（第22図３・写真56）　円筒部である。底径18.2～19.8㎝、残存高約23.0㎝を測る。2突帯3段目までが残る。凸帯は、第１、２段目は幅約0.7㎝、突出高約0.3㎝、第２、３段目は幅約0.8㎝、突出高約0.4㎝を測る。透孔は、２段目、３段目に互い違いの２方向に穿孔されている。

外面は、タテハケ調整後ヨコハケ調整を施している。内面は、ヨコハケ調整を全面に施すものの、凸帯部の位置のみナデ調整を施している。底部は強いナデ調整を施している。基底面は、ワラ状の痕跡が明瞭に付き、仕上の調整はされていない。色調は浅黄橙色を呈する。第３区ＳＤ01出土。

朝顔形埴輪（第22図１・写真55）　花状部である。口径約45.6㎝、残存高約14.5㎝を測る。口縁部は外反し、口縁端部は、強いヨコナデ調整により内外面が少し窪んでいる。凸帯は幅1.1㎝、突出高0.6㎝を測る。

外面は、タテハケ調製、端部はタテハケ調整後ヨコナデ調整を施す。内面は、ヨコハケ調製、ヘラケズリ調製が施されている。胎土は密で1㎜以下の砂粒を含む。焼成は良好で残りもよい。色調は橙赤色を呈する。第3区ＳＤ01出土。

朝顔形埴輪（第22図４～６） 口縁部の破片で、外反している。4、6の端部は面取りされている。

朝顔形埴輪（第22図２） 受部である。焼成は堅緻で暗赤褐色を呈する。外面にはナナメハケ調整、凸帯下半はヨコハケ調整が施される。

円筒埴輪（第21図３～４・写真58） 外面に赤彩が施されている。精製した胎土を使用し、黄白色を呈する。突帯は幅約0.5cm、突出高約0.6cm(3)、幅約0.4cm、突出高約0.6cm(4)で突出高が高い。

円筒埴輪（第21図６～８） 口縁部、体部である。外面調整はヨコハケ調整を断続的に施している。6は、口縁端部が逆L字状に外反する。

円筒埴輪（第21図９） 外面に線刻が施された破片である。2段目の透孔の周辺部の部位と思われる。

家形埴輪（第22図７～19・写真59、60） 23点の破片がある。その内、黄白色を呈するものは14点、橙色を呈するものは９点である。第３区ＳＤ01から出土した。12～19（写真59）は、壁材と屋根材である。外面はハケ調整、内面はナデ調整を施している。7～11（写真60）は、屋根棟部材である。棟に鰹木を乗せていた痕跡がみられる。

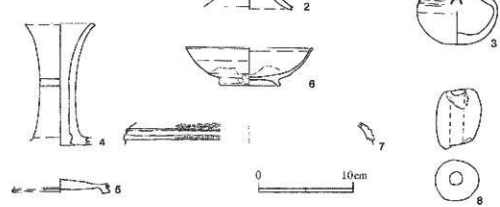
その他

灰釉陶器椀（第19図６・写真52） 復元口径13.2cm、器高約4.1cm、高台径約6.5cm を測る。内外面に釉の浸け掛けを施す。色調は灰白色を呈する。第３区ＳＤ01出土。

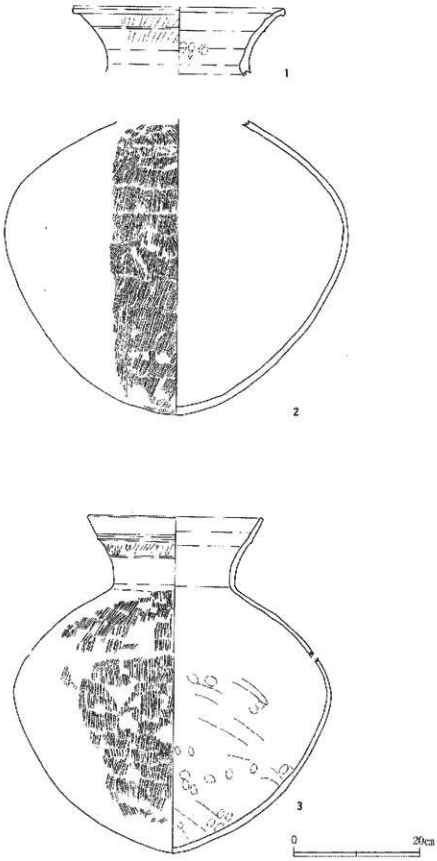
土錘（第19図８・写真53） 土師質焼成で、暗灰褐色を呈する。孔端付近が少し欠けている。長さ約6.3cm、直径約4.7cm、孔径約1.4cm を測る。重量は、約110gを量る。第１区ＳＤ01出土。

弥生土器壺（第19図７） 小形品である。体部に２条の凸帯は刻み目をもち、外面にヘラミガキが施されている。作りは丁寧である。色調は、黒斑部分を除き暗茶褐色を呈する。第１区ＳＤ01出土。

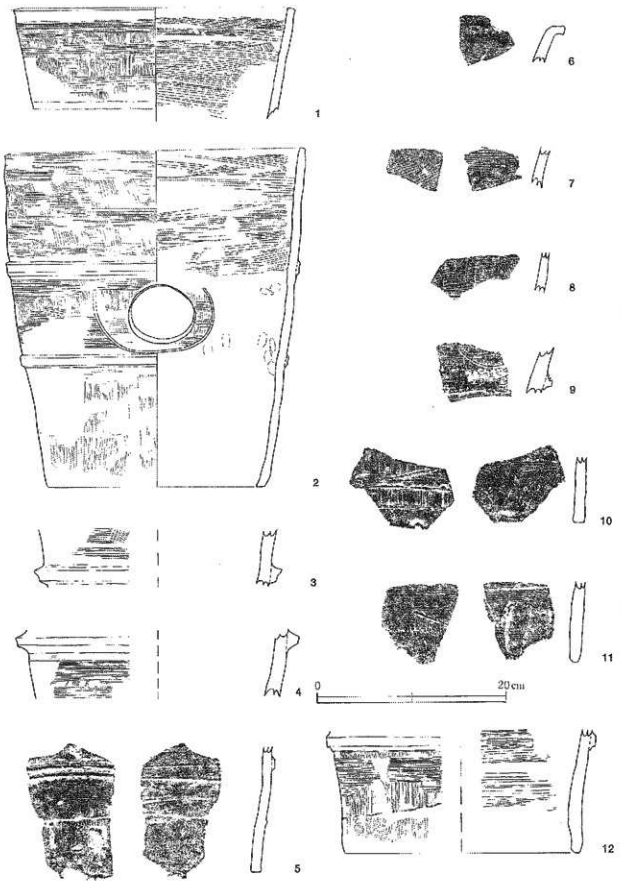
竈形土製品 底部の破片である。暗褐色を呈する。第１区ＳＤ01出土。



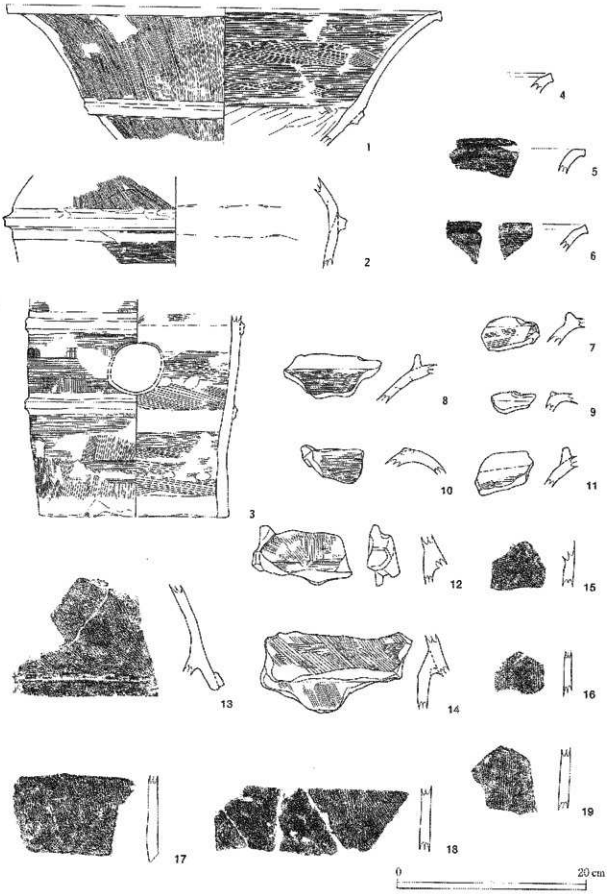
第19図 ＳＤ01出土遺物(1)(Ｓ＝1/4)



第20図　ＳＤ01出土遺物(2)(Ｓ＝1/6)



第21図　ＳＤ01出土遺物 (3) (S=1/4)



第22図　ＳＤ01出土遺物(4)(Ｓ＝1/4)

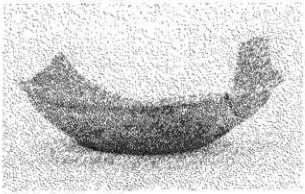


写真45　須恵器　坏身

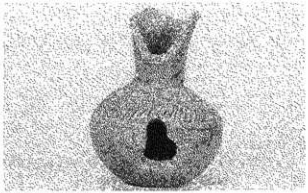


写真46　須恵器　瓶

写真47　須恵器　大甕

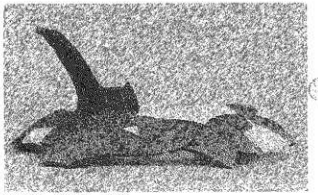


写真48　須恵器　大甕

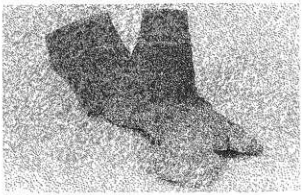


写真49　須恵器　大甕

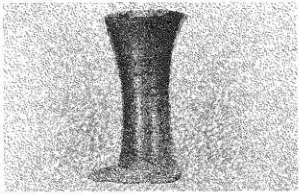


写真51　須恵器　長頸壺

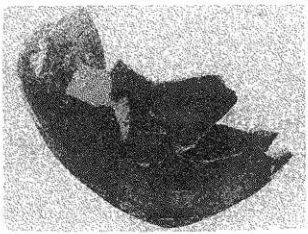


写真50　須恵器　大甕

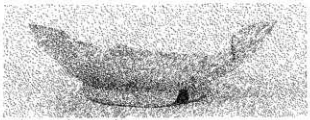


写真52　灰釉陶器　椀

写真53　土錘

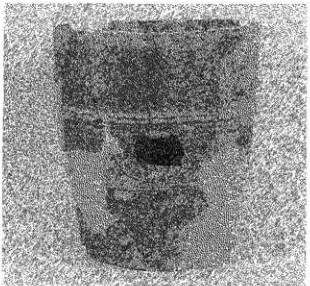


写真54　円筒形磁器

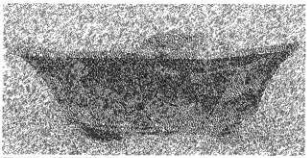


写真55　朝顔形磁器

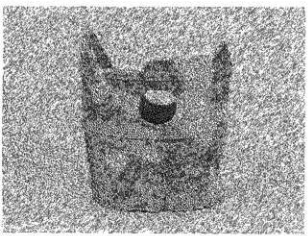


写真56　朝顔形磁器

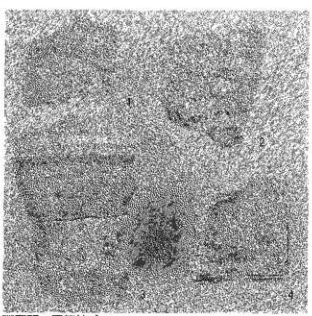


写真57　円筒磁器

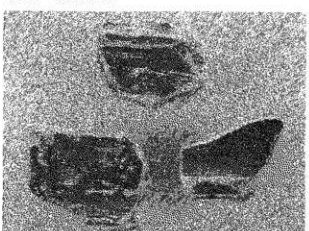


写真58　円筒磁器

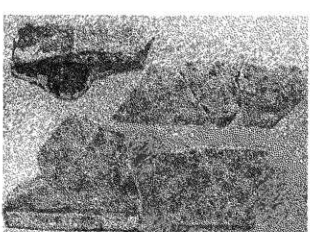


写真59　家形磁器

写真60　家形磁器

3　小結

ＳＤ01は、南隣の第19次調査で検出された溝につながるため、方墳の周溝であることが確実となった。推定される墳丘規模は、一辺約17.0mである。また、墳丘内にあたる位置から明治時代の土坑群が検出されたことから、明治時代には既に墳丘は失われていたと推定される。また、溝内からは、奈良時代の長頸壺、平安時代の灰釉陶器椀等が出土しており、溝はこの頃まで窪地であったようである。

古墳時代の須恵器のうち、大甕は、底部から体部まで復元できるものが３個体出土した。出土地は、中層で埴輪片とともにあったが、製作年代が７世紀前半頃で、底部を下にした状態であったことから、古墳時代末期に何らかの祭祀行為を行ったのかも知れない。こうした事例は、中区東古渡町遺跡ＳＺ05溝内ＳＸ10・11・12がある。

出土した遺物の中で最も多かったのは、埴輪である。溝内に破片となって落ち込んだもので、出土状態はよくなかったが、古墳の築造年代を知る手がかりとなるため、埴輪の特徴について尾張地方の埴輪編年（赤塚1991）に照して、簡単にまとめておく。

尾張地方で使用された円筒埴輪は、製作技法からＡ系統（タテハケ系埴輪）、Ｂ系統（Ｂ種ヨコハケ系埴輪）、Ｃ系統（ロクロ回転力を用いる須恵器系埴輪）の３種類がある。出土した埴輪は、Ｂ種ヨコハケ調整が施された小片３点を除き、Ｃ系統の埴輪であった。無黒斑雲窯焼成で、器表面はタテハケ調整後ヨコハケ調整を施している。Ｃ系統の埴輪の出現は、尾張地方の埴輪をⅠ～Ⅳ期に区分した中でⅢ期とし、その年代観は５世紀中～後葉である。Ⅳ期は、Ｃ系統埴輪の全盛期とその終焉の時期で、５世紀末葉～６世紀前葉とする。

出土資料の内、全体の形が明らかな埴輪（第21図２）をみると、形態は２凸帯３段で３段目があまり外反しない筒状の形状をしている。製作技法は、外面調整はタテハケ後ヨコハケ調整で、タテハケ痕がよく残る。内面はヨコハケ調整、ヨコユビナデ調整である。底部設定技法のうち、基底部端部に陰刻線は認められず、第１段外面にいわゆる底部設定離脱痕を認める。

Ｂ系統埴輪とした３点を除き、ほかの埴輪片もほぼ同様な特徴をもっており、赤塚編年第Ⅲ期第３段階に位置付けられると思われる。また、溝内から出土した須恵器の内、最も古い時期のものは、坏身で11-11号窯式に該当すると思われ、同時期の年代観をもつ。従って、実年代では、５世紀後半に築造された古墳と推定される。

東古渡町遺跡のＳＤ03・ＳＤ24の周溝を有する古墳（ＳＺ02）は、墳丘規模17.0m以上×19.5m、溝幅2.7～3.2mを測り、溝内から須恵器、円筒埴輪、家形埴輪が出土している。須恵器はＨ-11号窯式期、円筒埴輪も赤塚編年第Ⅲ期第３段階の時期のもので、本古墳とほぼ同時期で同じ製作技術の埴輪を使用している。家形埴輪を有している点で、それぞれの古墳群（あるいは支群）中でも優位な位置を占める古墳であったと推定される。

参考文献

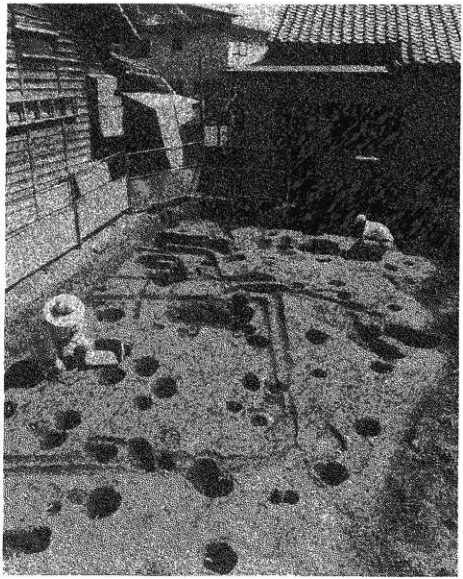
赤塚次郎「尾張型埴輪について」『池下古墳』1991　(財)愛知県埋蔵文化財センター

名古屋市見晴台考古資料館編『東古渡町遺跡第一次発掘調査概要調査報告書』1989

名古屋市見晴台考古資料館編『東古渡町遺跡第２次発掘調査概要報告書』1990

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター『駒前第１号墳』1998

瑞穂遺跡（第５次）



東半区完掘状況

例言

1．本書は、瑞穂遺跡第５次発掘調査の報告である。
2．調査地点は名古屋市瑞穂区豊岡通2-10である。
3．調査は個人住宅の建設工事に伴うもので約70㎡を対象とした。
4．調査期間は、平成11年８月２日から平成11年８月27日まで行なった。
5．調査は名古屋市教育委員会が実施し、調査に関する調整事務は、文化財保護室学芸員竹内宇哲が担当した。発掘調査は名古屋市見晴台考古資料館学芸員水野裕之・服部哲也が担当した。
6．排土工事は（有）庭匠に請負契約、基準点・水準点測量業務は（株）中部測技に委託契約して実施した。
7．資料整理・報告書の作成作業参加者。
小浦美生、近藤和子、川原則子、池戸裕子、佐々木佳子
8．本書の基準高は東京湾平均海水面（T．P）を、座標系は建設省告示の第Ⅶ座標系を使用した。
9．出土遺物および記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。
10．本書は水野の協力をえ、服部が執筆した。

目次

Ⅰ　位置と環境……47
1．地理的環境
2．歴史的環境
Ⅱ　遺跡の概要……49
1．調査・研究史
2．遺跡の概要
Ⅲ　調査の経過……50
1．調査に至る経過
2．日誌抄
Ⅳ　調査の内容……52
1．基本土層
2．遺構と遺物
Ⅴ　おわりに……62

図版目次

第１図　調査地点図（1：2500）……47
第２図　位置と周辺の遺跡(国土地理院　1：25000)……48
第３図　平面図(1：100)および基本土層図(1：50)……51
第４図　住居跡位置図……52
第５図　ＳＢ01平面図（1：50）……52
第６図　ＳＢ02半・断面図（1：50）……53
第７図　ＳＢ02出土遺物その１(1：4)……55
第８図　ＳＢ02出土遺物その２(土器1：4・石器1：3)…56
第９図　ＳＢ03・04平・断面図（1：50）……57
第10図　ＳＢ03出土遺物(1：4)……58
第11図　ＳＢ05・06・07平・断面図(1：50)……59
第12図　ＳＢ04・05・06出土遺物(土器1：4・石器1：3)…59
第13図　ＳＢ07出土ヒスイ勾玉(原寸)……60
第14図　P13出土遺物(1：4)……61
第15図　その他の出土遺物(土器1：4・石器1：3)…62

写真

中表紙写真　東半区完掘状況……45
写真１　作業風景……50
写真２　作業風景……50
写真３　ＳＢ01完掘状況（南から）……52
写真４　ＳＢ02西半完掘状況（東から）……54
写真５　ＳＢ02東半完掘状況（西から）……54
写真６　ＳＢ02西半遺物出土状況（西から）……54
写真７　ＳＢ02西半遺物出土状況（南から）……54
写真８　ＳＢ02出土弥生土器……54
写真９　ＳＢ02出土弥生土器……54
写真10　ＳＢ02出土弥生土器……54
写真11　ＳＢ03完掘状況（南から）……57
写真12　ＳＢ05出土ミニチュア土器……58
写真13　ＳＢ07ヒスイ勾玉出土状況……60
写真14　ＳＢ06・07完掘状況（南から）……60
写真15　P13土器出土状況……61
写真16　P13土器出土状況……61
写真17　P13出土弥生土器……61
写真18　西半区完掘状況……64

Ⅰ　位置と環境

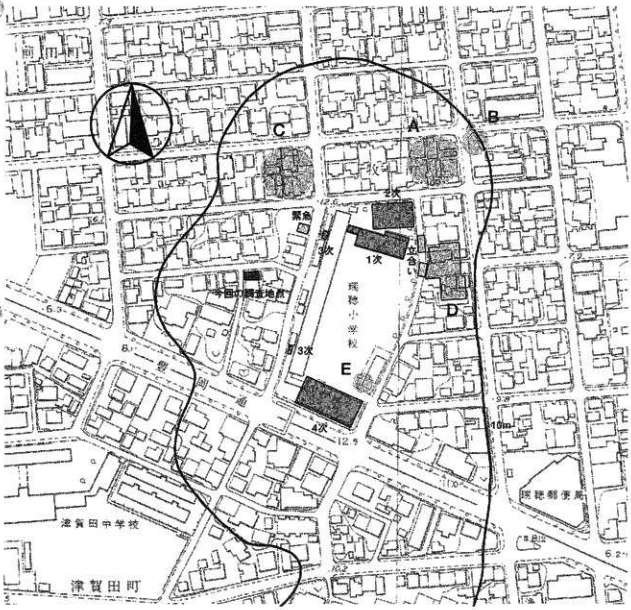
1．地理的環境

瑞穂遺跡の所在する瑞穂区は名古屋市のほぼ中央に位置する。遺跡の中心はＪＲ熱田駅から東へ約２㎞の距離にあり、現在は住宅地が密集している。

地形的には市内中央部に展開する名古屋台地（砂層とシルト層からなる熱田層を基盤とする洪積台地）のうち、通称瑞穂台地と呼ばれる台地南端に立地する。標高は10～12mである。なお、周辺は微妙に起伏のある地形となっており、10mの等高線をつなぐと島状の地形が浮び上がる。遺跡地は島状地形北半の最も高い場所にあたる。

2．歴史的環境

遺跡周辺の主な遺跡を概観すれば、南東１㎞には国の史跡でもある大曲輪貝塚（縄文時代前・後晩期の



第１図　調査地点図（1：2500）

1 瑞穂遺跡
2 高蔵遺跡
3 見晴台遺跡
4 大喜遺跡
5 大喜梅林遺跡
6 田光遺跡
7 津賀田遺跡
8 津賀田古墳
9 卓来町遺跡
10 楽師寺古墳
11 北原町遺跡
12 高田古墳
13 八高古墳
14 佐渡町遺跡
15 おどり山古墳
16 十六町・丁目遺跡
17 萩山町遺跡
18 勝郷町遺跡
19 瑞穂古墳群
20 大曲輪遺跡
21 姫塚古墳
22 東原敷遺跡
23 剣塚古墳
24 ためまる古墳
25 おつくり山古墳
26 松園町遺跡
27 駅上町遺跡
28 山崎貝塚
29 井守塚古墳
30 山崎町2丁目遺跡
31 欠上貝塚
32 断夫山古墳
33 白鳥古墳
34 工ノ井遺跡
35 森後町遺跡
36 熱田神宮遺跡
37 熱田神宮南門前貝塚
38 新宮坂貝塚
39 [illegible]所遺跡

第2図　位置と周辺の遺跡（国土地理院　1：25000）

集落)、南東2㎞には三遠式の袈裟襷紋銅鐸の出土した仁所遺跡、北1㎞と1.3㎞には7～80m級の前方後円墳、高田古墳と八高古墳、西800mには大喜・大高梅林遺跡・欠上貝塚(縄文時代～中世の集落)等がある。

また、当遺跡と同じ弥生時代の環濠集落としては、北西に高蔵遺跡、南に見晴台遺跡がそれぞれ約3㎞の距離に位置する。各遺跡とも、海に面した入り江近くの遺跡と推定され、海上を利用した交易を想像できる。

Ⅱ　遺跡の概要

1．調査・研究史

瑞穂遺跡の発見は昭和6年(1931)の耕地整理事業で多数の遺物が出土したことに始まる。その後、戦前から戦後にかけて、小栗鐵次郎(第1図A・B地点)、北村斌夫・三渡俊一郎(C地点)、南山大学(D・E地点)による遺物採取や調査が行なわれ、また吉田富夫・三渡俊一郎らのいくつかの関連論考も発表された。ただ、これらの調査は遺物が中心であったため、遺構については南山大学調査のV字状の溝(濠か)やL字状の溝(周溝墓か)などごく限られていた。

本格的な発掘調査は、瑞穂小学校の新築工事に伴って行なった市教育委員会の調査が最初であり、昭和53年(1978)のことである。この調査では、総数29軒の弥生時代中期から古墳時代前期の住居跡が検出され、具体的に「集落跡」であることを明らかにした。そして、昭和61年(1986)の第4次調査では2条の巨大な環濠が発見されるに至り、ようやく弥生時代の「環濠集落」としての条件が出揃うこととなった。

しかし、その後は新たな知見を積み重ねるには至っておらず、今回の調査は4次調査からは実に13年ぶりの発掘調査となった。

2．遺跡の概要

瑞穂遺跡の推定範囲は、東西約250m、南北約280mの楕円形で、その延べ面積は5万㎡をこえる。遺跡の中心には瑞穂小学校があり、周辺は閑静な住宅街となっている。大規模な開発がなかったこともあり、遺跡の旧地形は現在でもよく残っているといえよう。

遺跡の全体像はまだまだ明らかになっていないが、おおよそ、縄文時代から中世に至る複合遺跡で、特に弥生時代後期の環濠集落跡を中心とすることがわかってきた。順次概要を記す。

縄文時代　4次調査において、中期末頃の竪穴住居跡を1軒検出。一括廃棄と思われる良好な土器が出土し、貴重な資料となっている。また、後のピットからの出土ではあるが、独鈷石も1点出土している。

弥生時代　住居跡・環濠・方形周溝墓の溝などが見つかっている。遺構の出土傾向から大雑把に、中心部に住居、周縁部に墓と環濠が位置するようであるが、環濠は方形周溝墓を壊して掘削している。時期的には、方形周溝墓は中期末、住居跡は中期末から後期、環濠は後期前半の掘削で後期後半の埋没と考えられる。出土遺物は土器類が中心であるが、石器類ほか飾紐、骨鏃、ヒスイの勾玉等、見るべきものは多い。

古墳時代～古代　空白の時代であるが、採取された遺物には古墳時代のものもあること、また周辺300m以内には沖賀田古墳・薬師寺古墳もあることから、同時代の遺構の発見も考慮しておく必要はあろう。

中世　建物跡は明らかではないが、溝と墓が検出されている。瓦の出土もあり、近くに寺院跡があった可能性もある。

Ⅲ　調査の経過

1．調査に至る経過

5次の調査地点は遺跡範囲の中央西寄りで、地下鉄瑞穂運動場駅からは西へ約300mに位置する。

平成11年4月、市教育委員会文化財保護室に当該地での個人住宅建て替え予定と、その際の埋蔵文化財の取扱についての照会があった。文化財保護室ではそれまで建っていた家が木造であることから、地下の埋蔵文化財は良好に遺存すると判断し、発掘調査の必要を事業者に伝えた。その後、事業者との協議調整の結果、8月より約70㎡を対象に発掘調査を実施することとなった。

調査は排土置き場を確保する都合上、前半（西半区）と後半（東半区）の折り返し調査とした。

2．日誌抄

8月 2日	発掘準備（フェンスの設置等）および器材の搬入。
8月 3日	西半区表土除去開始。一部包含層掘削。
8月 4日	遺構検出開始。住居跡と思われる遺構検出。遺構掘削も開始する。
8月 5日	水準点・基準点測量。
	この間、遺構掘削、遺構土層断面図作成、写真撮影等。
8月10日	遺構掘削完了。完掘写真・基本平面図・断面図作成。
8月11日	基本平・断面図完成。遺構内アゼ除去。西半区調査終了。埋め戻し。
8月17日	東半区表土除去開始。
8月18日	包含層掘削遺構検出開始。
	この間、遺構掘削、遺構土層断面図作成、写真撮影等。
8月25日	遺構掘削完了。完掘写真撮影。基本平面図・断面図作成。
8月26日	基本平・断面図完了。東半区調査終了。埋め戻し開始。
8月27日	埋め戻し完了。後片付け。現地での調査終了。

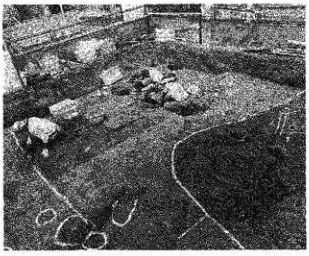
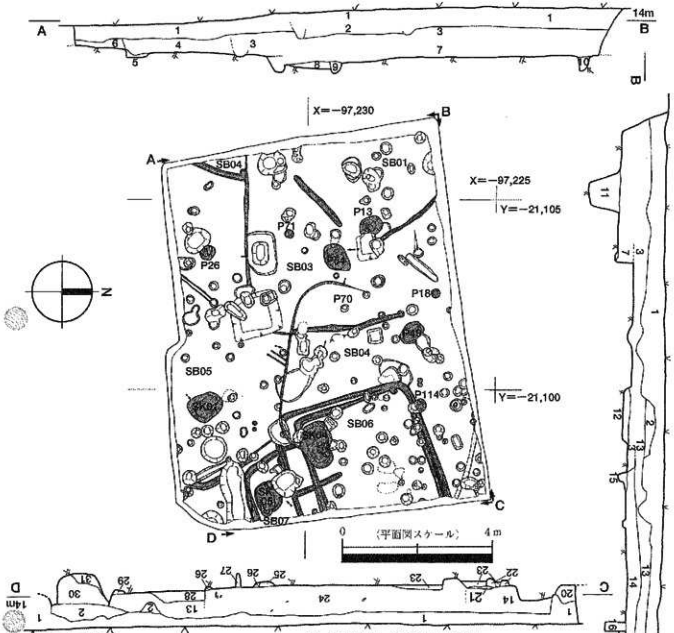


写真1　作業風景

写真2　作業風景



1 表土および撹乱土
2 茶灰色土
3 暗茶褐色土（均質。1㎝までの炭化物ごく僅かに含む。黒みがやや強い）SB03埋土
4 暗茶褐色土（均質。黒みがやや強い）SB04埋土
5 暗茶褐色土（均質。黒みがやや強い）SB04周溝
6 暗茶褐色土（均質。黒みがやや強い）
7 暗茶褐色土（地山ブロック僅かに含む。弥生土器片良好に含む）SB01埋土
8 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック多く含む）SB03埋土
9 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック僅かに含む。黒み強い）P68埋土
10 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック多く含む）P01埋土
11 暗茶褐色土（1㎝までの炭化物僅かに含む）P02埋土
12 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック多く含む）
13 暗茶褐色土（均質）
14 暗茶褐色土（1㎝までの炭化物を少量に含む。炭化木材・弥生土器片良好に含む）SB02埋土
15 暗茶褐色土（炭化物僅かに含む）
16 暗茶褐色土（地山ブロック多く含む）P109埋土
17 暗茶褐色土（均質）P110埋土
18 暗茶褐色土（均質）P147埋土
19 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロックごく僅かに含む）P75埋土
20 暗茶褐色土（5㎜までの炭化物多く含む）P72埋土
21 地山ブロック＋SB02貼床か
22 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロック多く含む）SB06周溝
23 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック多く含む）SB06貼床か
24 暗茶褐色土（均質で地山ブロック・炭化物は含まない。弥生土器片良好に含む）SB06埋土
25 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック多く含む）P83埋土
26 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロック多く含む）SB06周溝
27 暗茶褐色土（均質）P161埋土
28 暗茶褐色土（3㎝までの地山ブロックまばらに含む）SB07埋土
29 暗茶褐色土（1㎝までの地山ブロック多く含む）SB07周溝
30 黒褐色土（固く締った黒みの強い土）SK02上層
31 明茶褐色土SK02下層

第3図　平面図（1：100）および基本土層図（1：50）

Ⅳ　調査の内容

1．基本土層

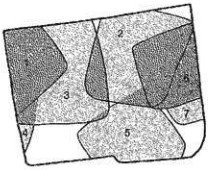
調査地点の基本層序は、20～30cmの表土層と部分的に残る中世以降の包含層（茶灰色土）以下は、暗茶褐色土の弥生時代包含層および遺構埋土が堆積し、黄橙色の地山にいたる。特に暗茶褐色の弥生時代包含層（遺構の埋土含む）は30～40cmの厚さで調査地点全体に良好に遺存していた。安定した地点では、地表から地山までは30～50cmの深さである。

なお、暗茶褐色土は、炭化物を多く含んだＳＢ04埋土のような例を除けば、包含層、遺構埋土共に良く似ており、分層には困難を窮めた。

2．遺構と遺物

調査前は環濠が検出される可能性も予測したが、結果は住居跡が密集して発見され、西辺の環濠は調査地よりさらに西であることが明かとなった。

見つかった住居跡は、いずれも弥生時代の竪穴住居跡で、狭い調査範囲ながら７軒が重なり合って発見された。

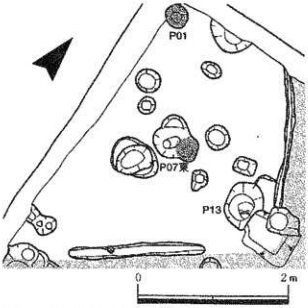


第４図　住居跡位置図

ＳＢ01（第５図、写真３）

調査区の北西端に位置する。ＳＢ03に完全に切られているため遺存状態は悪いが、僅かに残った壁溝から復原が可能となった。

一辺約３ｍ以上の竪穴住居跡と考えられるが、北・西壁は調査区外の為規模は不明である。平面プランはコーナー部分が壊されているが、方形もしくは隅丸方形で、Ｐ01・Ｐ07東を主柱穴と推定した。両柱穴



第５図　ＳＢ01平面図（1：50）

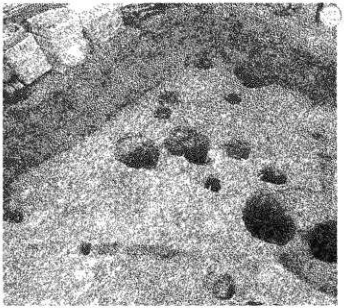


写真３　ＳＢ01完掘状況（南から）

とも直径30cm、深さ30cm程で柱間は約1.8mとなる。壁溝は幅10～15cm、深さ5～10cmである。炉跡は確認できなかった。

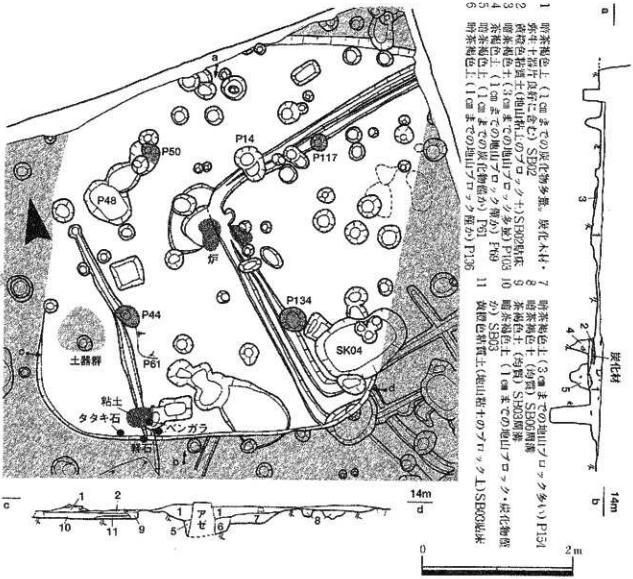
埋土は暗茶褐色土一層であったが、SB03埋土との境は明瞭ではなかった。

出土遺物は床面直上・埋土中ともに僅かな土器片に限られ、時期を決定するには至らないが、SB03に壊されていることから弥生時代後期前半以前と考えられよう。

SB02（第6～8図、写真4～10）

調査区北西に位置する。SB03・06を切り、検出した住居跡の中では最も新しいと考えられた。

一辺4.5～5mの竪穴住居跡で、やや歪な隅丸方形の平面プランを呈す。掘り込みの深さは、残りの良かった北辺地点で約15cmである。P50・117・134・44が主柱穴と推定され、柱間は2.2～2.3mである。主柱穴は直径20～30cm、床面からの深さ40～45cmを測る。住居跡のほぼ中央附近の床面が被熱により変色しており、炉跡と推定された。また、床面の貼床（地山粘質土のブロック土）が部分的に観察できた。なお、壁際の溝は無い。



第6図　SB02平・断面図（1：50）

埋土は暗茶褐色土一層であるが、炭化物を多量に含む点が特徴であり、部分的に炭化材も認められた。焼失家屋の可能性がある。

南西隅の床面直上にて土器群が検出されたが、さらに南の壁際では30㎝大の粘土塊（土器づくりの生地か）、ベンガラ（丹彩用か）、タタキ石、軽石、石斧が集中して出土し、材料・工具置き場の様相であった。出土土器の年代観は村木編年の弥生時代後期後半1［村木1999］であり、この時期を住居の廃絶と考える。

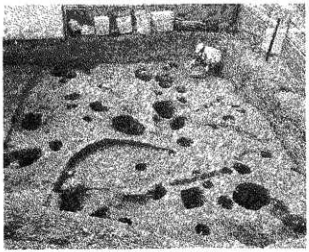


写真4　ＳＢ02西半完掘状況（東から）

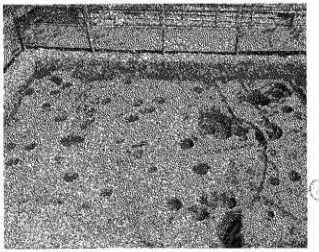


写真5　ＳＢ02東半完掘状況（西から）

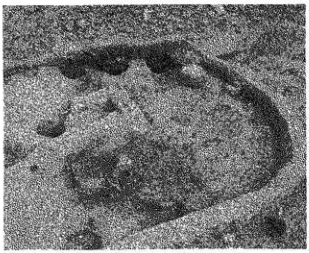


写真6　ＳＢ02西半遺物出土状況（西から）

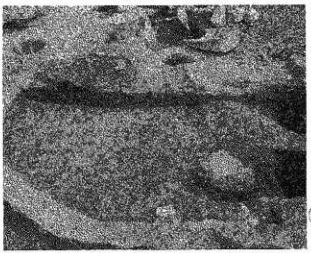


写真7　ＳＢ02西半遺物出土状況（南から）

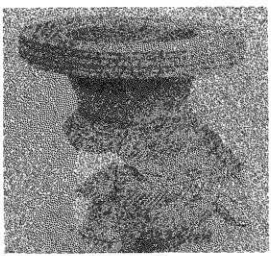


写真8　ＳＢ02出土弥生土器

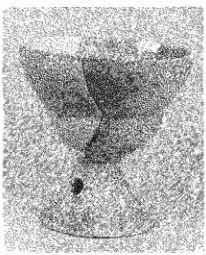


写真9　ＳＢ02出土弥生土器

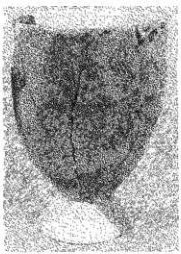
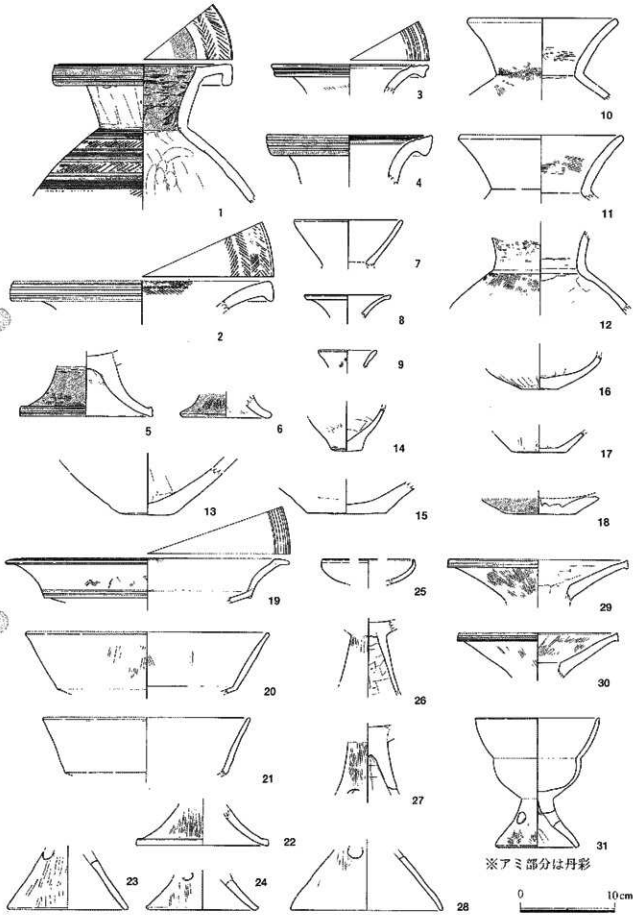
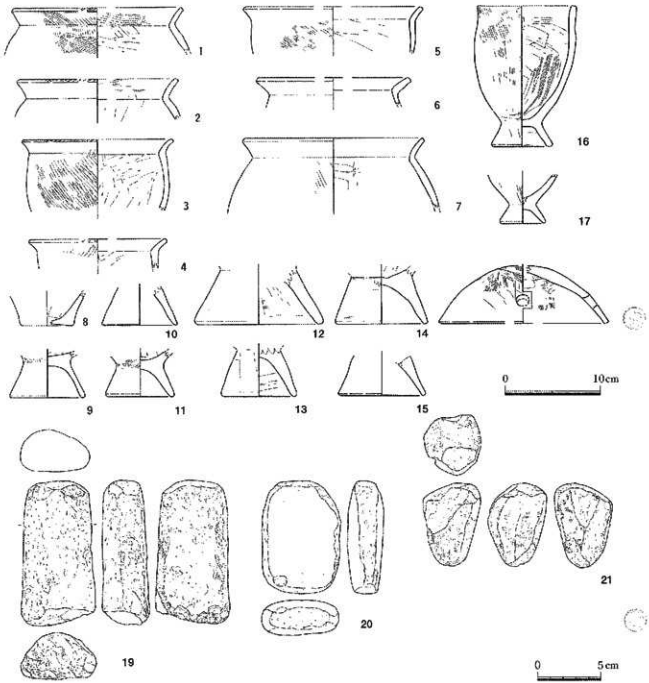


写真10　ＳＢ02出土弥生土器



第7図　SB02出土遺物その1（1：4）



第8図　ＳＢ02出土遺物その２（土器１：４・石器１：３）

ＳＢ03（第９・10図、写真11）

調査区北西端に位置する。ＳＢ01・04を切り、ＳＢ02には切られる。

北・西壁は調査区外の為規模は不明であるが、主柱穴の位置等から一辺約5.5m程の規模の竪穴住居跡を復原する。平面プランはコーナー部分が壊されているが、方形もしくは隅丸方形で、掘り込みの深さは、残りの良かった南辺地点で約10cm である。Ｐ07・42・63・59が主柱穴と推定され、柱間は南北2.5m東西2.8mである。主柱穴は直径25～40cm、床面からの深さは60～80cm とかなり深い。住居跡のほぼ中央附近の床面が被熱により変色しており、炉跡と推定されたが、後のピットにより一部が壊されている。壁際の溝は東辺のみ遺存したが、幅15～20cm、深さ５～10cm である。当初より部分的であったかどうかは不明で

ある。南壁中央には貯蔵穴と考えられる長方形の土坑を検出した。長さ1.2m幅80cm、深さ3cm ほどの浅い掘り込みの中に、さらに長さ60cm 幅40cm 深さ30cm に掘られている。床面には貼床（地山粘質土のブロック土）が僅かに認められた。

埋土は暗茶褐色土一層で、前述のようにSB01との区別は難しかった。

良好な床面直上遺物はないが、埋土中から弥生土器片が出土している。出土土器の年代観は弥生時代後期前半頃であり、この時期を住居の廃絶と考える。

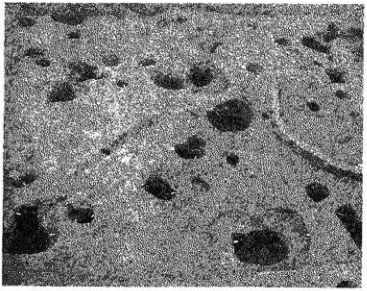
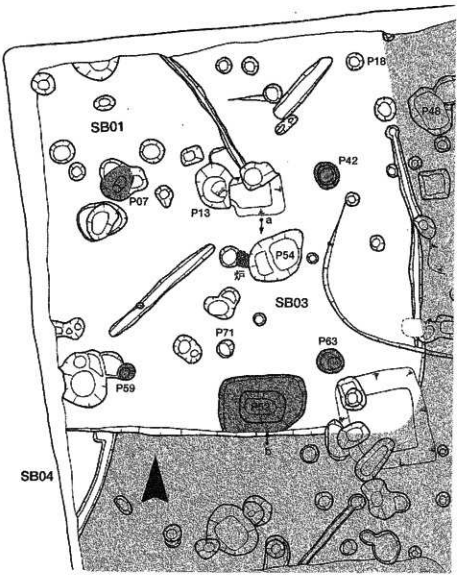
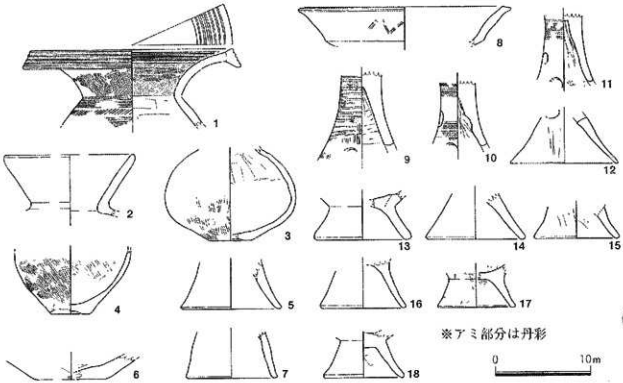


写真11　SB03完掘状況（南から）



第9図　SB03・04平・断面図（1：50）



第10図　ＳＢ03出土遺物（1：4）

ＳＢ04（第9・12図）

調査区の西端に位置するが、大半が調査区外となり、かつＳＢ03に切られているため、平面形状や規模は不明である。断面で観察できた掘り込みの深さは約20㎝ で、僅かに残った壁溝は幅15㎝、深さ５㎝ を測る。

埋土は黒みの弱い暗茶褐色土一層が堆積する。

埋土中から出土の土器片は、弥生時代後期前半である。

ＳＢ05（第11・12図、写真12）

調査区中央の南に位置する。南半が調査区外となり、かつＳＢ02・06に切られているため遺存状態は悪い。僅かに東壁と壁溝の一部が残るだけであったが、おおよそ、一辺4.5mの竪穴住居跡を想定した。

掘り込みの深さは、残りの良い部分でも10㎝ ほどで、壁際の溝は幅20㎝、深さ5㎝ である。さらに内側に同規模の溝があり、壁溝は２重の可能性があった。４木の主柱穴のうち３本（P33・88・151）を推定したが、大きさ（20～50㎝）深さ（35～70㎝）にばらつきがあり、当住居跡の主柱穴である確証はない。一応柱間は約2.2mとなる。P88と151の中間床面が被熱により変色しており、炉跡と推定されたが、主柱穴の推定が正しければ、中央よ

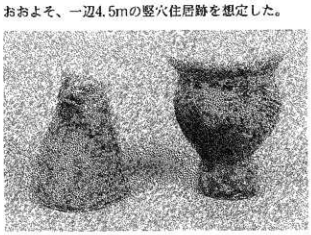
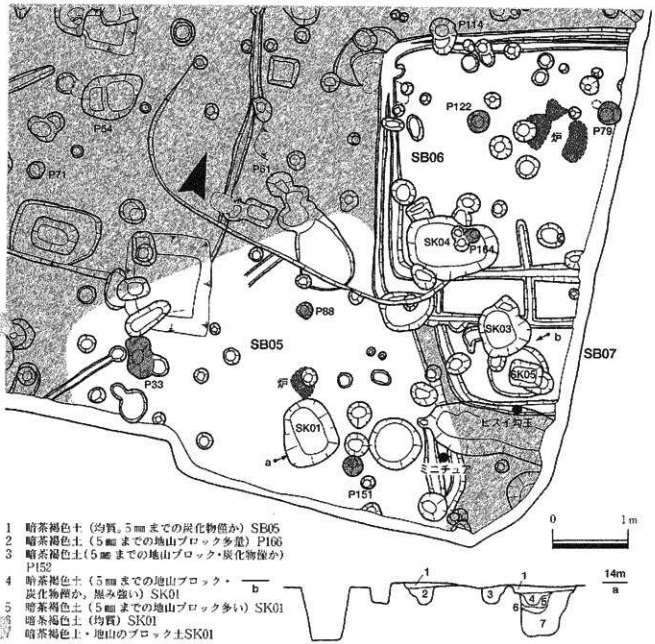


写真12　ＳＢ05出土ミニチュア土器



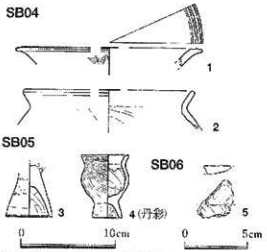
1 暗茶褐色土（均質。5㎜までの炭化物微か）SB05
2 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロック多量）P166
3 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロック・炭化物微か）P152
4 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロック・炭化物微か。黒み強い）SK01
5 暗茶褐色土（5㎜までの地山ブロック多い）SK01
6 暗茶褐色土（均質）SK01
7 暗茶褐色土・地山のブロック土SK01

第11図　ＳＢ05･06･07平・断面図（1:50）

り東側に炉があったことになる。

埋土は炭化物を僅かに含む暗茶褐色土一層が堆積する。

床面直上の遺物には、南東コーナー近くから出土したミニチュアの土器２点がある。うち、台付鉢の器面には丹が良く残る。埋土中の遺物は小破片のみであり、時期の決め手を欠くが、切り合いの関係から弥生時代後期前半以前を推定する。



第12図　ＳＢ04･05･06出土遺物（土器1:4・石器1:3）

ＳＢ06（第11・12図、写真14）

調査区東端に位置し、東壁は調査区外となる。ＳＢ05･07を切り、ＳＢ02に切られる。一辺約４ｍの方形の竪穴住居跡で、掘り込みの深さは、残りの良かった地点でも5㎝ほどである。主柱穴は４本と推定されたが、そのうちの3本（Ｐ122・79・164）を検出した。柱間は南北1.5ｍ東西1.7ｍである。主柱穴は直径約30㎝、床面からの深さは40～50㎝である。住居跡の中央北寄りの床面３ヵ所が被熱により変色しており、炉跡と推定された。壁際の溝は２重であり、北と東辺は２重とも壁に沿って、南辺は内溝が壁から約１ｍ離れた地点をめぐっていた。また、南壁中央附近からは壁に直交する長さ1.3ｍの溝があり、間仕切り施設の痕跡と思われた。それぞれの溝の規模は幅15～20㎝、深さ５～10㎝である。なお、床面には貼床（地山粘質土を多く含むブロック土）が僅かに認められた。

埋土は炭化物は含まない均質な暗茶褐色土である。

出土遺物は床面直上・埋土中ともに僅かな土器片・石器片に限られ、時期を限定するには至らないが、ＳＢ02に壊されていることから弥生時代後期の前半と考えられよう。図示（第12図５）した遺物は磨製石斧片である。

ＳＢ07（第11・13図、写真13）

ＳＢ06南に位置する。北はＳＢ06に切られ、東は調査区外、かつ住居内もＳＫ03・05によって壊されているため、遺存状況は極めて悪い。

壁溝（幅10～20㎝、深さ５㎝）のコーナーが残ったため、方形プランの竪穴住居と推定されるが規模は不明である。

埋土は地山ブロックを僅かに含む暗茶褐色土一層が堆積した。

埋土中の出土遺物は僅かな土器片のみであったが、南辺の壁溝内からはヒスイ製の勾玉が出土し注目された。

なお、少ない土器片・勾玉から住居の時期を限定することは難しいが、切り合い関係を尊重して、弥生時代後期前半を想定する。

写真13　ＳＢ07ヒスイ勾玉出土状況

第13図　ＳＢ07出土ヒスイ勾玉（原寸）

写真14　ＳＢ06･07完掘状況（南から）

その他の遺構

住居跡以外では、性格・用途の明らかな遺構はない。ただし、これら用途不明のピットや土坑から出土する土器類のほとんどが弥生時代後期のうちにおさまり、住居跡と併行する時期の遺構であることがわかる。この他の時代では、わずかに平安時代の灰釉陶器が出土したにすぎない。

P13（第5・14図、写真15～17）

ＳＢ01南東隅附近にて検出。ＳＢ01埋没後の掘削と推定した。東西50cm 南北60cm の楕円形の掘り込みで、深さは約60cm を測った。埋土の暗茶褐色土には、焼土粒・炭化物が多く含まれ、火災の影響を受けた土の流入と推測された。

底近くから高坏が、埋土中から脚部が大きく開く小型の高坏片、台付甕片が出土した。開脚高坏はクシ状工具による沈線と刺突紋が施される、台地部では数少ない土器である。高坏の年代観は村木編年［村木1999］の弥生時代後期後半３頃、屈折脚高坏は赤塚編年［赤塚1990］の廻間１式４からⅡ式１頃である。

写真15　P13土器出土状況

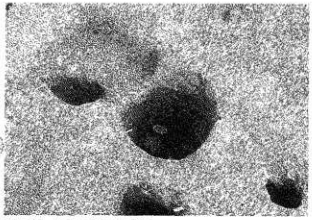


写真16　P13土器出土状況

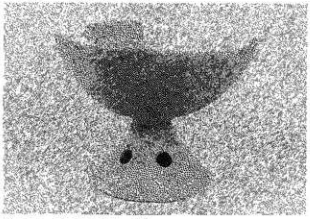
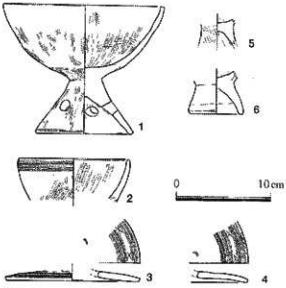
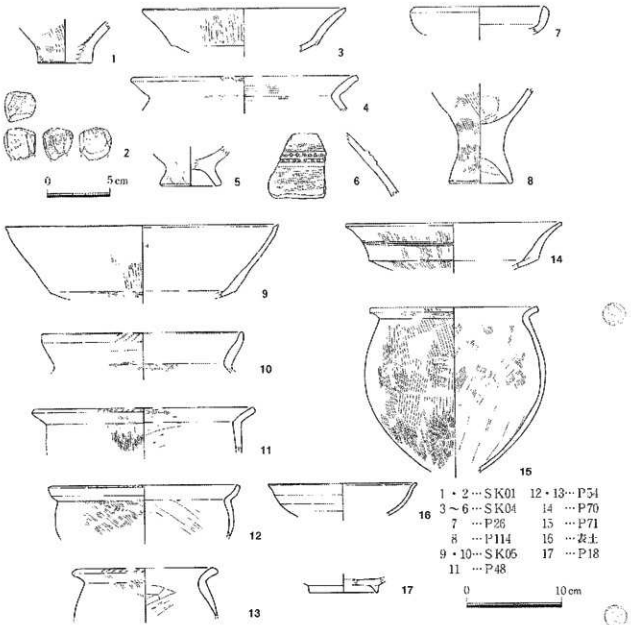


写真17　P13出土弥生土器



第14図　P13出土遺物（1：4）



第15図　その他の出土遺物（土器1：4・石器1：3）

V　おわりに

今回の調査は70㎡と小規模な発掘であったが、遺構埋土はどれもひじょうに良く似ており、切り合い関係の把握等、調査には難しさも伴った。その中で、予想以上に多くの成果を得ることができた。主なものを以下にまとめておく。

調査区内では7軒の住居跡が重なり合って見つかった。当地点の土地利用が、居住域であることが明かとなったわけであるが、時期的には弥生時代後期に集中していた。他地点では、縄文時代中期の住居跡・弥生時代中期の方形周溝墓・中世の溝や土壙等の検出もあることから、弥生時代後期に集中している点は、当地点の特色と言えよう。

遺構で注目されたのは、埋土中に炭化物・炭化材を多く含んだSB02で、焼失家屋の可能性が考えられ

た。ただし、床面全体は強く焼けた様子がなく、出土した粘土塊も生地のまま残ることから、焼失時はさほどの高温にはならなかったようでもある。

当遺跡で焼失家屋の多いことは、20年前の１次調査時点にすでに明らかで、大規模な火災の結果、集落としては放棄された可能性が述べられてきた。ただし、焼失家屋出土の土器の検討からは、後期前半３の時期と後期後半１の２時期にわたっていることが指摘されており、すべて同時期の焼失ではないようである(1)。このことがどのような意味をもつかは今後の課題であるが、２回目の住居の焼失時期は環濠の埋没時期とも一致している。その後は住居跡が確認されていないことから、後期後半１の時期が環濠集落としての廃絶時期であることは確かであろう。したがって、今回検出のＳＢ02は環濠集落最後の住居のひとつとなる。

遺物では、ＳＢ02床面出土の遺物、ＳＢ07壁溝出土のヒスイ勾玉、Ｐ13出土の土器等に注目された。

ＳＢ02では、後期後半１のまとまりのある土器群（同時期では４次調査のＳＢ02の資料がある）が出土したが、より注目されたのは南壁際で出土した、30㎝大の粘土塊、ベンガラ小塊、タタキ石、軽石、石斧である。これらは、土器作りの材料や工具類と考えられ、住居の南側が道具置き場になっていたことがわかり興味深い。

Ｐ13出土の土器は、後期後半３の時期で、これまでの調査ではほとんど例のない時期のものである。住居跡が後期後半１期までしか確認できていないことは前述のとおりであるが、こうした時期の遺構の存在は環濠が埋った後も、集落は完全になくなったのではなく、規模を縮小して存続していた可能性を想定させる。集落の動向を考える上で、重要な遺物となろう。

弥生勾玉は、瑞穂遺跡で４例目（内３点がヒスイ製）となる。名古屋市内では、この他見晴台・二王山遺跡で各1点出土しているのみであり、突出して多い印象を受ける。ただし、調査の面積や地点の問題もあり、一概には判断できない。

今回の調査は1986年の４次調査からは実に13年ぶりであり、その意味においても有意義であった。今後も継続した調査や大規模な調査には期待できないが、小さな調査の積み重ねこそ、都市部での遺跡解明の生命線であることも否めない。今後も宿命的に地道な調査を続けていかなければならないであろう。

註

(1)［村木1998］P14.

参考文献

赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

犬塚康博1988『考古学の風景』名古屋市博物館

水野裕之1999「弥生勾玉からみた朝日遺跡とその周辺－愛知県の出土資料から－」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第１号　名古屋市見晴台考古資料館

村木誠1999「名古屋市域における弥生時代後期土器と環濠集落の動向」『埋蔵文化財調査報告書30　三王山遺跡（第1～5次）』名古屋市教育委員会

村木誠1998『よみがえる環濠集落　－弥生時代後期の名古屋－』名古屋市見晴台考古資料館

山田猛　1980『瑞穂遺跡　1951・52・54年度発掘調査報告－』南山大学人類学博物館

名古屋市教育委員会1979『瑞穂遺跡・桜台高校遺跡発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会1982『瑞穂遺跡発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会1985『第五次瑞穂遺跡発掘調査概要報告書』

名古屋市教育委員会1987『瑞穂遺跡－第4次調査の概要－』

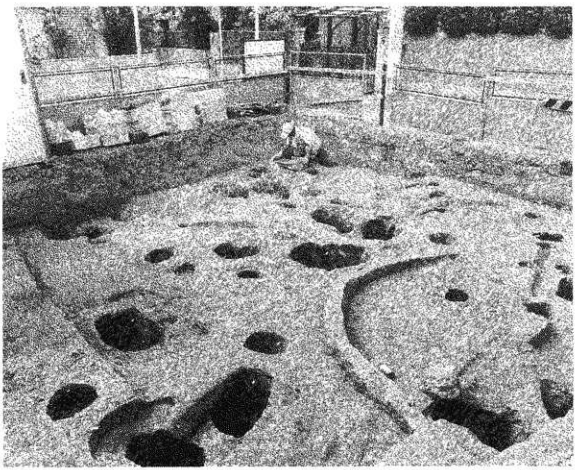


写真18　西半区完掘状況

春日野町遺跡（第２次）

見晴台遺跡（笠寺公園）から遺跡を望む

例　　言

1　本編は、春日野町遺跡第2次発掘調査の報告である。

2　調査地点は、名古屋市南区春日野町35－2と36－2地内の2箇所（東区と西区）である。

3　調査期間は、平成11年11月8日から同年12月7日までである。

4　調査面積は、東区（約100㎡）と西区（約90㎡）の計190㎡である。

5　調査は、個人住宅建設に伴うもので、土地所有者の協力を得て、国庫補助金による名古屋市教育委員会の事業として実施した。調査事務は、教育委員会文化財保護室学芸員　小島一夫、現場調査は、名古屋市見晴台考古資料館学芸員　服部哲也、水野裕之が担当した。

6　排土工事は、安井建設株式会社が工事請負で実施した。

7　基準点測量等は、松岡測量設計株式会社に委託した。

8　出土遺物、記録類は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

9　本編は、服部の協力を得て水野が執筆した。

10　検出遺構、出土遺物については、尾野善裕、野澤則幸、伊藤正人、村木誠、田原和美の各氏から多くのご教示を得た。

目　　次

Ⅰ遺跡の位置と環境……67

Ⅱ調査の経過……68

Ⅲ調査の成果……69

1東区

(1)基本土層

(2)遺構と遺物

2西区

(1)基本土層

(2)遺構と遺物

Ⅳ小結……78

第1図　遺跡の位置（丸印）〔5万分の1地形図「名古屋南部」〕

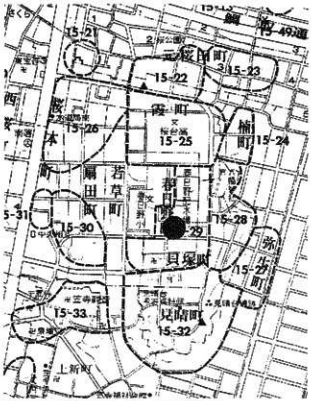
Ⅰ　遺跡の位置と環境

春日野町遺跡は、名古屋市の南東部にあたり、熱田層から成る更新世台地に立地するが、台地の崖線は小規模な谷が入ることによって複雑な曲線をなすところが多い。

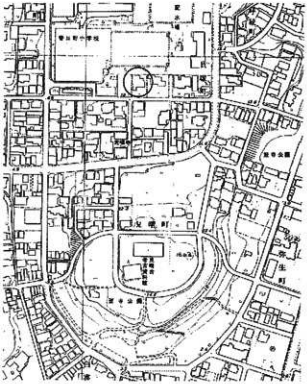
昭和17年(1942)頃、貯水池工事のときに、石斧や石鏃が採集されて遺跡の存在が知られた。そして、昭和35年(1960)の春日野配水場と昭和37年のその拡張工事の際には、弥生時代の土坑や古墳時代の住居跡が確認されている。遺跡範囲の南部では、昭和31年頃に溝状遺構も検出されている(註1)。

その後は、平成6年に当市教委による初めての発掘調査が行われたが、近世以降の坑などによって古い時期の遺構が失われた状態であった。今回は、2地点めである。

周辺の遺跡は、群をなしていて、第3図に示した範囲では、弥生時代、古墳時代の集落や墓、そして、古代、中世の遺構や遺物が検出されている所が多い。



第3図　周辺の遺跡（黒丸が調査地点）


第2図　調査の位置（○印）（5万分の1）

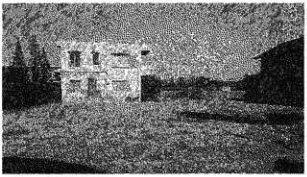
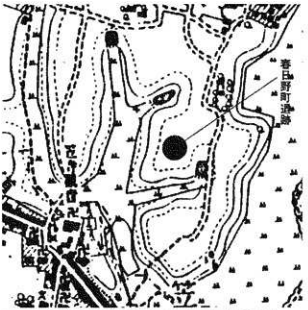


写真1　調査前状況



第4図　明治時代地形図と調査位置（●印）（1万分の1）

Ⅱ　調査の経過

調査地点は、遺跡範囲の中央部に近く、付近の現況は住宅地域である。今回は、個人住宅建設が計画された２箇所の建物敷地を対象に発掘調査を行った。

調査区は、東側を東区（約100㎡）、西側を西区（約90㎡）として、調査記録を残した。遺構番号（SK、SD、Pit など）は、両調査区の通番にした。なお、発生土の積み置き場所等の関係で、東区を終了させた後に西区を調査した。

東区は、11月10日から表土除去を行ない、11月22日に埋め戻しを行なった。西区は、11月25日から表土除去を行ない、12月７日に埋め戻しを終了した。

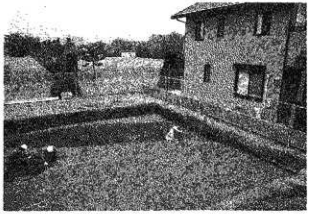


写真２　調査状況（東区）

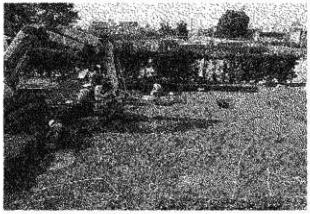
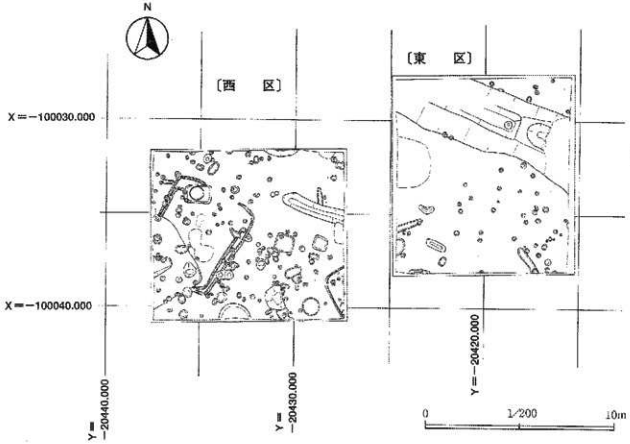


写真３　調査状況（西区）



第５図　調査区位置図

Ⅲ　調査の成果

1　東区

(1)基本土層

当調査区に堆積していた土層は、現地表から地山面である熱田層上面までが60～70cm 程という比較的薄い割には近現代の撹乱部分が少なかった。調査区内の地山面は、現地表と同じくほぼ水平面をなしていた。

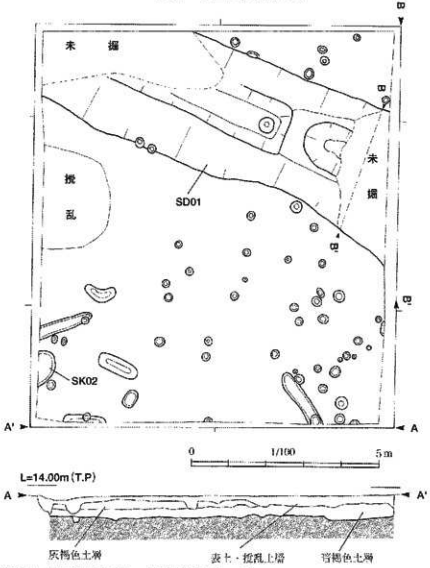
基本的な堆積層は、表土・撹乱土層が15～25cm。灰褐色上層が15～25cm。この層は、中世末～近世に相当すると思われる。そして、その下に古墳時代に相当すると思われる暗褐色上層が地山面まで約25cm の厚さで堆積していた。

(2)遺構と遺物

当区では、地山である熱田層上面で遺構を検出した。調査区の北半では、幅３ｍあまりの大規模な溝状遺構（ＳＤ01）が検出され、当初は、近隣の見晴台遺跡や桜田貝塚と同じように弥生時代後期の環濠の一部ではないかと思われたが、埋土中の遺物や溝の形状などから室町時代後期～戦国期の城館跡に伴う堀の一部と考えられる。当遺跡や隣接する遺跡群では、これまでに、このような規模の中世の遺構は検出されていなかったため予想外の成果であった。このほか、建物等の柱跡と思われるピット（小穴）を56基検出した。古墳時代と思われる土師器小片を含むものが多いが、時期、性格等は不明である。

写真４　調査状況（北西から）

写真５　東区全景（南から）



第６図　東区遺構平面図・土層断面図（Ａ－Ａ'）

●SD01

調査区の北東部で、幅約3mの溝状遺構の一部を検出した。検出部分では、ほぼ直線状をなすが、南側肩のラインはやや曲線を示す。埋土は、最下層のグライ化した植物遺体を含む層以外は数cm大のブロック状の土であり、人為的に埋め戻された状況であった。遺構の断面形状は、概ね逆台形状であり、底面は、ほぼ水平であるが、検出範囲の西側では、東より約70cm下がり、段差が付いている。

埋土中の出土遺物では、中世陶器と土師質の土鍋類が遺構埋没時期を示すものと判断され、遺物の下限は16世紀前葉頃と思われるが、古瀬戸後期（註2）の柄付片口は15世紀前葉頃の製品かと思われる。

遺構の規模、形状、出土遺物からみてSD01は、室町時代（戦国期）の城館跡に関係する堀と思われる。

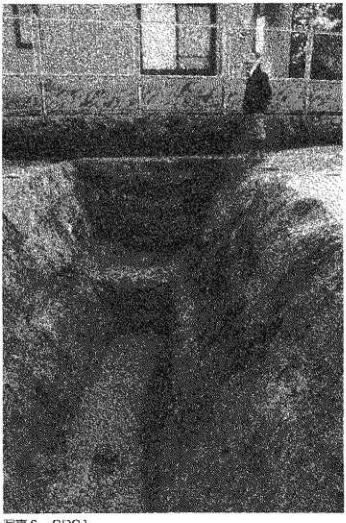
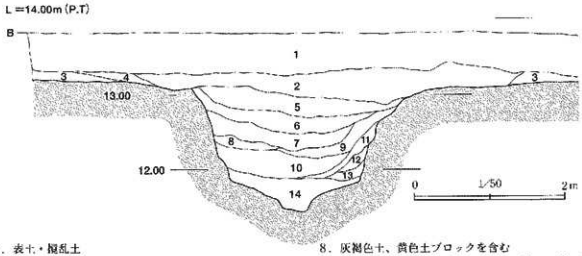
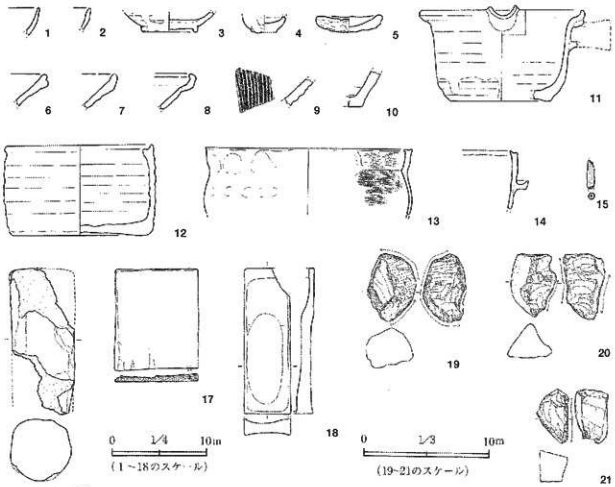


写真6　SD01

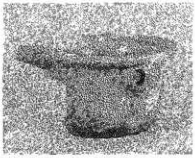


1. 表土・撹乱土
2. 灰褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗褐色土、灰褐色土が少しまじる
5. 白色粘土、黄色土、暗褐色土ブロック（2～8cm大）の層
6. 灰褐色土中に暗褐色土ブロックを多く含む
7. 白色粘土ブロック（3～10cm大）の層
8. 灰褐色土、黄色土ブロックを含む
9. 灰褐色土、暗褐色土ブロック（8～10cm大）を含む
10. 白色粘土、灰褐色土ブロック（5cm大）の層
11. 暗褐色土、無味つよく均質
12. 黄橙色土、灰褐色土ブロックを含む
13. 白色粘土、黄色粘土ブロックの層
14. 暗青灰色粘質土、植物遺体を多く含む

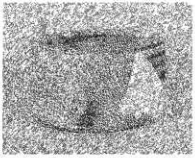
第7図　東区SD01埋土断面図（B－B'）



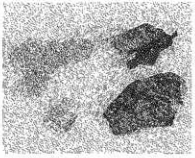
第8図　SD01出土遺物



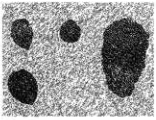
△柄付片口



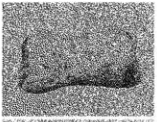
△匣鉢



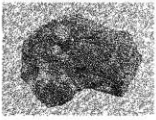
△土鍋・羽釜



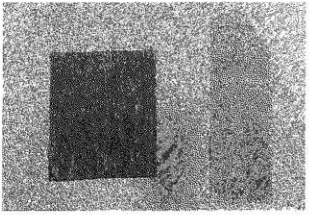
△
植物種子



▽
獣骨



鉱滓▷



△板・石硯

写真7　SD01出土遺物

●ピット・その他

ピットは、径15～25cm、検出面である地山上面からの深さが10cm ほどのものがほとんどであった。SD01の南側では、埋土の状態や個々の大きさが類似し、建物跡かと思われるものの、形状、規模は復元が困難である。出土遺物は、古墳時代と思われる土師器の小破片がわずかに出土するものが半数程度であった。

その他には、ごく浅い掘り込みの小規模な溝状遺構の一部や土坑状の一部が検出されたが、いずれも出土遺物は、ごくわずかであった。埋土の状態からは、ピット群とともに、古墳時代の遺構の可能性を有するが不明確である。

第9図　東区の主な出土遺物

表1　東区の主な出土遺物（第8、9図の番号と共通）

No.	出土位置	器種	備考	No.	出土位置	器種	備考
1	SD01	鉄釉碗	古瀬戸後期～大窯Ⅰか	17	SD01	板	木口面に木釘
2	SD01	鉄釉碗	古瀬戸後期～大窯Ⅰか	18	SD01	石製	頁岩か
3	SD01	灰釉平碗	古瀬戸後期	19	SD01	火打石	黄桃色のチャート
4	SD01	鉄釉茶入か		20	SD01	火打石	黄桃色のチャート
5	SD01	土師質皿	手づくね	21	SD01	火打石	黄桃色のチャート
6	SD01	擂鉢	古瀬戸後期Ⅳ～大窯Ⅰ	22	SD01	壺	弥生後期（山中式）
7	SD01	擂鉢	古瀬戸後期Ⅳ～大窯Ⅰ	23	包含層	土師器台付甕	
8	SD01	擂鉢	古瀬戸後期Ⅳ～大窯Ⅰ	24	包含層	土師器壺	
9	SD01	擂鉢	古瀬戸後期Ⅳ～大窯Ⅰ	25	撹乱土	須恵器高坏	
10	SD01	壺または甕	常滑	26	包含層	土錘	弥生～古墳時代
11	SD01	柄付片口	古瀬戸後期皿か	27	SD01	打製石斧	凝灰岩か、一部に研磨痕
12	SD01	匣鉢	古瀬戸後期	28	SD01	剥片	チャート、二次加工あり
13	SD01	土師質鍋	内彎形内耳鍋	29	SD01	くさび形石器	チャート
14	SD01	土師質羽釜		30	SD01	剥片	下呂石、二次加工あり
15	SD01	土錘		31	SD01	削器	チャート
16	SD01	土棒	赤橙色に焼成	32	SK02	研磨具か	砥石

2　西区

(1) 基本土層

当区は、東区から2mあまりしか離れていないため、基本的には同様な状況であるが、西区のほうが、東区よりも地山面の熱田層が0.3～0.5m高くなっている。当区では、熱田層の上面の残りが良く、粘性の強い黄橙色土が検出される。

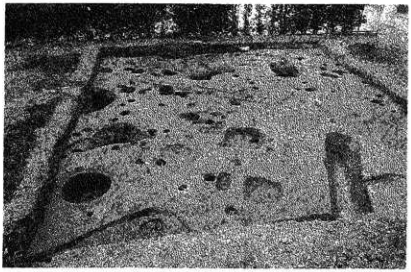
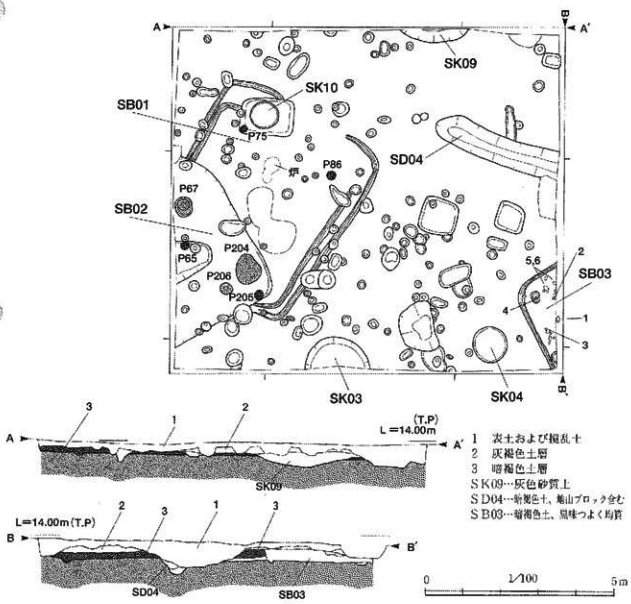


写真8　西区全景（東から）



第10図　西区・遺構平面図・土層断面図（A－A'、B－B'）

(2) 遺構と遺物

当区では、竪穴住居跡（ＳＢ01～03）、溝状遺構（ＳＤ04ほか）、井戸跡と思われる土坑（ＳＫ03、04、10）などのほか、柱跡かと思われるピット多数（150基）を熱田層面で検出した。

竪穴住居は、３軒分を検出した。周溝の痕跡でプランが確認され、平面形の規模が推定できるＳＢ01は、柱穴埋土を含め、住居に伴うと思われる遺物がほとんど検出されなかった。ＳＢ02は、ＳＢ01を切って重複していたが、残存状況が悪く、住居の床に施したと思われる貼土の範囲でそのプランを検出した。ＳＢ03は、調査区の南東隅で検出された住居の隅部であり、地山を少し掘り下げた壁の立ち上がりや周溝が比較的良好に検出された。また、床面付近では、古墳時代の土師器類が出土した。

東区のＳＤ01との関わりを示す中世の遺構は、あまり検出されなかったが、ＳＫ03、ＳＫ09、ＳＤ04などがある。また、近世～近代と思われる井戸などもあり、多様な時期や性格の遺構が検出されている。

●ＳＢ01

長軸を北東から南西にとる5.3×4.7mの規模の竪穴住居跡である。北東辺は、周溝が切れているようである。周溝が二重になる部分が多いが、同時の構造物であったかどうか不明である。地床炉を伴う。

主柱穴と思われるピット４基は、径約20cm、深さ30～40cmで、１基から土師器？細片出土。

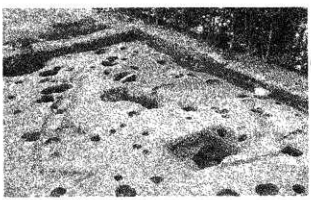


写真９　SB01

●ＳＢ02

ＳＢ01の南西隅部分を切る位置で検出された。周溝は検出されなかった。東側の隅付近のＰ204は、当住居の貯蔵穴と思われるが、埋土から須恵器の脚小破片が出土した。床部分の貼土中からは、土師器の細片がわずかに検出されただけであるが当遺構は、須恵器を伴う時期の古墳時代に相当できようか。

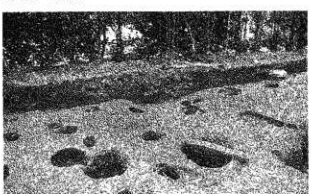


写真10　SB02

●ＳＢ03

竪穴住居跡の北西隅部分付近を検出したが、遺構の状態は他よりも良好であった。平面形は、ＳＢ01、02とほぼ同様で、隅丸方形を呈すると思われる。その長軸方向は不明であるが、ＳＢ02の方向に近いようである。柱穴は、明確ではなかった。

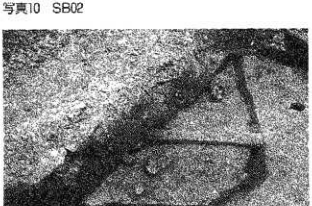
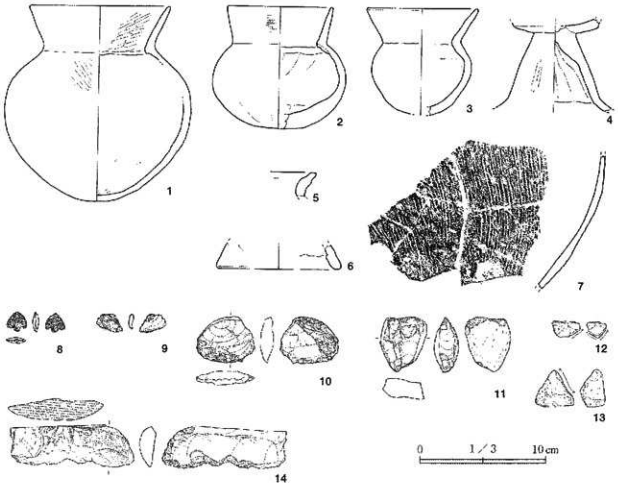


写真11　SB03

壁の立ち上がりは、土層断面を見ると暗褐色土包含層を掘り込んで造られていて、地山の床面までの埋土は約25cmの厚みがあった。周溝の幅は、５cmほどであった。埋土からは、土師器片等の遺



No.	出土位置	器　種	備　考	No.	出土位置	器　種	備　考
1	10図の1	土師器直口壺	松河戸期新相	8	埋　土	石鏃	黒曜石
2	10図の2	土師器小型壺	松河戸期新相	9	埋　土	剥片	黒曜石
3	10図の3	土師器小型壺	松河戸期新相	10	埋　土	削器	チャート
4	10図の4	土師器高坏	松河戸期新相	11	埋　土	石核	くさび形石器か、下呂石
5	10図の5	土師器台付甕	S字甕D類	12	埋　土	研磨具か	軽石
6	埋　土	土師器台付甕	5と同個体	13	埋　土	研磨具か	軽石
7	10図の6	土師器台付甕	5と同個体	14	埋　上	剥片刃器	ホルンフェルスか、片面に研磨痕

第11図　SB03出土遺物

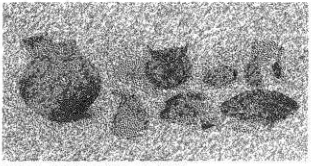


写真12　SB03出土遺物（土師器）

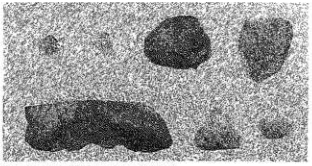


写真13　SB03出土遺物（石器）

物が比較的多く出土したが、石鏃や削器、剥片など弥生時代から縄文時代晩期ころまでの可能性をもつ石器が混入して出土した。

土師器群は、主に住居の床面付近で出土し、当遺構に伴うと思われる。当調査区内では住居の一部分しか検出できなかったが、複数の小型壺やS字状口縁台付甕（D類のなかでもより新しいものか）などの特徴から加納編年の松河戸期新相（註3）に相当するものと思われる。

●SK03

径約1.7mの円形を呈すると思われる遺構であるが、南側が調査区外のため未検出である。出土遺物がなかったが、現地表から約2mまで（以下未掘）では底面が確認できず、埋土の特徴や上層断面の観察からみて中世～近世の井戸遺構と思われる。断面形は、開口部にむけてやや開く。

●SK04

径約1mの円形を呈し、垂直に近く掘り下げられた遺構で、完掘していないがこれも井戸遺構と思われる。埋土からは、18世紀頃の瀬戸美濃陶器碗、常滑赤物火鉢片などが検出され、この頃に埋った遺構である。

なお、SK10も井戸遺構と思われるが、近現代の撹乱土で埋っており本来の遺構の時期は不明であった。

●SK09

調査区の北壁で検出された遺構の一部である。付近の上層断面観察では、東区の戦国期に埋った堀（SD01）と同様に、古墳時代の包含層を切って造られた遺構の埋土をパックして灰褐色土層が堆積している。埋土からは、16世紀前葉頃と思われる擂鉢片が検出されている。

遺構の形状、規模、性格については、主要部分が調査区外にあたるため不明である。

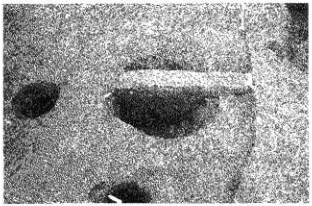


写真14　SB02貯蔵穴か（P204）

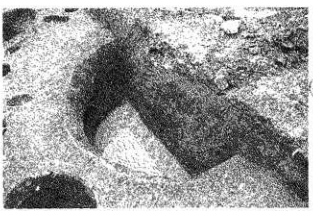


写真15　SK03

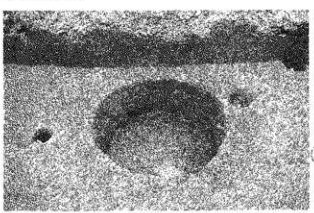


写真16　SK04

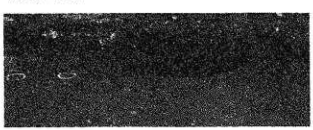


写真17　SK09

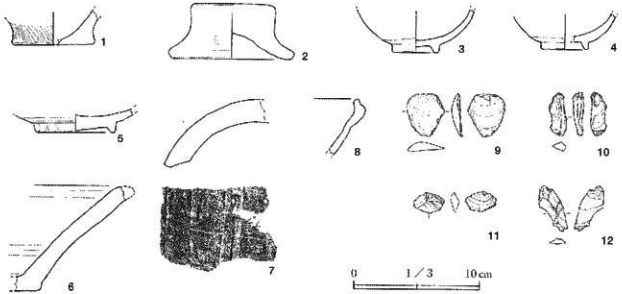
●SD04

幅75～80cm、深さ約40cmの溝状遺構である。調査区の東側からさらに東方向にほぼ直線状に造られていて、溝の断面形は、上が開いたU字形である。埋土からは、鉄釉天目茶碗小片、山茶碗小片などが検出された。天目茶碗は16世紀、山茶碗は12世紀中葉頃の製品と思われる。

●ピット

当調査区のほぼ全面にわたって径15～20cm、深さ10～20cmほどのピットが多数検出された。竪穴住居以外の建物跡の存在が推定されるが、現在のところ不明である。検出した200基中、48基から古墳時代と思われる土師器小片が出土し、中世陶器、奈良時代須恵器、古墳時代須恵器片を含むものが、それぞれ1基ずつであった。

写真18　SD04



No.	出土位置	器　種	備　考	No.	出土位置	器　種	備　考
1	包含層	甕	弥生中期	7	SK04	丸瓦	
2	包含層	台盤状土製品	弥生中期	8	SK09	摺鉢	古瀬戸後期Ⅳ～大窯Ⅰ
3	SK04	灰釉碗	瀬戸美濃陶器、18世紀	9	P108	剥片	下呂石
4	SK04	灰釉碗	瀬戸美濃陶器、18世紀	10	P110	剥片	下呂石
5	SK04	褐色釉丸碗	瀬戸美濃陶器、18世紀	11	P194	剥片	下呂石
6	SK04	火鉢	常滑赤物、18世紀	12	P155	剥片	チャート

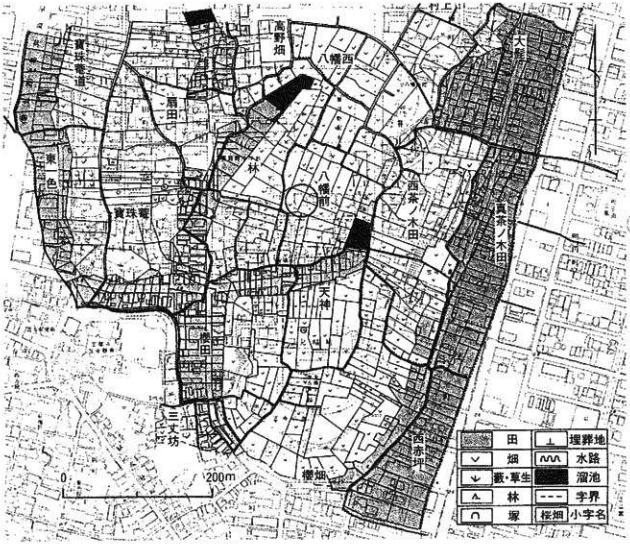
第12図　西区の主な出土遺物

Ⅳ　小結

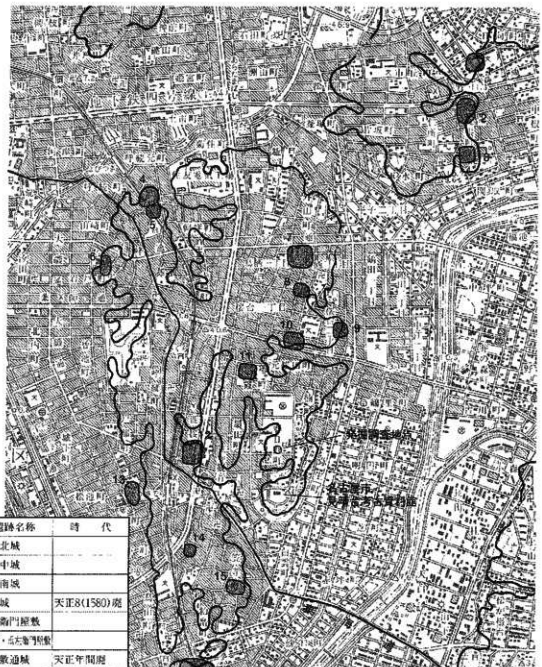
今回の調査で検出された遺構には、3軒の竪穴住居跡があった。古墳時代か弥生時代か特定できていないＳＢ01、須恵器小片が貯蔵穴かと思われる遺構から出土したＳＢ02、そして、西暦400年前後かと思われる土師器群を伴うＳＢ03である。これらは、昭和35年の三渡氏の調査以来の住居跡の検出であった。

さらに、検出遺構のなかで注目されるのが、室町時代（戦国期）の城館に関係する堀と思われるＳＤ01である。文献等で現在把握されている中世城館跡の分布（第14図）に収入っていなかったが、近隣の扇田町遺跡（註4）でも13～16世紀の陶器類を伴う溝状遺構が検出されており、南の見崎台遺跡から、北側の桜台高校遺跡あたりの台地上では、近年の発掘調査によって中世の遺構が広範囲で広がっていた状況が部分的にではあるが明らかになってきている。今回検出したＳＤ01は、これまで周辺遺跡で検出したものより遺構の規模が大きく、明治時代の地形図や地籍図（第13図）を参考にすると城館の立地にふさわしいことが理解できる。

遺物については、弥生時代中期後葉頃かと思われる台石状土製品（註5）が包含層から検出されたほか、ＳＤ01からは、従来三河や遠江を中心に分布するタイプの土師質内耳鍋（「内彎形内耳鍋」（註6））がこの地で検出されたことも注意される資料となろう。



第13図　地籍図[東方]による調査位置（○印）



No.	遺跡名称	時　代
1	中根北城	
2	中根中城	
3	中根南城	
4	山崎城	天正8(1580)廃
5	弥左衛門屋敷	
6	山崎砦・弥左衛門屋敷	
7	新屋敷遺跡	天正年間廃
8	島崎城	長享2 (1488)
9	大地群城	
10	丸根城	
11	極中村城	
12	戸部一色城	
13	門部城・門部屋敷	永禄9(1566)廃
14	寺部城	弘治1(1555)廃
15	南部城	永禄7(1564)廃
16	岡崎城	天正16 (1588)
17	丹下城(丹下砦)	天文22(1553)創

第14図　発掘調査地点（○印）と中世城館跡の分布（2万分の1）

註

1　吉田富夫、三渡俊一郎他　1969『南区の原始・古代遺跡』　三渡俊一郎
名古屋市見晴台考古資料館　1995『春日野町遺跡　発掘調査の概要』　名古屋市教育委員会

2　藤澤良祐　1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』X　瀬戸市歴史民俗資料館

3　加納俊介　1991「土師器の編年　東海」『古墳時代の研究』6　雄山閣

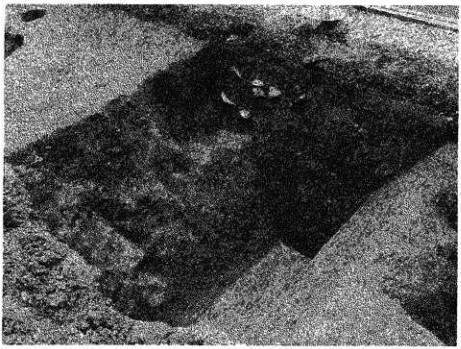
4　名古屋市見晴台考古資料館　1995『扇田町遺跡－発掘調査の概要－』　名古屋市教育委員会

5　森　泰通　1989「台付甕の出現－愛知県下の資料をもとに－」『古代文化』第41巻第11号
(財) 古代学協会

6　鈴木正貴　2000「伊勢湾東岸地域の土師器内耳鍋に関する2、3の問題」『考古学フォーラム』12　考古学フォーラム編集部

7　野口泰子、伊藤厚史　1993『見晴台遺跡発掘調査報告書－遺構編－』名古屋市見晴台考古資料館　に掲載の図を引用・作成した。

正木町遺跡（第11次）



SD1とSK9

例言

1　本編は、名古屋市中区正木一丁目1606番４で実施した、正木町遺跡第11次発掘調査の報告である。

2　発掘調査は、住宅建設に先立ち、32㎡を対象に実施した。

3　現地調査期間は、1999（平成11）年８月16日から９月８日であった。

4　調査は、名古屋市見晴台考古資料館が実施し、同館学芸員（伊藤厚史・伊藤正人）が担当した。

5　整理作業のうち遺物実測・図版作成の大半は、稲田望子が担当した。

6　本編では、海抜高はT.P.（東京湾の平均海面）を、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を示した。

7　調査記録・出土遺物は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

8　本編の執筆は、伊藤正人が行った。

目次

1　はじめに……83

2　調査の経過……84

3　調査の成果

(1) 土層……85

(2) 遺構……88

(3) 遺物……91

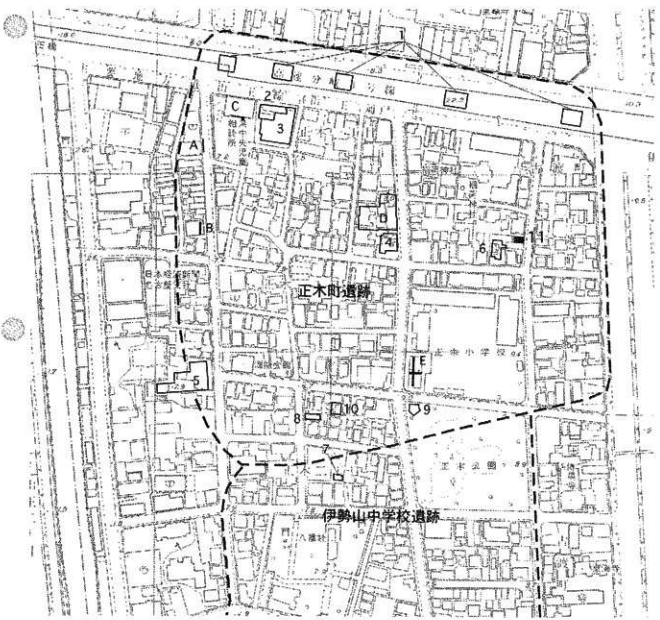
4　まとめ……99

第１図　正木町遺跡の位置（国土地理院１／５万地図「名古屋北部」を使用）

1　はじめに

正木町遺跡は、中区正木一丁目を中心に、約350m四方を範囲とする。南方に連なる伊勢山中学校遺跡とともに、古墳時代から古代にかけての、名古屋台地における拠点的な遺跡として知られている。遺跡は、堀川に沿って南北に続く台地縁に位置し、西方には濃尾平野へと広がる沖積低地を見渡すことができる。標高９ｍ前後の台地面は、基本的に北から南へ、東から西へ低くなるが、総じて平坦である。

これまでの調査で、弥生時代の方形周溝墓（５次）や竪穴住居跡（３次）、古墳～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡（1･3･4･5･6次･C）や井戸（D）、中世の大溝（堀）（3･4･6次･D）や井戸（１次）･掘立柱建物跡（３次）などがみつかっている。弥生時代の遺構は、堀川沿いの台地縁に分布する。古墳～平安時代の遺構は、遺跡の北半に濃密である。中世の遺構も同様であるが、南半は中世の城館（？）築造時に削平された可能性がある。第２図に、これまでの調査地点を示したが、広大な遺跡の構造を把握できるほどの情報は、未だ得られていない。各調査の詳細を記す余裕はないので、巻末に各調査報文の一覧を掲載した。



第２図　正木町遺跡の範囲と調査地点（1：3,000）(p.100の【正木町遺跡に関する文献】を参照)

2　調査の経過

調査は、個人住宅の建設（建て替え）に伴って実施した。旧家屋撤去に合せて着手する日程とし、1999（平成11）年8月16日から9月8日までが工期であった。敷地面積が、約50㎡と狭いため、安全のため周囲に余地を残して、掘削面積は32㎡であった。これをさらに南北（前・後半）の2区に分けて掘削した。各区は、おおむね東西8m、南北2mであったが、排土置き場が狭かったため、両区の間で一部調査できなかった範囲もあった。調査は、天候に恵まれて順調に進み、工事期限に数日を残して現地作業を終了した。以下、掘削着手から埋戻し終了までの期間を、日誌抄として記す。

8月17日（火）　北半区の掘削に着手。小型バックホウにより表土を剥いだ時点で、包含層（黒色土）上面で遺構を確認。二面調査の必要を認識し、上層遺構の検出・掘削を進める。

18日（水）　上層遺構の掘削を終え、写真を撮影する。上層遺構にかからない部分で、黒色土の掘削に着手。

19日（木）　雨でほとんど作業できず。黒色土掘削をわずかに進めた。

20日（金）　上層遺構の平面図を作成。黒色土の掘削を進める。一部で地山面（下層）遺構の検出・掘削に着手。

23日（月）　黒色土の掘削終了。下層遺構の検出・掘削を進める。

24日（火）　北半区の掘削終了。写真撮影をおこない、平面図の作成に着手。

25日（水）　平面図および東・西・北壁の土層図作成。北半区の調査完了。

26日（木）　北半区埋戻し。南半区表土剥ぎ。SD1の続きなど、上層遺構の調査に着手。

27日（金）　上層遺構を検出・掘削し、写真撮影と平面実測をおこなう。

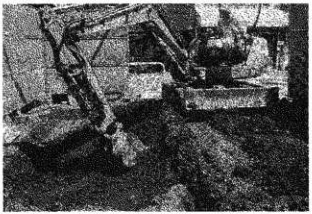
30日（月）　黒色土掘削。下層遺構の検出・掘削に着手。

31日（火）　下層遺構の掘削を完了。写真撮影をおこなう。

9月1日（水）　平面図作成に着手。降雨のため、断続的に作業。

2日（木）　平面図・上層図（東・西・南壁）を作成。

3日（金）　埋戻し、復旧をおこなう。



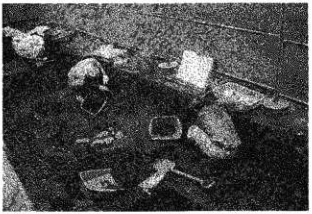


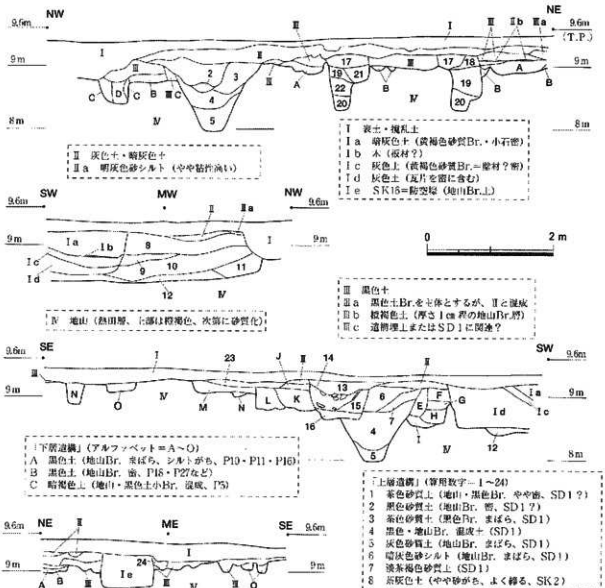
写真1　調査状況

上：調査地点の着手前近景（南東から）
中：北半（前半）調査区の表土掘削状況（西から）
下：同上調査区の作業状況（東から）

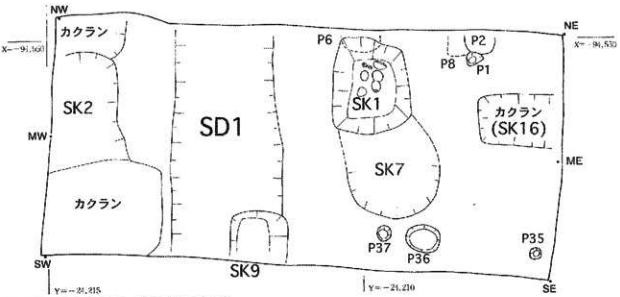
3　調査の成果

(1)　土層

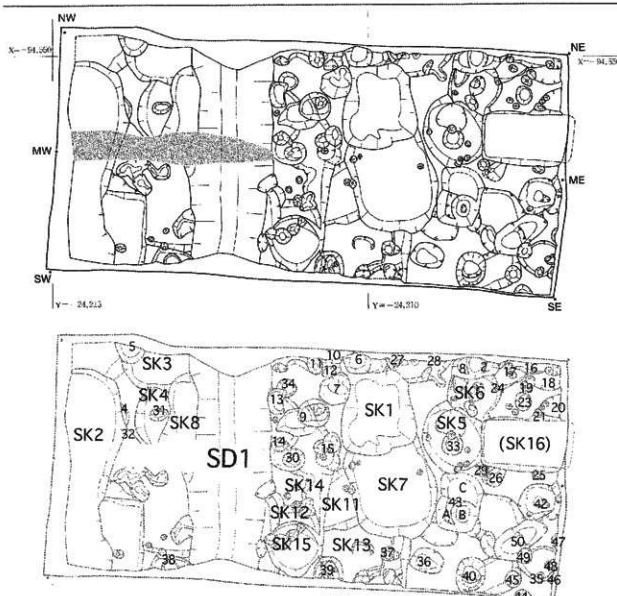
調査地点の基本土層は、Ⅰ表土、Ⅱ灰色・暗灰色土、Ⅲ黒色土、Ⅳ地山（橙褐色土＝熱田層上面）に大別される。Ⅰは、現代の形成土・攪乱土である。Ⅱは、近世から近代の形成土と考えられる。過去の調査地点では、中～近世の包含層となる場合もあったが、この地点では遺構理土を除いて、近世以前と明確に捉えられる部分はなかった。Ⅲは、平安時代以前の包含層または遺構理土と考えられる。



第3図　土層断面図



第4図　上層（黒色土上面）遺構平面図



第5図　下層（地山面）遺構平面図

第1表　遺構一覧表

◎上層欄は，黒色土層より上で掘り込み面が確認できた遺構に，○をつけた。

◎埋土欄の＋は地山ブロックを，sは焼土ブロックを含むことを示す。

◎径欄の単位はcm，長径×短径を示す。数値は5cm毎に二捨三入，＋はそれ以上で不明を表す。

◎深さ欄の単位もcm（数値処理同上），確認できた深さを示し，いずれもこれ以上の深さがあった。

◎底面高欄の単位はm（数値処理同上），遺構底面の高さをT．P．で示している。

◎遺物欄は，土器，須恵器，山茶碗，陶器，染付，かわらけを，最初の1文字に省略。

遺構名	上層	埋土	径	深さ	底面高	時期	遺物	遺物図	備考
SK1	○	暗灰色土	140×120	45	8.65	近世	近世(陶8, 染6, か20, 丸2, 上管1), 須17, 土17, 山1, 鉄片1	第7図12-22, 24-29	底面に石を並べる
SK2	○	暗灰色土	320+×100+	75	8.45	近世	近世(陶27, 染12, か12, 土器2, 瓦3, 赤物？3), 須11, 土6, 山2, 鉄片2	第6図8-11, 第7図23, 第8図4, 第9図50-52	
SK3		黒色土	105+×60+	25	8.75	中世	土21, 須12, 山3		
SK4		黒色土＋	90+×60+	10	8.85		土30, 須8(復礼跡)		SK8との関係不明
SK5		黒色土	120×120	30	8.70		土48, 須15		
SK6		黒色土	85×70-	20	8.80		土45, 須16		
SK7	○	暗灰色土＋	145×140+	30	8.90	近世	近世(陶9, 土24, 瓦3), 土27, 須18, 山4, 土器1		
SK8		黒色土＋s	120-×60	30	8.55		土4, 須18, 寄目瓦1	第6図9	
SK9	○	暗灰色土	95×80+	50	8.65	近世	近世(陶20), 染5, か10, 土器2), 土8, 須8など	第5図84-6, 第9図63-77, 第10図8	
SK10		黒色土	-	-	-		土15, 須27, 寄目瓦2		SK12・14, P41の上部
SK11		黒色土	90×60+	15	9.00		土1		単独の遺構か否か？
SK12		黒色土＋	120+×75+	30	8.75		土72, 須20, 寄目瓦1		SK9に切られる
SK13		黒色土	140+×100+	15	9.05		土7, 須1		住居跡？
SK14		黒色＋	80+×80+	20	8.85		土15, 須5		
SK15		黒色＋	90×85	20	8.60	古墳	土師器2	第6図1・2	SK9・12に切られる
SK16	○	褐灰土	140×80	50	8.65	近代	土31, 須28, か9, 山5, 磁石1		陽空母(採取り穴跡)
SD1	○	暗灰色土＋	360+×175	125	7.95	中世	土34, 須28, か9, 山5, 磁石1		単独の遺構か否か？
P1	○	炭色砂質土	25×20	20	8.95	近世？			上層，P2を切る
P2	○	暗灰色土	50×30-	85	8.30	中世？	土15, 須9, 山3, 鉄1		P8を切る？
P3		暗灰色土	-	-	-	不明			消失
P4		暗灰色土	35+×10-	10	8.85		土1		SK2に切られる？
P5		暗灰色土	50×30+	40	8.40		土5, 須4		SK3を切る？
P6	○	暗灰色土＋	60×35+	70	8.30	中世？	土10, 須3		
P7		黒色土＋	55×45	35	8.55	近世？	土25, 須9, 近世陶1		
P8	○	黒色土＋	35+×25+	55	8.40		土18, 須8		P2の母方？
P9		黒色土	85×45	40	8.50		土42, 須21, 土師1		複数単独？
P10		黒色土＋s	30×10+	20	8.85		土2, 須3		
P11		黒色土＋s	30×25	15	8.85				
P12		黒色土	20×15	15	8.75		須1		
P13		黒色土＋s	40×25	15	8.75		土4, 須3		
P14		黒色土＋	25×20	15	8.70		土7, 須2		
P15		黒色土＋	50+×40	35	8.55		土3, 須1		複数重複？
P16	○	黒色土s	85×20+	10	8.85		土1		複数重複？
P17		黒色土＋	50+×30+	5	8.95		土2		複数重複？
P18		黒色土＋	60+×30-	10	8.90		須1		浅い凹み
P19		黒色土＋	20×15	5	8.95		土2, 須1		浅い凹み
P20		黒色土＋	40+×30+	10	9.00		土4		浅い凹み
P21		黒色土＋	15×10	15	8.90				
P22		黒色土＋	-	-	-	不明			消失
P23		黒色土＋s	30×25	25	8.75		土1		
P24		黒色土	10×10	25	8.75				柱？
P25		黒色土＋	20×10+	15	8.85				
P26		黒色土＋	30+×25	45	8.55		土9, 須1		
P27		黒色土＋	20×10+	5	8.95		土2		浅い凹み
P28		黒色土＋	50×30+	10	8.95		土1		浅い凹み
P29		黒色土＋	20×20	25	8.75		土2		
P30		黒色土＋	35×20+	20	8.70				
P31		黒色土	30×20	10	8.80		土3		SK4との切合？
P32		黒色土＋	30+×20+	10	8.85				
P33		黒色土＋	35×35	20	8.55				SK5との切合？

第1表　遺構一覧表（つづき）

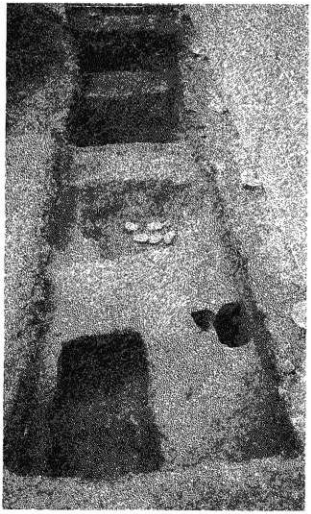
遺構名	上層	埋土	径	深さ	底面高	時期	遺物	遺物図	備考
P34		黒色土－	30×30-	10	8.80				
P35	○	灰色砂質土	20×20	15	9.00		土2, 91		
P36	○	灰色砂質土	55×40	10	9.15	近世	かく(近世)1		
P37	○	灰色砂質土	25×25	10	9.10	中世？	土2, 93 4, 山2		
P38		黒色土	65+×25-	20	8.55		土7, 93 7		
P39		黒色土	45+×35-	20	8.80		土10, 93 2		
P40		黒色土＋	50×45	35	8.85		土18, 93 9		
P41		黒色土	-	-	-		土17, 93 9		消失
P42		黒色土－	60×55	55	8.55		土2, 93 3	SN6第3	
P43A		黒色土＋	50+×35-	25	8.85		土2		
P43B		黒色土－	50×45	40	8.70		土8, 93 7		礎石, A・Cを切る？
P43C		黒色土－8	65×60+	30	8.80		土10, 93 5, (現意識)		
P44		黒色土	30+×15+	30	8.90				
P45		黒色土	25×25	30	8.85				
P46		黒色土	20+×10-	20	9.00				
P47		黒色土	20+×10-	15	9.00				
P48		黒色土－	15+×15	10	9.00		土2, 93 2		浅い凹み
P49		黒色土？	25×20	10	9.00				浅い凹み
P50		黒色土－	50×40	10	9.00		土1		浅い凹み

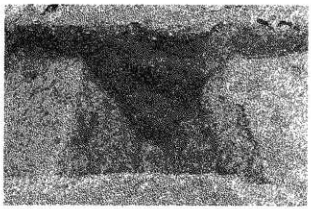
(2) 遺構

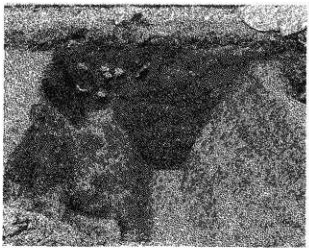
遺構は、黒色土の上面で検出された上層遺構（第4図）と、地山面で検出した下層遺構（第5図）に大別される。ただし、黒色土や黒色土を多く含む暗灰色土を埋土とする遺構は、黒色土上面での確認が困難なため、地山面で捉えた遺構の中にも、黒色土より上を掘込面とした遺構があるものと考えられる。

下層遺構は、古墳時代から平安時代の遺構が密集したものと考えられる。遺物の検討が不十分であるが、5～8世紀を主体とする遺物が、黒色土中に混在していた。時期を特定できる遺構は、土師器片を伴ったSK15のみである。SK15は深めの円形土坑の様だが、上部は遺構が複雑に重複しており、詳細は不明である。周囲の地山面から推定すれば、本来65cm以上の深さがあったものと推定される。SK13は、周溝状の溝を伴い住居跡の可能性も考えたが、全形を推定することはできず、溝の形状もいびつなため、確認できない。他にも、遺構名を冠していない部分を含めて、竪穴住居の痕跡である可能性が考えられた。調査範囲が狭く、上層遺構で寸断されているため、住居跡の存否については不明である。底面の標高が低い深めのピットは、北半に多いものの全体的に見られるが、配列を想定できるものはない。P43Bは、底面に長径12cmの楕円礫を据えており、柱の根石であったと考えられる。ただし、P43が下層遺構であると確定する根拠は、遺物が古代以前のものしか見られない事のみである。同様に時期を確定できないが、P9・P15・P23・P30・P33・P38・P39・P42などに、柱穴の可能性が指摘できる。複数が重複するピットも多く、建替えを繰り返した可能性もあるが、やはり指摘のみに留る。

上層遺構は、中世後期と江戸時代後期に大別される。SD1・P2からは、山茶碗の小片が出土し、埋土や切り合い関係からも、中世後期のものと考えられる。山茶碗は、いずれも細片で時期を特定し難いが、主に13～14世紀のものと思われる。SD1の埋没時期は、14世紀以降と捉らえられる。SD1は、肩部幅約1.5m、深さ約1.2mで、南北に伸びている。第4図の検出幅は約1.8mあるが、これは埋没後に凹んだSD1の上面を覆った上層の残存部を含めていたようである。SD1の断面は、底面幅の狭い逆台形で、埋土は人為的に埋戻したものと考えられた。P2の西約1.8mのP6も、埋土状況等がP2に似ており、同一の建物であった可能性がある。P2・P6は、ほぼ東西に並び、SD1とも軸線が一致することになる。SD1西







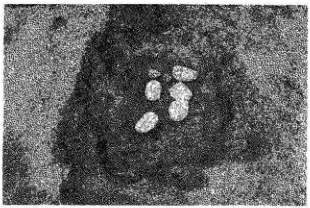


写真２　上層の遺構

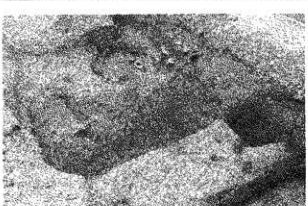
上左：南半（後半）調査区全景（東から）

上右：北半（前半）調査区全景（　〃　）

中左：北半調査区のＳＤ１（南から）

中右：南半調査区のＳＤ１・ＳＫ９（北から）

下左：北半調査区のＳＫ１（南から）



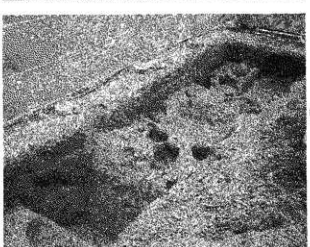


写真3　下層(地山面)の遺構

上左：南半（後半）調査区全景（東から）

上右：北半（前半）調査区全景（　〃　）

中左：南半調査区のSD1・SK15など（北西から）

中右：北半調査区のSD1以東（南西から）

下左：南半調査区のSK15周辺（北から）

側のP5は、埋土状況がP2に類似し、P2からP6方向へ約5.5mに位置している。P5を含めて1棟の建物であった可能性もあり、とすればこの建物はSD1に先行したことになる。いずれの遺構も、確実な時期を示す遺物を伴っていないため、時期の詳細は不明である。

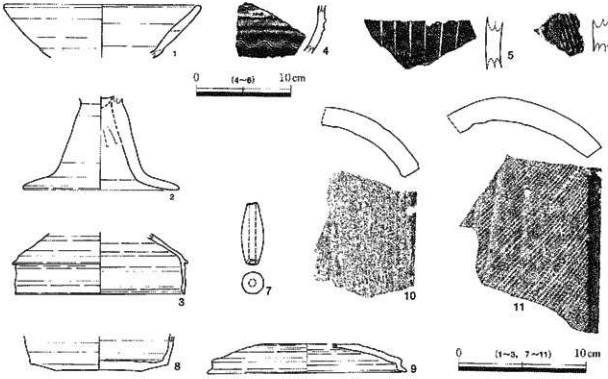
江戸時代後期の遺構は、SK1・2・7・9の大きめの土坑で、小型の遺構（ピット）に明確なものはない。SK1は、底面に河原石を敷き並べており、何かの基礎であったと考えられる。SK1南西隅は、黒色土埋土のピットが重複していた可能性がある。SK9は、埋土中に多量の陶磁器・瓦片・石片が詰められたような状況で、やはり何等かの基礎であった可能性がある。SK7は、平坦な底面のやや浅い土坑で、出土遺物は少なかった。SK1とSK7の切り合う部分は、前後半区の境界に近く、先後を確定できなかった。SK2は、西及び南で調査区外に続く大型土坑だが、南部は別遺構が重複した可能性も考えられる。

SK16は、土地所有者のご家族から、太平洋戦争中に掘った防空壕であると伺った。SK2南部を切る方形の掘乱土坑も、全形不明ながら同様な性格の可能性がある。

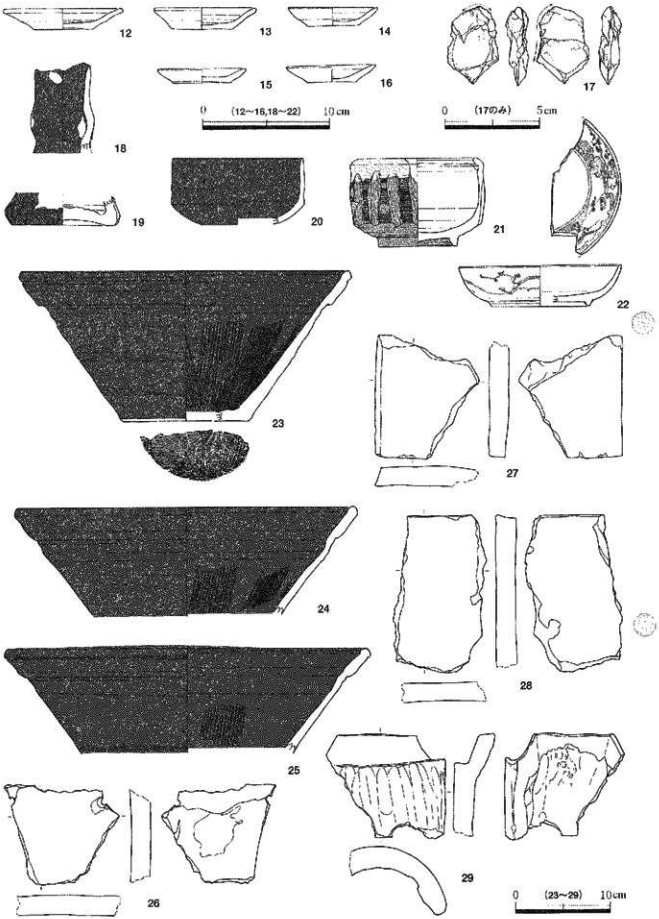
(3) 遺物

調査終了時の遺物の総量は、コンテナ（28ℓ）5箱分であった。第2表に示した遺構出土遺物の点数は、土器片約590点、須恵器片約320点、布目瓦片3点、山茶碗片15点その他（近世の遺物は後述）である。黒色土からは、土器片約450点、須恵器片約250点、布目瓦片1点、灰釉陶器片1点等が出土し、山茶碗は出土していない。他に表土・排土採集遺物が若干ある。

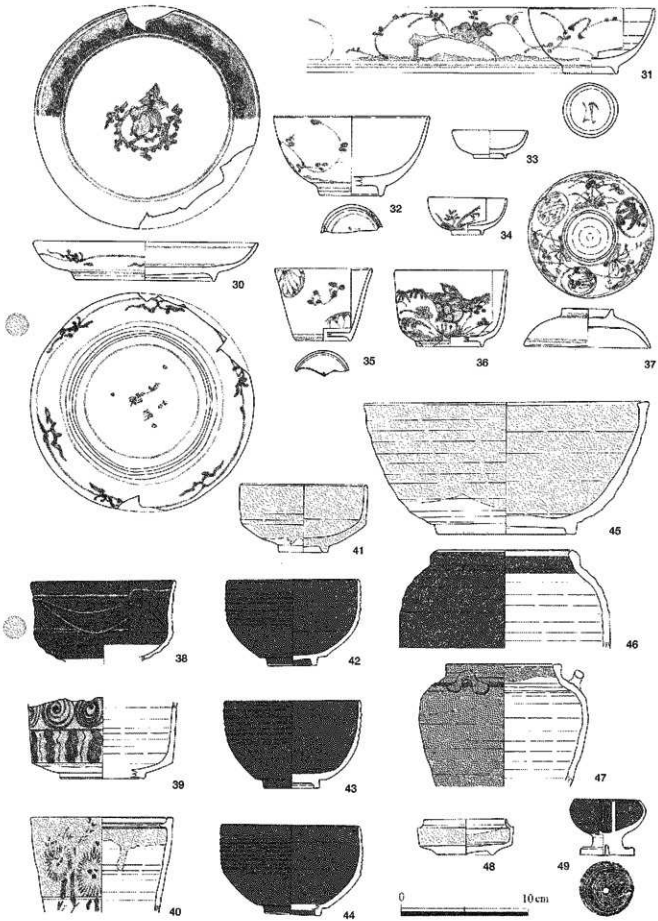
土器の大半は、古墳時代から奈良時代の土師器である。細片が多く、時期・型式を特定できるものは限られるが、特定作業は終了していない。弥生時代後期に遡る可能性を認めるものと、中世のかわらけ・土



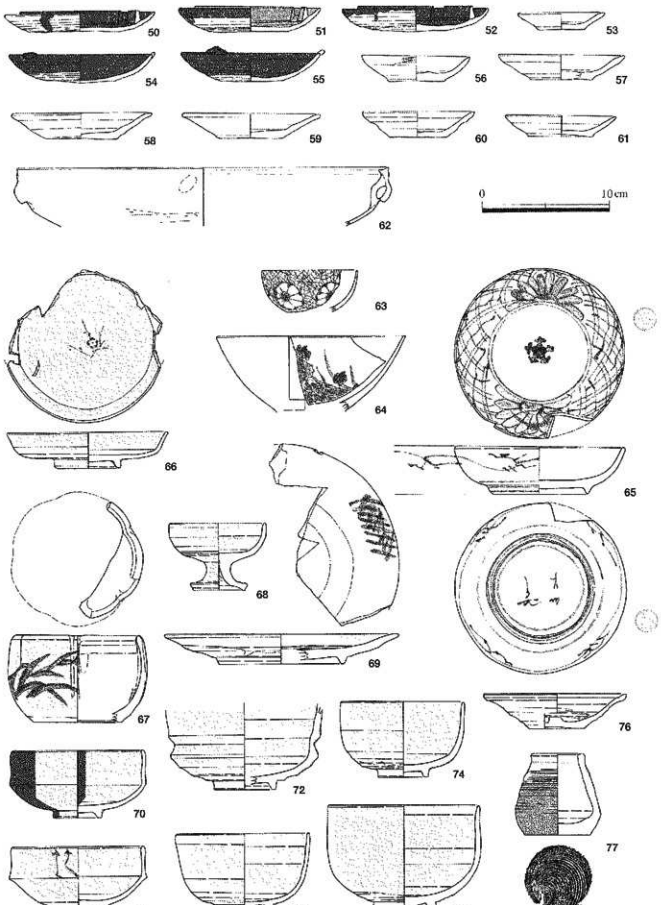
第6図　中世以前の出土遺物



第7図 SK1・2出土遺物



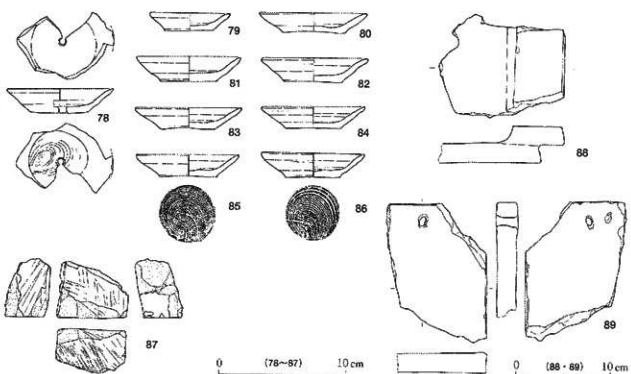
第8図　ＳＫ２出土遺物



第9図　SK2・9出土遺物

鍋片と考えられるものが、ごくわずかにある。SK15出土の高坏は、5世紀代のものである。須恵器の内訳も特定できていないが、6～8世紀が主体である。無文または平行叩き目の「陶質土器」と捉えられる破片も、わずかに含んでいる。布目瓦は、正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡でまばらに分布するが、本来遺跡内で用いられた可能性と、南方約600mに位置する尾張元興寺跡から、転用材として持込まれた可能性が考えられる。第6図6は、埴輪または移動式竈の小片である。移動式竈は、従来の調査で各所から少量の出土が知られており、遺跡内で使用されていたものと考えられる。埴輪もわずかに散布するが、現在のところ遺跡内から古墳（跡）の発見例はない。灰釉陶器は、皿の小片で、10世紀代のものと考えられる。山茶碗は、13～14世紀のもので、美濃窯の製品がやや多い。中世以前の遺物は、総じて細片化している。

近世の遺物は、SK1・2・9の出土品が大半を占める。これらの土坑は、時期的に似通っており、いずれも18世紀後半の遺物を主体としている。遺構の全形がわかるのはSK1だけであり、単純な比較をすべきではないが、出土遺物の構成は微妙に異なっていた。共通性を指摘できるのは、かわらけがまとまって出土している点で、完形品が多く、SK1やSK9では、数枚を重ねた状態で出土した例もあった。SK1では、擂鉢や瓦が目立ち、意図的に大型の破片を集めて混ぜた可能性も考えられる。SK2は、陶磁器類が多く、美濃窯産の碗や灯火具が目立つ。第8図36と同じ製品は、SK1・9からも破片が出土している。これらは接合はしないが、計3個体以上あり、3基の土坑の近似性・同時性を示すものと思われる。SK9も、陶磁器類が多いが、SK2で目立った美濃窯の製品は少ない。SK2とSK9では、わずかに貝類を含んでいた。SK9では、10cm角程度の砂岩片を多く含んでいた。大型石材の調整剥片と推定されるが、出来は確認できない。SK9からは、20×30cm、厚さ8cmの板状の礫岩も出土しており、竈材の可能性がある。なお、瓦や石片は、サンプル的に採取しており、点数比較はできない。



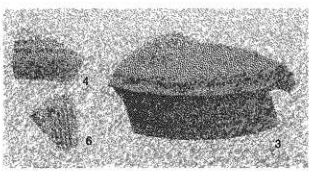
第10図　SK9出土遺物

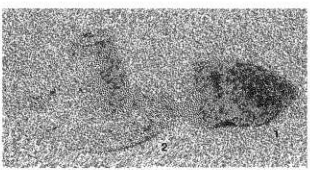
第2表　遺物観察表（法量は平均値・推定値、遺存部は図示部分同に対する段存率を示す）

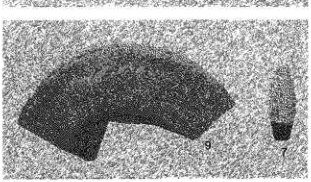
図	No	器種	出土位置	法量（cm）	遺存部	文様・調整など	写真
6	1	上師器　高坏	SK15	コ径15.6	1/5	淡色、磨耗粒わずかに含む、器面著しく磨滅(透明)	○
	2	上師器　高坏	SK15	脚端径12.4	4/5	白色(淡橙)、粗砂粒を表面に含む、器面著しく磨滅	○
	3	須恵器　坏蓋	P42	口径13.4	1/5	茶色(断面一次褐色)、白色粒子を含む、器面荒野	○
	4	須恵器　高坏	SK9	—	—	灰白色、脚上縁断、磨滅良好、暗い白熱痕	○
	5	鉄製品　鞍	SK9	—	—	灰黒色、脚上縁断、磨滅良好、暗い白熱痕、(断面の焼き甘不明)	
	6	須恵器土師器　坏	SK9	—	—	淡黄褐色、砂粒やや密、ハケ目とナデ(灰褐色)、内面ナデ	○
	7	陶器	黒色＋SD1(南西部)	残高4.8	1/4	素地10.6g、灰白色(斑点状黒色)、砂粒やや密、南端欠損？	○
	8	須恵器　坏	SK2	下側径8.11	1/2	灰褐色、白色粒子わずか、底面にヘラ記号(?)有	
	9	須恵器　蓋	SK6	口径15.7	1/3	整形ノ、灰色、磨耗粒まばら、端部ケノ、その他は別紙ナノ	○
	10	布目瓦(丸瓦)	黒色＋SD1(南西部)	—	—	淡白色(内部は暗灰色)、側面粒まばら、外面斜縄	
	11	布目瓦(丸瓦?)	SK2北半	—	—	灰色、磨耗粒まばら、縦成型痕、外面ナノ	○
7	12	かわらけ　小皿	SK1北半	推定口径9.2	1/2	暗黄褐色、胎土赤褐(赤目やや細かい)、切離しやや雑	
	13	かわらけ　小皿	SK1北半	コ径7.9	1/1	淡色、底転糸切り痕、口縁端反全周にスス付着	
	14	かわらけ　小皿	SK1北半	口径7.9	1/1	淡色、底転糸切り痕、口縁1/4周にスス付着、表面やや荒れ	
	15	かわらけ　小皿	SK1北半	口径7.9	1/1	淡色、胎土赤、底転糸切り痕、口縁の一部にスス、底部やや薄	
	16	かわらけ　小皿	SK1北半	口径6.9	1/1	淡色、胎土赤、底転糸切り痕、口縁の一部にスス、底部やや薄	
	17	火打石	SK1北半	最大長4.1	—	明淡褐色のチャート、重量35.2g、中世～近世	
	18	陶器　花入か？	SK1北半	残存径7.1	1/2	灰黄色・胎土緻、内外面ともガラス状釉、知1/2と同一個体か	
	19	陶器　花入か？	SK1北半	高径8.2	3/4	灰黄色・胎土緻、厚い釉薬、底部回転糸切痕に薄い釉	
	20	陶器　瀬戸焼	SK1	推定口径10.2	1/4	灰白色・胎土緻密、内外面ともやや厚く鉄釉かかる	
	21	陶器　火入	SK1北半	推定口径8.2	1/4	灰黄色・胎土緻密、灰白釉・褐鉄釉付かず、内面無釉	
	22	磁器　大皿	SK1北半	推定口径12.7	1/3	白色・胎土緻密、染付、高台の内縁に鉄文1条	
	23	陶器　瀬戸	SK2南半	推定口径34.6	—	灰黄色・胎土密(粗砂粒含)、内外面全体に鉄釉、鍵百平位13条	
	24	陶器　瀬戸	SK1	推定口径35.8	1/4	灰黄色・胎土密、内外面とも鉄釉、一部赤焼取、鍵百平位14条	○
	25	陶器　瀬戸	SK1	推定口径37.8	1/8	灰黄色・胎土密(細砂粒含)、内外面とも鉄釉、指目平位14条	
	26	砥？	SK1		—	灰白色・胎土密、黄褐孔2か所	
	27	平瓦？	SK1		—	淡色～にぶい褐色、胎土やや密(粗砂粒含)、表面縦ナデ？	
	28	平瓦？	SK1		—	淡色～にぶい褐色、胎土やや密(細砂粒含)、粗ナデ？、凝灰砂	
	29	有段丸瓦	SK1	残存長10.3	—	淡色～灰白色、胎土密、段部は縦方向のナデ	○
8	30	須恵器　皿	SK2中央12層上面	口径17.5	2/3	染付、口縁、墨書き、高台端部は無釉	○
	31	須恵器　椀	SK2北半	口径9.2	1/1	染付、高台端部無釉わずかに砂付着、外面口縁へラ削り痕	○
	32	須恵器　椀	SK2南半10・12層	推定口径12.2	1/3	染付、高台端部無釉わずかに砂付着、底31と又接痕成同じ	○
	33	須恵器　小椀	SK2北半	推定口径5.9	1/2	白磁、胎土緻密、内外面全体に薄釉、高台端部無釉	
	34	須恵器　小椀	SK2北半	口径8.0	1/2	染付、白色、胎土緻密、文様2単位、高台端部無釉	
	35	須恵器　瀬戸焼？	SK2南半	推定口径7.6	3/8	染付、白色、胎土緻密、高台端部無釉	○
	36	陶器　瀬戸焼	SK2北半	口径8.8	5/8	染付、胎土緻密、高台の内縁に鉄文1条、高台端部に砂付着	
	37	陶器　鉢	SK2北半	口径9.9	1/1	染付、胎土緻密、底文は雑でつまみ部分の輪文2条は全周せず	
	38	陶器　鉢	SK2北半	推定口径11.2	5/8	発酵、胎土緻密、底部回転削り、鉄釉に炭析痕し掛け？	○
	39	陶器　高坏？	SK2南半10・12層	高台径6.4	—	白灰色・胎土緻密、鉄釉に淡黄色釉、底面無釉	
	40	陶器　水注？	SK2南半10・12層	推定口径11.2	1/3	灰色、灰釉・鉄絵、内部全体に薄く灰釉	
	41	陶器　鍋耳鍋	SK2南壁12層	推定口径9.9	—	淡黄色灰釉、口縁端部細取り部み、細り出し高台	
	42	陶器　壺	SK2北半	口径10.5	1/4	発酵、胎土緻密、鉄釉鉄絵文様、高台端部は無釉	
	43	陶器　壺	SK2南半	推定口径10.3	1/3	発酵、胎土緻密、鉄釉鉄絵文様、高台端部は無釉	○
	44	陶器　壺	SK2北半	口径10.7	2/3	発酵、胎土緻密、鉄釉鉄絵文様、高台端部は無釉、歪みあり	○
	45	陶器　鉢	SK2北半	推定口径22.2	—	淡褐色、内外面とも灰釉、底外部露胎	
	46	陶器　壺	SK2北半	推定口径10.6	—	淡黄色、外面鉄釉、口縁端部は無釉	
	47	陶器　壺	SK2南半10・12層	推定口径9.0	1/3	淡黄色、褐釉、口縁部細取り部み、指圧跡付	
	48	陶器　台子	SK2北半	推定口径8.5	1/3	淡黄色、灰釉	
	49	陶器　鍋鍋	SK2北半	高台4.3	1/1	淡黄色、内外面鉄釉、底部回転糸切り痕	○
9	50	陶器　灯明皿受	SK2南半	推定口径11.7	1/3	灰色、内外面釉薬、外面に重ね焼による釉剥痕	
	51	陶器　灯明皿受	SK2南半10・12層	口径11.1	3/4	灰色、内外面釉薬、外面に重ね焼による釉剥痕	○
	52	陶器　灯明皿受	SK2南半10・12層	口径11.5	2/3	灰色、内外面釉薬、外面に重ね焼による釉剥痕	○
	53	土師器　小皿	SK2南半	推定口径6.7	1/3	淡色、回転ナノ、底部回転糸切り痕(糸目痕と切離し痕)	
	54	陶器　灯明皿	SK2北半	口径11.2	1/1	灰色、釉付要端1か所、内外面鉄釉	○
	55	陶器　灯明皿	SK2南半10・12層	口径10.9	7/8	灰色、釉付要端1か所、内外面鉄釉	
	56	土師器　小皿	SK2南半	口径8.5	1/1	にぶい黄褐色、内外面磨滅、口縁にスス(?)付着	
	57	土師器　小皿	SK2南半	推定口径9.9	1/3	にぶい褐色、内外面とも磨耗、回転糸切り痕	○
	58	土師器　小皿	SK2北半	口径10.8	1/1	明黄褐色、淡褐ナノ、見込指圧痕、底部回転糸切り痕	
	59	土師器　小皿	SK2北半	推定口径10.7	1/2	淡色、内外面磨耗、口縁端部にかぶにスス(?)付着	
	60	土師器　小皿	SK2北半	口径8.8	1/4	淡色、体部強いナノ、見込ユビナノ、底部回転糸切り痕	
	61	土師器　小皿	SK2北半	推定口径8.7	1/2	にぶい褐色、外面強風、底部内黒ぎみ、回転糸切り痕	
	62	土師器　鉢状	SK2南半	推定口径29.3	—	にぶい褐色、鉢状多角、外面スス付着、体部下王ケズリ	

第2表　遺物観察表（つづき）

図	No.	器種		出土位置	法量（cm）	遺存部	文様・調整など	写真
9	63	鉢類	小鉢	SK9	推定口径7.4	1/2	染付，粘土塊底，1段縁部丸いが平面にうすい	
	64	鉢類	うがい鉢	SK9	推定口径14.8	－	染付，粘土塊底，内面呉須横線文，外面無文	
	65	皿類	皿	SK9南壁14層	口径13.2	1/1	染付，粘土塊底，見込コンニャク刷五弁花，高台端に砂付着	○
	66	鉢類	皿	SK9	推定口径12.3	1/2	灰黄色，灰釉，削り出し高台，見込に木刷毛で呉須絵（枝に梅花）	○
	67	陶器	向付	SK9	推定口径9.8	1/4	褐灰色・胎土緻密，5単位花唐草，灰釉，鉄絵	
	68	陶器	仏餉具	SK9	器高5.3	1/4	灰黄色・胎土緻密，灰釉	○
	69	陶器	鉢	SK9	口径18.5	1/3	灰白色，灰釉，鉄絵，反転ヘラ削り	○
	70	陶器	鐵沢碗	SK9	推定口径10.2	－	灰黄色・胎土緻密，内外面灰釉と鉄絵の掛け分け	
	71	陶器	鐵沢碗	SK9	推定口径10.3	1/2	灰黄色・胎土緻密，内外面灰釉，鉄絵部不明瞭	○
	72	陶器	碗	SK9	推定台径4.8	1/2	灰色，灰釉，削り出し高台内側ユビナデ痕あり	
	73	陶器	丸碗	SK9	口径10.4	3/4	灰黄色・胎土緻密，灰釉	
	74	陶器	丸碗	SK9	口径9.6	1/1	灰黄色・胎土緻密，灰釉，高台内側は非常にうすく粕	○
	75	陶器	丸碗	SK9南壁14層	推定口径11.6	1/4	灰黄色・胎土緻密，灰釉，底部無釉	
	76	陶器	蓋	SK9南壁14層	口径11.2	1/2	にぶい黄橙色，部分的に鉄釉，底部回転糸切り痕鉄釉付着	
	77	陶器	燈芯入	SK9	口径4.1	1/1	灰白色，灰釉・鉄釉掛け分け，口縁端面鉄釉付着（使用痕）	○
10	78	土師器	小皿	SK9	推定口径8.4	－	橙色・胎土緻密，回転ナデ，見込中央に穿孔，回転糸切り痕	○
	79	土師器	小皿	SK9	推定口径6.2	1/2	橙色・胎土密，見込指圧痕，内面油煙多い，回転糸切り痕	○
	80	土師器	小皿	SK9	口径6.2	1/1	橙色・胎土密，内面油煙やや多い，回転糸切り痕	○
	81	土師器	小皿	SK9	推定口径8.2	1/3	橙色・胎土密，内外面磨耗，回転糸切り痕かすかに残る	
	82	土師器	小皿	SK9	口径8.1	3/4	橙色・胎土密，回転ナデ，表面剥離多い，底部回転糸切り痕	
	83	土師器	小皿	SK9	口径8.1	3/4	橙色・胎土密，見込指圧痕，回転糸切り痕，焼成し難	○
	84	土師器	小皿	SK9	推定口径8.3	1/2	橙色・胎土密，見込表面剥離，回転糸切り痕	
	85	土師器	小皿	SK9	口径7.9	1/1	暗色・胎土密，見込指圧痕（薄），口縁端部内記メス付着	○
	86	土師器	小皿	SK9	口径8.0	1/1	黄褐色・胎土密，回転ナデ（丁寧），見込指圧痕	○
	87	砥石		SK9	－	－	白色凝灰岩，重量36.5g，1面を2段に使い分け	
	88	瓦		SK9	－	－	いぶし瓦，灰白色，粘土密	
	89	瓦または塼		SK9	－	－	いぶし瓦，灰色，粘土密，孔1つ確認	







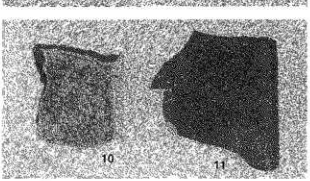


写真4　中世以前の遺物

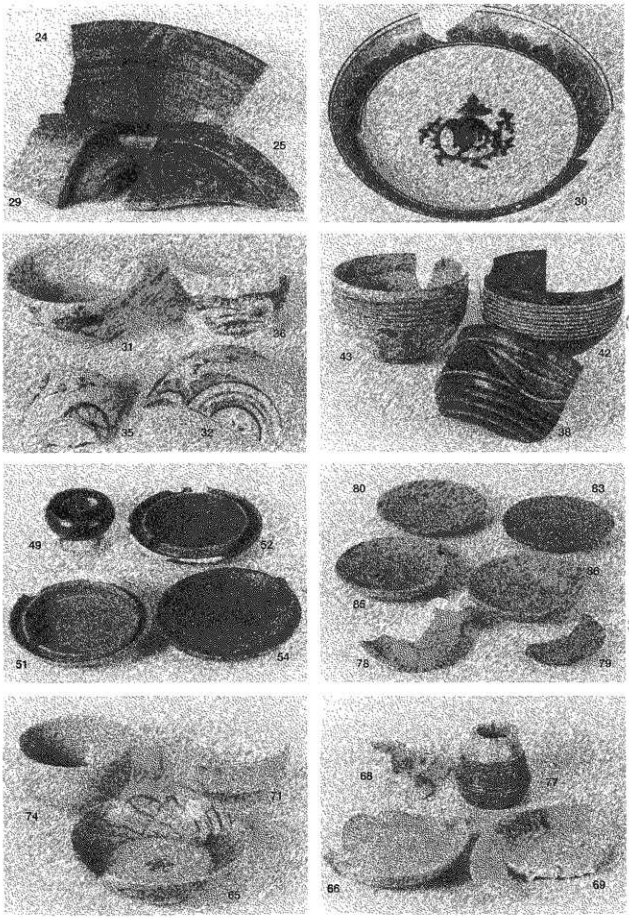

24
25
29
30
31
36
35
32
43
42
38
49
52
51
54
80
83
86
88
78
79
74
71
65
68
77
66
69

写真5　近世の遺物

4　まとめ

遺物の検討が不十分な点を認めつつ、今までの調査成果を参考にして、時期毎の様相をまとめておく。

下層遺構は、古墳～奈良時代の遺構が密集したものであるが、具体的な把握ができた例はない。竪穴住居などの建物が存在した可能性を考えたが、SK15のような中型で深めの遺構も存在していた。この地点では8世紀の内には遺物が激減し、以後中世後期までは空白に近い様相を示す。

中世の遺物もわずかで、時期を確定するのが難しいが、美濃窯産の山茶碗の特徴から、14世紀が中心のようである。ただし、わずかな遺物の時期であって、遺構の時期を示すとは限らない。柱間1間の掘立柱建物の存在が推定され、前後して大溝（堀）が築造された。軸方位の一致は、両者の造営が同じ企画・規制に基づいたことを示すものであろう。遺物の少なさは、この地点が非生活域であった可能性を示すが、如何せん調査範囲が狭く、判断できない。大溝に区画機能があったとしても、内外は不明である。大溝は、遺物をほとんど含まない土で、人為的に埋戻されたと考えられた。正木町遺跡では、同様な規模・断面形・埋没状況を示す溝（堀）が、広範囲で発見されている。相互の関連は不明だが、これらは16世紀前半の古渡城築城に伴って廃絶した可能性が指摘されている。

江戸前期には、明確な遺構・遺物は見られない。史料を繙くと、正木町付近が城下に率する地域となったのは、享保十一年（1726）のことである。これは、四代藩主徳川吉通の命で、正徳三年（1713）に丹羽郡石枕村（現江南市）から移された稲荷社の造営によって、周辺の都市化が進んだことも要因であろう。実際、造営前後の成立とされる『尾府名古屋図』には「畑」としか記されていないが、明和～安永の内（1770年代）の成立とされる『尾州名古屋御城下之図』には、「稲荷」をとりまく町並みが示されている。稲荷社の様子は、七代藩主宗春の治世(1730～39)の城下の賑わいを描いた『享元絵巻』や、天保十五年(1844)刊の『尾張名所図会』に見ることができる。「古渡稲荷」「山王稲荷」とも呼ばれる稲荷社は、境内規模を縮めつつも、現在も調査地点北方にある。建造物は、すべて近年のものであるが、境内には創建時に遡る

第11図　「古渡稲荷社」（『尾張名所図会』より）

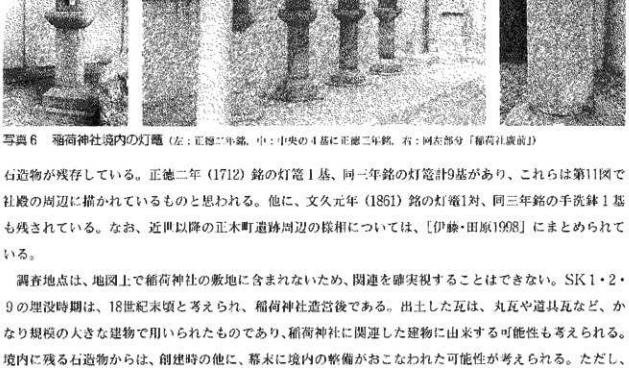


写真6　稲荷神社境内の灯籠（左：正徳二年銘，中：中央の4基に正徳二年銘，右：同左部分「稲荷社裏前」）

石造物が残存している。正徳二年（1712）銘の灯篭1基、同三年銘の灯篭計9基があり、これらは第11図で社殿の周辺に描かれているものと思われる。他に、文久元年（1861）銘の灯籠1対、同三年銘の手洗鉢1基も残されている。なお、近世以降の正木町遺跡周辺の様相については、［伊藤・田原1998］にまとめられている。

調査地点は、地図上で稲荷神社の敷地に含まれないため、関連を確実視することはできない。SK1・2・9の埋没時期は、18世紀末頃と考えられ、稲荷神社造営後である。出土した瓦は、丸瓦や道具瓦など、かなり規模の大きな建物で用いられたものであり、稲荷神社に関連した建物に由来する可能性も考えられる。境内に残る石造物からは、創建時の他に、幕末に境内の整備がおこなわれた可能性が考えられる。ただし、幕末の神社の動向と関わる遺構・遺物は、調査地点では確認されていない。

中世以前については、なお遺物の分析が必要であるが、おおむね従来の遺跡様相が追認された。近世は、稲荷神社との関連を推定したが、史料の詳細な分析を進めることで、より具体的な記述を示せる可能性もある。小面積の調査ではあったが、貴重な成果を得ることができた。

【参考文献】
愛知県郷土資料刊行会　1973（再復刻）『尾張名所図会』
小池富雄他　1999『新修名古屋市史第三巻』名古屋市　（付図『享元絵巻』）
名古屋市蓬左文庫編　1987（復製）『尾州名古屋御城下之図』『尾府名古屋図』

【正木町遺跡に関する文献】
◎　行頭の記号は、第2図の調査位置記号に対応している。
◎　市教委9次以前の各調査の概要は、『埋蔵文化財調査報告書29』にまとめられている
A　三渡俊一郎　1986「正木・二月遺跡」『千種・東・中区の考古遺跡』名古屋市教育委員会
B　櫛田良洪　1957「愛知県名古屋市正木町貝塚」『日本考古学年報』5　日本考古学協会編
C　伊藤禎樹　1969「正木町遺跡調査速報－破壊に対する問題点－」『名古屋考古学会会報』12　名古屋考古学会
C　伊藤禎樹・小林義孝　1991「尾張正木町遺跡出土の初期須恵器」『韓式系土器研究』Ⅲ　韓式系土器研究会
D　宗久仁子他　1997『南山大学大学院考古学研究報告第7冊　正木町遺跡』南山大学大学院考古学研究室
E　名古屋市教育委員会　1983『昭和57年度埋蔵文化財発掘調査概要報告書』
1　竹内宇哲　1986『正木町遺跡発掘調査概要報告書』名古屋市教育委員会（以下同じ）
2　竹内宇哲　1988『正木町遺跡第2次発掘調査概報』
3　竹内宇哲　1989『正木町遺跡第3次調査概報』
4　野口泰子他　1991『正木町遺跡第4次発掘調査概要報告書』
5　野口泰子　1996『正木町遺跡－第5次調査の概要－』
6　木村有作　1996『正木町遺跡第6次発掘調査概要報告書』
7～9　伊藤厚史・田原和美　1998『埋蔵文化財調査報告書29　正木町遺跡（第7次～第9次）』
10　田原和美　1999『正木町遺跡第10次発掘調査報告書』

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	高蔵遺跡(第24次・第25次)　瑞穂遺跡(第5次)　春日野町遺跡(第2次)　正木町遺跡(第11次)
巻次	34
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	46
編著者名	水野裕之・伊藤正人・伊藤厚史・服部哲也・村木誠
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026　名古屋市南区見晴町47　TEL (052)823-3200　FAX (052)823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　名古屋市中区三の丸三丁目1番1号　TEL (052)972-3268
発行年月日	2000年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 ㎡	調査原因
たかくらいせき 高蔵遺跡	あつたくほりかわちょう 熱田区外上川町806	23100	12-2	35° 5′ 58″	136° 54′ 21″	1999.8.16～ 1999.9.14	180	住宅建設
たかくらいせき 高蔵遺跡	あつたくたかくらちょう 熱田区高蔵町1－1	23100	12-2	35° 5′ 2″	136° 54′ 21″	1999.10.12～ 1999.11.26	165	個人住宅建設
ずいほいせき 瑞穂遺跡	みずほくとよおかちょう 瑞穂区豊岡通2-10	23100	11-21	35° 7′ 24″	136° 56′ 06″	1999.8.2～ 1999.8.27	70	個人住宅建設
かすがのいせき 春日野町遺跡	みなみくかすがのちょう 南区春日野町35-2、36-2	23100	15-29	35° 6′ 53″	136° 56′ 32″	1999.11.8～ 1999.12.7	190	個人住宅建設
まさきちょういせき 正木町遺跡	なかくまさきいっちょうめ 中区正木一丁目1606番4	23100	7-19	35° 8′ 58.4″	136° 54′ 3.6″	1999.8.16～ 1999.9.8	32	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	上な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高蔵遺跡	集落遺跡	弥生時代～古代	土坑、ピット	弥生土器、須恵器、土師器	第24次調査
高蔵遺跡	集落遺跡	古墳時代	溝	須恵器、埴輪	第25次調査
瑞穂遺跡	集落遺跡	弥生時代	住居跡、土坑	弥生土器	第5次調査
春日野町遺跡	散布地	古墳時代 室町時代	住居跡 溝状遺構（堀）	土師器 中世陶器	第2次調査
正木町遺跡	散布地・貝塚	古墳時代、古代 中世 近世	土坑・ピット 大溝 土坑	土師器・須恵器 山茶碗 陶磁器	第11次調査

名古屋市文化財調査報告46

埋蔵文化財調査報告書34

2000年3月28日

編集　名古屋市見晴台考古資料館
発行　名古屋市教育委員会
　　名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
印刷　菱源印刷工業株式会社